内閣総理大臣賞

「納税」という名の優しさ

福岡市立春吉中学校３年
内海　璃子

私の妹は小学六年生で、ミュージカル俳優になるという大きな夢に向かって、毎日レッスンや自主練習に励んでいる。鏡の前で、心の底から楽しそうに踊る姿は、私の自慢だ。そして、そのそばで彼女の夢を支えるのは耳についた小さな機械である。妹は、十万人に一人と言われる「両耳外耳道閉鎖症」という障害を持ち、音が聞こえにくい状態で生まれた。私たちが当たり前に聞いている音が、生まれてすぐの妹にはほとんど届かない状態だったのだ。当時三歳だった私には、そのことがはっきりと理解できたわけではなかったが、今までとは様子の違う両親の姿から、幼いながらに状況を感じ取り、不安を覚えた。

そんな中、妹が生後六ヶ月の時、私たち家族に希望の光が差した。それは、骨の振動で音を伝える「骨伝導補聴器」だ。この機械を装着すれば健常者と何ら遜色なく音を聞き取り、発語ができるようになるのである。初めて鮮明な音を聞いた妹の輝いた目は、私たち家族の記憶に強く残っている。それから、妹はあらゆる音を吸収し、三歳でクラシックバレエを習い、小学校三年生でミュージカルを始め、今では劇団に所属して自分の思うままに歌い、踊ることを楽しんでいる。

ただ、妹の夢を支えるこの補聴器は非常に高価で、私たち家族だけでは到底手が届かないものだった。それを支えてくれたのが、国からの助成金制度だ。そして、そのお金が国民の皆さんが納めた「税金」だと知った時、私ははっとした。教科書の中の文字でしかなく、買い物のたびに少し鬱陶しいとさえ思っていた税金。そんな税金が急に身近なものに感じられたのだ。顔も名前も知らない誰かの真面目な労働と誠実な納税が、巡り巡って私の妹という一人の少女の笑顔を作り、未来を育んでいる。そう気づいた瞬間、感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

この気づきをきっかけに、私は自分の周りを見渡した。毎日通う中学校の校舎、新しい教科書、帰り道を照らす街灯。当たり前だと思っていた日常は、多くの税金のおかげで成り立っていたのだと気づいた,私たちは社会からたくさんのものを与えられ、生かされている。そして大人になった時、納税という形で社会に恩返しをしていくのだ。その循環こそが、この社会を動かしていくのだと知った。

妹を支えてくれる税金は、見知らぬ誰かの「納税」という名の優しさだ。その優しさを受け取った妹は、いつか舞台の上から、たくさんの人に感動や勇気を与えることで、その恩を返していくのだと思う。

納税はただの義務ではない。それは、誰かの夢を応援し、未来への希望をつなぐためのエールだ。私もいつかこの社会の一員として、誰かの背中をそっと押してあげられる大人になりたい。妹の輝く笑顔が、この社会の優しさに守られていることに心から感謝しながら、私はその日を心待ちにしている。

総務大臣賞

「税金が照らす夢のスタートライン」

大阪教育大学附属平野中学校３年
森谷　環

私は小学生の頃から、ものづくり分野に興味があった。しかし、周りには同じようにものづくりが好きな女の子はほとんどおらず、それらを好きだということにどこか遠慮している自分がいた。

中学生になって、私は「STEAM教育とジェンダー意識による、理系女性人材育成」というテーマで探求活動を行っている。そして来年、スウェーデンに留学しようと考えている。スウェーデンは、教育とジェンダー平等の先進国であり、社会全体で性別に関係なく、誰もが自由に進路を選択できる国だからだ。私はそのような国で、理系進路を望む女性を応援するきっかけの場を提供するための知見を得たいと思う。

この留学を後押ししてくれているのが、「トビタテ！留学JAPAN」という留学支援制度だ。奨学金は主に民間の寄附によって成り立っているが、制度の運営や研修などは文部科学省、つまり税金によって支えられている。誰かの善意と、税金の両方があったからこそ、私は今、大きな一歩を踏み出そうとしている。

世の中には、自分の力だけではどうしても届かない場所がある。学費や家庭の事情、地域差。そんな壁を乗り越えるために、税金が果たしている役割はとても大きい。例えば、トビタテ！留学JAPANのような給付型奨学金は、経済的な理由で留学や進学を諦めざるを得ない若者の背中を押す。科学館や市立図書館は、誰でも利用できる学びの場として、知る喜びを平等に届けてくれる。私は、道路や建物などの見えるものだけでなく、未来の可能性という見えないものも静かに支えているのが税金だと考える。

税金というと、「取られるもの」であり、「誰かのためのお金」というイメージが先行しがちだ。しかし、私は税金について、一人ではできないことをみんなで実現するための素晴らしい仕組みだと思う。誰かが納めた税金が、誰かの人生を変える。私が今、留学に挑戦しようとすることも、誰かが納めた税金という想いの上に成り立っている。その想いがなければ、私は留学という夢のスタートラインに立っていなかったかもしれない。そう考えると、納税はただの義務ではなく、社会を良くしたいという意思表示にも思えてくる。

さて これから私は、社会の一員として生きていくわけだが、ただ納税者になるのではなく、社会を作る一人になりたいと思う。科学に心を躍らせる女の子や、宇宙に憧れる女の子が、自信を持って夢を語り、理系進路を選べる制度や教育の整備に税金を支払いたい。人はそれぞれ違うけれど、夢のスタートラインに立つ機会だけは、誰にとっても平等にあって欲しい。だから、私はその土台を支えるために学び続け、行動する一人になりたいのだ。

財務大臣賞

「ボクは税金今日もどこかで・・・」

甲府市立東中学校１年
深澤　昴

僕は、税金の立場や役割をより深く知るために税金視点で考えてみた。

ボクは税金。ボクは時々きらわれることもある。「なんでこんなに取るんだ」「税金がむだに使われている」そんな声をきくたび少し悲しい気持ちになる。でもボクは、毎日みんなを支えている。ボクは「支え合い」のカタチなんだ。

朝、みんなが登校している。教室や先生の給料。実は、その多くがボクの力でまかなわれているんだ。他にも道の整備、警察や消防災害時の復旧や避難所の設置も、実はボクが支えているんだ。ボクはいろいろな所でたくさんの人々を支えているんだよ。でもこんな声もある。「税金って、どこに使われているかわからない」たしかに、見えづらい存在かもしれない。でもボクは誰かのために使われている。一人ひとりが出してくれたお金が集まり、多くの人々や暮らしを守る力になっているんだ。

例えば突然の地震や台風が起きたとき。壊れた道路や建物の修復、避難所の設営被災者の支援。みんなの力が集まったボクだからこそ、すぐに動ける。

ボクは、主に働く人たちから集められる。なので、特に社会人からは厳しい目で見られることもある。けれど、自分の家族や大切な人を守るために、ボクが使われていると気づいてもらえるとうれしい。

もちろんボクはかんぺきじゃない。むだに使われてしまうこともあるし、疑問を持たれることもある。だからこそどう使われているかを知ってほしい。ニュースや選挙などを通して、みんなが関心を持ってくれるだけでボクはもっとよくなる。

最近では、環境問題や子育て支援、少子高齢化への対策にも使われるようになった。時代とともにボクの役割も変わっていく。未来の世代が安心して暮らせるように、これからもボクは成長し続けたいと思っている。

そして何より、ボクは「信頼」で成り立っている。どれだけ集められても、正しく使わなければ意味がない。だからこそ、ボクが信頼される存在であるために、みんなの目が必要なんだ。「みんなの目」とは、「関心、注目、監視」のことを意味しているよ。

もっと若い世代の人々にも、ボクのことを知ってほしいと思っている。ボクは大人だけの話ではない。これから社会をつくっていく中高生がもっとボクについて考えることが未来を支える力になる。

ボクは税金。見えにくいけど、みんなの生活の中にいつもいる。誰もが笑って暮らせるように、ボクは今日もどこかで支えている。

今、これをよんでいるあなた。ボクにどのような感情をいだきましたか？これを読んでもう一度税金について考え、よりよい税金の使われ方、よりよい未来になればうれしい。

文部科学大臣賞

図書館の本が教えてくれたこと

木更津市立太田中学校１年
佐藤　こはる

私は三年前に大分県大分市から千葉県木更津市に引っ越してきた。以前の家の近くには大きな図書館がふたつあり、学校の図書室もたくさんの本があった。読書が大好きで図書館へ行くことが私の楽しみだった。木更津市の図書館も楽しみにしていたが、行ってみると市立図書館は小さく、学校の図書室の本も少なくて正直がっかりした。そんな私に母が「人口も違うしね。税収が少ないか、税金の使われ方が違うのだろうね。」と言った。今回作文を書くにあたり母の言葉を思い出し、税収や税金の使われ方を調べることにした。

税金と聞いて、私は消費税しか思い浮かばなかったが 日本には所得税や住民税、法人税など四十六種類もの税金があり、それが国や地方自治体の税収となる。大分市と木更津市の税収を調べてみると、大分市は人口が多く、観光業やサービス業などが盛んなため個人市民税や消費関連の税収が多い傾向があった。一方、木更津市は商業施設や工業団地の発展より、法人市民税など企業からの税収が要となっていた。税金の種類の多さや市によって税収の内訳が違うことを理解した。

次に、税金の使われ方について調べた。税金は市民のためにさまざまな形で使われていた。両市共に全体の四割以上を民生費(子育て支援や高齢者福祉、生活保護などに係るお金)が占めていた。大分市は観光インフラや公共施設、伝統文化の維持に力を入れている他、高齢化社会に対応した福祉政策にも税金が多く投じられていた。木更津市は交通網の整備や子育て支援、公園の整備など、都市の発展と住みやすさを両立できる施策（環境費消防費）に力を入れていた。今回調べるきっかけとなった図書館や学校に係る費用は教育費に分類され両市共に全体の約一割の予算だった。細かく見ると、学校図書購入年間予算は、大分市は中学校一校あたり約九十八万円に対し、木更津市は約三十八万円であった。大きな差があり驚いたが、さらに調べていくと、子供の医療費や給食費などの補助は木更津市のほうが充実していることが分かった。

今回調べてみて、人口や産業によって税収の内訳や使われ方は都市ごとに違いがあることが分かった。それぞれ抱える課題があり、最適な税金の使い道が考えられていることを知った。私が想像していたよりもずっと毎日の生活が税金によって支えられていることを実感した。私も数年後には納税者になる。それまでに不満を嘆くだけでなく、自分の暮らす街のことや税について学びを深めていきたい。そして心を込めてしっかり納税する大人になりたい。 私はこれまで図書館でたくさんの本と出会い楽しい時間を過ごしたり、勇気をもらったり、たくさんの新しい知識を得たりした。この出会いも税金のおかげ。そう思うと感謝の気持ちがあふれた。この気持ちを忘れず日々暮らしてゆきたい。

税金と生きる

藤女子中学校３年　　前田　海音

二〇六九九〇円。一泊二日の入院費だ。私は指定難病のため定期的に通院、入院している。その際には特定医療費受給者証という手帳を提出し、医療費負担の軽減を受けることができる。結果、今回の患者負担は三万千二百円。おそらく私は生涯に渡り治療が必要なため、経済的負担が軽減される制度の充実は死活問題である。父母は「医療を不安なく受けられる社会制度はありがたいね。」と言う。私は日本の医療に感謝しつつ、同時にこのシステムが継続しうるものなのか不安も感じる。

平等に医療を受けることができる日本の国民皆保険システムは世界最高レベルである。その運用に欠かせないのが税だ。国民医療費の財源負担の内訳を見ると約四割を税により負担していることがわかる。日本の政府支出に占める医療費の割合はOECD加盟国中で最も高いことが指摘されている。病の克服は人類共通の願いであるが、財政面では手放しに喜べない。国民医療費はこの約二十年で一・五倍に増えており、税で足りない部分は公債で手当されている。公債の返済は将来世代の税収が充てられるため、負担が先送りされる。財源問題を先送りすることは政治的には可能かも知れないが、経済的には合理的な選択ではないだろう。そのため国民医療が継続するためには、保障における負担と給付のバランスについて不断の検討が重要であるし、何より国民自らが正しく申告、納税することで財源を確保することが必要なのである。

税はもともと国民の財布から出たお金とシンプルに考えてみる。所得税や消費税を通じ、巡り巡って誰かの医療費の一部となる。医療や介護、障害者福祉のニーズは生きている限り常に存在する。それらを自己責任で満たしていく社会は非現実的だ。ゆえに皆で税を出し合い、誰もが不安から自由になれる社会を保証すべきである。中学生の私が参画できるのは消費税だ。公平な税制ではないなど批判も多い税だが、消費に伴い支払われることが前提だからこそ、私達は本当に必要なものと無駄なものを選ぶことができると考える。すなわち消費税を支払うことは私達中学生ができる未来への選択行動である。税は受け身的に支払わされるものではなく、むしろ能動的に支払うものという意識を持つこと。それが自分達が社会の一員であるという自覚を養うことにもなるだろう。

お金は人の意識を引きつけ、気持ちも行動も変える力がある。痛みを分かち合い社会と生きる仲間達の幸福を支えるプロセスが民主主義なら、私達は税の話から目を逸らさずに、実現可能なあるべき社会の姿を語り合うべきだ。税の使い道を知り、自分達が決定する喜びを味わうこと。納税とは無償の愛の表現と私は思う。将来私は自分が受けた社会保障の恩恵を、納税という形で還元する目標がある。その責任を果たすために病気とうまく付き合い、税についての学びを深めていきたい。

税に助けられた命

札幌市立向陵中学校３年　　福井　清夏

「お父さんが大変！」

母の悲鳴に驚いて父の部屋に駆け込むと、意識を失って倒れている父の姿がありました。何度も名前を呼びましたが反応がなく、私は頭が真っ白になりました。

父には持病がありますが、定期的に通院して薬をのんでいれば普通に暮らすことができます。しかしその日は風邪をひいて体調が悪かったことが引き金になって倒れてしまったのです。

母は震える手で救急車を呼ぼうとしましたが、何度も番号を押し間違えるほど動揺していました。それでも電話口の消防署の方は落ち着いて状況を聞き、すぐに出動の手配をしてくれました。その冷静で優しい声に、少し気持ちが落ち着いたことを覚えています。

五分も経たないうちに救急車が到着し、四人の救急隊員の方が父の元に駆けつけてくれました。母から状況を聞きながらてきぱきと処置をしてくださる姿はとても頼もしく、心細さでいっぱいの私には後光がさして見えました。

やがて父はうっすらと目を開け、呼びかけにかすかに応えました。その瞬間、安心して全身の力が抜け、私はその場に座り込んでしまいました。父はその後病院に運ばれ、数日間入院して無事に退院できました。

助けていただいたことへの感謝と同時に、私は驚きも感じました。それは、あれだけの人や設備が関わったのに、救急車の費用がかからなかったからです。調べてみると、救急車一回の出動には約四万五千円かかり、そのお金は消費税や所得税など、私たちが納めている税金でまかなわれていることがわかりました。

私はそれまで買い物や外食の時にかかる消費税に「余計なお金を取られている」とマイナスイメージを持っていました。しかしあの日、父の命を救ってくれた救急車の出動費用も医療費の一部も、まさにその税金で支えられていたことを知って、考えは大きく変わりました。

もし医療費を全額支払わなければならなかったとしたら、安心して十分な治療を受けられなかったかもしれません。税は「余計に取られるお金」などではなく、社会全体で幸せな暮らしや命を支え合う「大切なお守り」だと強く感じました。

よく考えると、私の身の回りには税に支えられているものが山ほどありました。毎日通っている学校や教科書、大雪の翌朝、雪に埋まらずに通学できるのも除雪車の出動のおかげです。

あの日、誰かが納めた税金が私の大切な父を守ってくれた事実を私は一生忘れません。あと三年で私は納税者になります。恩返しの気持ちを込めて、見えない誰かや自分の大切な人の幸せを守る一員になれることを誇りに思いながら納税していこうと思います。

税のトリアージ

風間浦村立風間浦中学校３年　　蛸嶋　凪

今日は暑くてムシムシした一日だった。たくさん汗をかいて体がべとべとだったので早くお風呂に入りたかった。先約がいた。兄だ。兄があがるのを待ち、私に順番が回ってきた。シャワーの蛇口を捻ると、水がぽたぽた。嫌な予感。水が出ない。また断水だ。

私の地域では、今年に入りもう三回目の断水だった。水道管の老朽化による漏水が原因だ。なぜ前回の漏水の時、新しい水道管に変えなかったのだろう。お風呂に入れない悔しさと、これから数時間断水になる不便さを考えると、怒りがこみ上げた。

数日後、私は新聞で興味深い記事を見つけた。「老朽配管事故後絶たず」記事によると二〇二二年度全国の水道管破損や漏水は計二万件に上る。自治体の財源確保が急務だが、必要な予算は住民から徴収する料金収入が元手だ。私が住むような、人口減少が進む過疎地域では水道料金による収入が細り、配管更新の原資捻出が困難になっている。水道管更新、人口減少、どちらも私の住む地域が直面している問題だった。私は、自分が身近で直面している問題が全国的にも問題となっていることに驚いた。それが私の住む地域だけでなく、全国的な問題であれば、国や自治体が何か解決策を模索しているのではないかと興味がわいた。調べると、地方財政措置という言葉にたどり着いた。地方公共団体が財政的に困難な状況の場合その運営を支援するための制度で、税金を使うことができる。人口減少で水道料収益が少ない地域にとって、水道管更新の費用を住民の水道代のみから捻出するのは困難だ。地方財政措置をとることで過度な水道料の上昇を抑え、住民に負担をかけずに水道管更新が可能になるのではないか。光が見えた気がした。

これからどんどん人口が減少していく中で税金を無駄なく、いかに効率的に使っていくかが重要になってくると考える。

「トリアージ」とは、医療現場で患者の治療優先度を判断する仕組みだ。これからの日本で、税金の使い道もトリアージの概念が必要だと思った。限られた予算「税金」を適切な優先順位でどう分配するのか。例えば、教育・医療、生活インフラのどれに多く分配すべきか。公共サービスの中でも緊急性が高く、社会全体に広く影響を与える分野がどこなのか。税金を無駄なく効率的に使うために、各自治体がどのような基準でトリアージすべきか考えていくことが必要になると思う。

私ができることは、しっかり税金を納めることだ。まだ中学生なので、消費税などの少ない額だ。しかし、みんなの少しずつが大きな額となって、税のトリアージによって本当に必要とされているところに優先的に公平に分配されることへの第一歩だと思い、納税したい。

みんなで奏でる社会

秋田市立秋田西中学校３年　　石井　優菜

私たちの暮らしを支えているものの一つに「税」があります。正直に言うと、私はつい最近まで税に対して「大人が払うお金」というイメージをもっていました。ですが実際に調べてみると、教科書や道路、病院など私たちが普段当たり前のように使っているものは多くの税で支えられていると知り、意外と身近なものだと気づきました。そこで私は、税のことを自分に一番身近な音楽にたとえてみました。楽器の音は一つだけだとただの音ですが、他の楽器と合わせると曲になり、ハーモニーが生まれます。税も同じだと思います。一人一人が少しずつ納めるからこそ、社会全体を支える大きな力になるのです。私は曲を聴いているとき、必ずメロディーに注目します。小さな音一つ一つが大切で、その音の重なりから曲が完成していると思います。これも税に似ています。納める額が大きくても小さくても、みんなが協力しているからこそ社会は動いているのだと思います。音楽には、「未来へ受けつがれる」という面もあります。昔の作曲家が書いた曲を、今の私たちが授業で学ぶように税も未来へつながっています。子供たちが勉強できる学校や、公園で安心して遊べる環境を守るために、税は使われています。音楽が時代をこえて人をつなぐように、税も世代をこえて暮らしを支えているのです。

もちろん、音楽も完璧ではありません。音がそろわなかったり、誰かがテンポを速めてしまったりすると、演奏全体が崩れてしまいます。税も同じで、不公平差や無駄づかいがあれば、信頼がなくなります。だからこそ、どうすればよりよく使えるのかを考えることが大切だと思います。将来どんな道を進むとしても、社会の土台がしっかりしていなければ安心して夢を追うことはできません。税が正しく使われることで、私たちの生活も豊かになります。税というと、難しくて固いイメージがありました。でも音楽とくらべてみると、私たち一人一人が大切な「演奏者」であり、みんなの協力で社会という大きな曲を奏でているのだと思えるようになりました。私はこれからも、その一員として小さな音、小さな積み重ねを大切に過ごしていきたいです。また、これから私は、音楽のように「調和」を大切にしながら、税の役割についても考え、税はただのお金を集めるものではなく、社会全体を支える大切な仕組みであるということに自覚をもてるようにしていきたいです。

夢を叶える税金

久慈市立久慈中学校３年　　柾屋　慎太郎

僕は陸上部でハードルを専門種目にしています。先日は中学校最後の県中総体があり、設備の整った陸上競技場でこれまでの練習の成果を発揮して、三位入賞を果たしました。高校では、中学校で届かなかった全国大会に出場することが目標です。また、僕は来年高校に進学しますが、目標とする県立高校を目指し、夏休みから受験勉強に取り組んでいます。高校でも一生懸命勉強し、父と同じ国立大学医学部に進学し、医師として社会に貢献することが僕の夢です。

夏休みに税について考えたり勉強していると、先日走った陸上競技場も、僕の目指す高校も大学も全て税金のおかげで成り立っていることに気付きました。そう考えると、先日の国会議員選挙で野党各党が消費税の減税や廃止を公約に掲げ、ニュースでも議論になり、心配になりました。税収の内訳を見ると消費税が税収全体の約三割に及ぶからです。もし消費税が廃止されたら、この分の財源は何で補われるのでしょうか。ガソリン税の減税についても現在検討されていますが、これにより年間一兆円以上の減収が見込まれると聞きました。消費税やガソリン税が減税や廃止になれば、目先のことだけを考えると家計も助かると思います。一方で、減税分の財源を確保するための別の増税負担が必要になるのではないか、年金や医療介護などの社会保障にしわ寄せがいくのではないか、僕たちの将来の生活はどうなるのかなど、不安が頭に浮かびます。僕は減税イコール国民の幸せではないと思います。

僕は選挙権はありませんが、今回「税についての作文」を書くことで選挙権のない子供の意見にも耳を傾けるきっかけになってほしいと思いました。僕たちが夢を抱き、その夢に向かって安心した生活を送りながら努力するために必要なことは、減税なのでしょうか。減税よりも、安定した税収による安心の未来の方が必要だと僕は思います。そして減税よりも優先すべきは、税収の使い道を議論することなのではないかと思います。

僕は今回この作文を書くことで、税金が現在の生活だけではなく、自分の抱く夢や未来にとっていかに大切なものかを考えるきっかけとなりました。目先の利益ばかりにとらわれず、税の本質を理解し、「日本の明るい未来のための税のあり方」を一人一人が慎重に考えていくことが大切だと思います。

僕は絶対夢を叶えて、税について深い理解のもと、納税していける大人になりたいと強く思います。そのことが、僕たちの次の世代の子どもたちが夢や未来への希望を持って生活していくことにつながるのではないのでしょうか。

世界一幸せで持続可能な国、フィンランドから学ぶ税金

茨城県立並木中等教育学校１年　　樋口　美緒

みなさんはフィンランドが世界一幸せな国として「世界幸福度報告書」八年連続一位、さらに SDGｓ達成度ランキング五年連続世界一位を獲得していることを知っていますか。幸福度と SDGｓ達成度、ともに世界一位だなんて、何か大きな理由があるに違いないと興味を持ち、調べてみました。すると、国民や世界に良い影響を与える国の仕組みには税金が大きく関わっていることが分かりました。

フィンランドが世界一幸福度の高い国と評される理由には森林が多いなど、様々な理由があります。その中で特に重要な理由が、社会保障制度が充実していることです。充実した社会保障制度はSDGｓ達成にも大きく貢献しています。例えば、フィンランドは、小学校から大学院までの学費が無料です。たくさんの子育て支援もあり、私はこれがSDGｓの「質の高い教育をみんなに」を達成できている理由だと思います。また、フィンランドには、所得に関係なく平等な介護を受けられる仕組みがあり、これが将来に向けた安心感へとつながり、国民の幸福度が高くなっているのだと思いました。

これらの社会保障制度を日本と比較すると、日本は、「教育格差」という言葉を目にすることが多く、所得に関係なく平等な介護を受けられる仕組みもありません。このほんの一例からも、フィンランドの社会保障制度が充実していることがわかります。しかし、そのような質の良いサービスを行うには多額のお金がかかります。そこで登場するのが税金です。フィンランドの社会保障制度の財源は全て税金となっています。そのため、フィンランドの消費税はなんと二十四％です。二十四％という数字を聞いたとき、「高い！」と感じた人がほとんどではないでしょうか。しかし、フィンランドの国民の約八割が自国の税金制度に満足しているというデータがあります。それは納めている税金が、生活に還元されていることを日々感じられ、税金の使い方に納得できているからだと考えました。

よく耳にする「税金が高い」という考えも、税金が納得のいく使い方をされ、意義を理解することができれば変わるのではないかと思います。私たちの生活は税金によって支えられています。もしかしたら、選挙のたびに聞く「減税」も、減らした分、どこかでなくなってしまうサービスがあるのかもしれません。私は、将来選挙で税金の使い方をより良くするため、税金の使い方についての公約をよく確認して投票したいと思っています。

世界一幸せで、持続可能な国であるフィンランドから、税金の使い方が国民だけでなく世界にも良い影響を与えることを学びました。将来、私もしっかりと意義を理解しながら税金を納め、小さな力だけれど、より良い社会世界を作る一員になりたいです。

ふるさと納税は必要なのか？

栃木県立宇都宮東高等学校附属中学校２年　　吉田　華瑚

モモやブドウ、お刺身に牛タン、ハンバーグ、全国各地から届く特産品の数々。これはふるさと納税の返礼品である。他にも、ティッシュペーパーや入浴剤、ギフト券や旅行券などもある。返礼品目当てで、ふるさと納税を利用している家庭はとても多いと思う。

ふるさと納税とは、自分が生まれ育った地域や応援したい地域の自治体を、自分の意思で選んで寄付できる制度。そして、寄付金額から二千円を差し引いた額が寄付金控除として、所得税や住民税から控除される。さらに、その寄付のお礼に、返礼品として先に述べたような特産品や生活用品などがもらえるのである。つまり、きちんと納税した上で、実質二千円で返礼品が受け取れる大変お得な嬉しい制度なのである。

しかしながら、私は一つの新聞記事を目にして大きな不安を持った。それは、「県内自治体ふるさと納税実績」に関する記事で、私の住んでいる宇都宮市は、ふるさと納税が行われることによって、十五億八千万円もの収支赤字が出ているというのである（二〇二三年度）。これは、宇都宮市在住でふるさと納税を利用して他の自治体に寄付している人が多く、逆に他自治体在住の人から寄付される額が少ないということだ。本来、宇都宮市に納税されるべき額が他の自治体に流れてしまっているのである。さらに調べてみると、二〇二二年度は十四億七四〇〇万円の赤字、二〇二一年度は一億六六〇〇万円の赤字だった。もしこのまま赤字が続くと、宇都宮市は衰退していってしまうのではないか、という不安が大きくなった。

そしてもう一つ気になったことがある。それは、ふるさと納税額の半額近い額が、経費として使用されていることだ。この経費について調べてみると、返礼品とそれにかかる手数料などということだ。現行の制度では、経費は寄付金額の五割まで、そのうち返礼品に関する費用は三割までとなっている。また、仲介サイトを経由した寄付の割合は九割以上となり、仲介サイトへの手数料も高額となっている。宇都宮市では、二〇二三年度は六つの仲介サイトに掲載していて、手数料は六三九七万円だったという。つまり、ふるさと納税を利用すると、寄付額の半額ほどしか税金として利用されていないのである。

ふるさと納税を利用すると、その三割ほどの返礼品を受け取ることで個人が得をする。しかしながら、宇都宮市のように住んでいる自治体が赤字となれば、日々の生活に潤いがなくなってくる。もし、返礼品が一切なくなったら、純粋にふるさと納税をしたいと思う人はどれくらいいるのであろうか。現状の返礼品ありきのふるさと納税、これは本当に必要な制度なのだろうか。私は、税金は税金として利用される方が、結果として個人にもプラスになるのではないかと思う。ふるさと納税、返礼品以外にも注目して欲しい。

税金のありがたさ

群馬大学共同教育学部附属中学校２年　　飯島　真希

私は小さいころ、家族の都合でアメリカに住んでいたことがあります。その経験を通して、日本とアメリカの生活のちがいを強く感じました。特に、病院や学校、道路など、日常生活に関わる部分で「税金の使われ方」が大きく影響していることに気づきました。

アメリカで生活して一番大変だったのは、医療費の高さです。日本では病院に行くと、保険証を出せば治療費の多くを公的医療保険が負担してくれます。しかし、アメリカでは保険に入っていなければ全額を自分で払わなければなりません。たとえば風邪で病院に行くだけでも数万円かかることがあり、家族は「できるだけ病院に行かないようにしよう」と話していました。病気やけがをした時に安心して受診できる日本の医療制度は、税金によって支えられているのだと改めて実感しました。

また、学校生活にも違いがありました。アメリカの学校には日本のような給食がなく、お弁当を持って行くか、学校でパンやスナックを買う必要がありました。日本の学校給食は、栄養士が栄養バランスを考えて献立を作り、温かいご飯をみんなで食べられます。給食があることで保護者の負担も減り、子どもたちは健康的に成長できます。これも税金が使われているからこそ実現している制度だと感じます。

さらに、道路や公園の整備についても大きな違いがありました。アメリカの一部地域では道路に穴が空いていても長い間修理されず、歩きにくく危険に感じることがありました。日本では、道路は比較的きれいに舗装され、公園や公共施設も安全に利用できるよう整備されています。こうした快適で安心できる環境は、税金を使って維持、改善されているのです。

このように、日本の暮らしやすさの裏には「税金の活用」があります。税金は国民から集められたお金ですが、ただ取られるものではなく、医療や教育、福祉、道路整備など、私たちの生活を支えるために使われています。もし税金がなければ、病気の時に安心して病院に行けず、学校給食もなく、道路や公共施設も安全に保てないかもしれません。

アメリカでの生活を思い出すと、日本の制度は「当たり前」ではなく、多くの人が納める税金によって成り立っている貴重な仕組みだとわかります。税金は国や地域がよりよい社会を作るための「みんなのお金」であり、私たち一人ひとりの生活に直結しています。

これから私自身も大人になり、税金を納める立場になります。その時に「取られてしまうお金」ではなく、「社会を支える大切な仕組み」として前向きに考えたいと思います。そして、将来は税金の使い道についても関心を持ち、暮らしやすい社会を守る一員としての自覚を持ちたいです。

目には見えない救いの手

杉戸町立杉戸中学校３年　　黒田　琉生

梅雨が明けるのを待ちかねていたように、ジージーと蝉の賑やかな声が暑い夏をさらに暑苦しく感じさせる。毎年この時季になると母は役所から送られてくる申請書類に神妙な面持ちで、時には考えながら静かにペンを走らせる。

僕の家族は母と双子の兄の三人で、父親は僕が歩き始める前に家を出て行った。経済的に不安定になり、行き場を失った僕たち家族を救ってくれたのは、国民の税金から支給されたものだった。母は「私達が何不自由なく暮らせる日常を当たり前だと思ってはいけないのよ。目には見えないけれど、人間は支え合いながら生きているのよ。」と、僕が物心ついた時から聞かされていた言葉を、歳を重ねる度に感謝の気持ちや、その言葉の重みが僕の心の中で増していった。

近年、少子高齢化や離婚率の上昇にともない、ひとり親世帯の数も増加傾向にある。母子世帯のうち年間所得額が低く、日々の生活に苦しむひとり親世帯が多い現実を目の当たりにした。ひとり親が対象の国の給付金や手当などの経済的支援には、子育て世帯生活支援特別給付金、児童扶養手当、ひとり親家族等医療費助成制度、母子父子寡婦福祉資金の貸付、ひとり親控除が受けられる。

教育や福祉にゴミの処理など、さまざまな公共サービスの運営費用として徴収されている住民税も、前年の所得が各地方自治体の定める額以下の場合は非課税になるのだ。深刻な貧困状態にあるひとり親世帯に、国からの行き届いた支援は大変ありがたい。

僕がそれを実感できたのは、中学校生活三年間を締めくくる最大の行事である修学旅行だった。事前に配布された修学旅行の参加同意書を手にした僕は、一抹の不安が頭をよぎった。双子の兄と二人分の修学旅行費を支払えるのだろうか。学校の門を出て、すっかり散った桜の木を横目に、少しの期待を抱きながら僕は足早に家路についた。夕飯の支度をする母の背中に学校の話をするが、今日はいまいち歯切れが悪い。思い返せば、部活体験をした時に、先輩方のキラキラしたかっこいい姿に憧れて運動部に所属する事を決めていた。だが、ユニフォームや用具代を揃える費用を懸念して、部活に所属しない事を選んだ。「お母さん、僕は修学旅行へは行かない。」あの日と同じように、母に気持ちを悟られぬよう言った。その時に初めて、コツコツと積み立てをしていた話や、就学支援制度を利用しているなど、国民全体の税金で賄われている事を改めて実感した。

僕には夢があり、社会へ貢献できる仕事に就きたいと思っている。国民の暮らしを支える、国民が安心して豊かな暮らしを送ることができるように、国家公務員の資格を取る事を目標に掲げている。人間は自分一人の力で生きているのではない「報恩感謝」を胸に、成人したら納税の義務を果たしていきたい。

給食は「救食」

戸田市立新曽中学校３年　　斎藤　菜月

「じゃんけんぽん。」「わー！」「あ… …。」歓喜と落胆の声が飛び交う教室。中学校生活において、一番の盛り上がりを見せるのが給食だ。毎日献立表をチェックしては四時間目が終わるのを待ちわび、運んできた食缶を開けては「やったー！」と心を躍らせる。

「いただきます。」皆一斉に食べ始める。話が弾み、あっという間に片づけの時刻だ。食べる前とは打って変わって、私にとってこの時間はとても苦痛だ。毎日かなりの量の白米が余るのだ。令和の米騒動と言われた時期も、毎日残って心が痛かった。

――食べたくても食べられない人がたくさんいる――。この時私は、私たちは給食に支えられ、給食を支えてくれていることに気がついた。

現在私の市では、中学生は無償で給食を食べることができる。近年、こうした取り組みが各地で進められている。保護者の経済的負担を軽減し、子育てを支援するためだ。その背景には、少子化や物価高騰などがある。特に食品や調理のための燃料費は著しく高騰した。大勢の小中学生へ給食を届けるには、多額の費用がかかる。食材や調理器具だけでなく、光熱費、施設や設備の整備費・修繕費、調理員の人件費などだ。それらは税金によってまかなわれている。そしてその税金を、納めている人がいる。その税金に、救われる人がいる。多くの生徒にとって給食は憩いのひとときだが、時に命綱である。全員が平等に受け取れる給食は、楽しさと栄養を兼ね備えた「救いのヒーロー」だ。簡単に捨ててはいけないと思うと同時に、毎回食べ切れる量を提供していただけたら良いのにとも思う。税金は無限に出てくるものではないが、納めている人の顔が見えないので感謝の気持ちが起きにくいのかもしれない。人の顔が見えない匿名の世界で炎上・暴走するＳＮＳは困り物だが、納税者の顔が見えなくても感謝の気持ちが沸き起こる匿名の税活用の世界となれば、無駄を減らし、最大限に活用するアイディアがもっと生まれると思う。

人は誰しも、支えて支えられて生きている。今の私の生活を支えてくださっている方々はきっと、子どもの頃支えられていたはずだ。私も将来、名前も知らない人々の生活を支えながら、支えられて生きるのだろう。

支えてくださっているみなさん、今日もありがとうございます。そう心の中でつぶやき、手を合わせる。

「ごちそうさまでした。」

私たちが託す「形のない希望」

川口市立小谷場中学校３年　　渡邊　仁心

「税」とは何か。その問いに、私は一つの言葉で答えたい―「希望」―だ。

私たちが日々の生活で接するものの多くが税によって支えられている。朝、私たちが通う公立学校も、出勤時に使う道路や信号も、地域の病院や消防署も。そこに共通するのは、誰かが払った税が、誰かの安心や命を支えているということだ。

しかし、それらはあまりに当たり前のように存在し、私たちはその価値を見落としがちになる。私自身も、税は「引かれるもの」としか考えていなかった。親の稼ぎからも天引きされ、どこに使われているのかも分からない。納得感のないまま支払う税に、不満さえ感じていた。

転機は、妹が生まれたときだった。健診、幼稚園、医療費の助成。両親は、育児と仕事の両立に日々苦しんでいた。その背後には多くの制度と支援があった。そしてある日、ふと気がついた。これは、見知らぬ誰かが納めた税によって、自分の家族が守られているという事実に。

それは、自分もまた「誰かを支える側」にならなければならないという責任の目覚めでもあった。

税とは、社会の連帯を目に見える形にしたものだと思う。裕福な者がより多くを担い、困窮する者が支えられる。その仕組みがなければ、私たちは「強い者だけが生き残る」社会に逆戻りしてしまう。税は、そうならないための防波堤であり、まなざしを社会全体が共有するための装置でもある。

もちろん、課題がないわけではない。税金の使途が不透明であることや、非効率な行政の存在は、納税者としての信頼を揺るがす。しかし、だからこそ私たちは「払うだけ」の存在にとどまってはならない。知ること、学ぶこと、声を上げること。それがよりよい税制度を育てる国民の責務である。

税は「義務」であると同時に、「選択」でもある。どんな社会をつくりたいのか。どんな未来を次の世代に残したいのか。その意思が、税という形を通じて実現されていくのではないか。だからこそ私は、税を「取られるもの」ではなく、「託すもの」として考えたい。

今、世界は多くの課題に直面している。格差、災害、少子高齢化。それら全てに対して、税は社会の「応答力」となる。どんな時代にも、私たちは税を通じて助け合うことができる。

税とは、形のない希望だ。今日、私が納める税が、明日、誰かの命を救うかもしれない。その想像力を持ち続けること。それが、未来への希望に繋がるのではないか。

笑顔を守る宝物

新潟市立横越中学校３年　　中村　碧

私の家から車で十分位の所に大好きな祖母の家がある。近いので小さい頃から週末はよく遊びに行った。公園や海や山で遊んでもらったり、一緒に工作をやったり絵手紙を書いたりもした。祖母の絵手紙はすごく上手で、私の誕生日や体育祭など行事があるたびに届いた。私の両親もその絵手紙の大ファンだった。そして祖母は私が行くたびにとっても美味しい手作り料理を作ってくれるので毎週食べるのがとても楽しみだった。

そんな多彩でパワフルな祖母が二年前重い病気にかかった。骨が壊れていく病気で体中が痛い様子だった。手術を受け、即入院をした。そして、一年くらいの入院を経て祖母が家に帰ってきた。一年前とは全く別人のような姿だった。絵手紙を書く体力もなくなり、あんなにやる気に溢れていた祖母は何も手につかない状態になっていた。祖母は自分で家のことや自分のことをするのはとても難しく、退院後は介護施設に通うことになった。母からショートステイは食事、入浴、排泄などの身体介護、機能訓練、レクリエーションや生活相談など様々なサービスが提供される場所だと聞いて私はとても安心した。

しかし年金で生活している祖父母にとって手術、入院、そしてショートステイと経済的にも大きな負担になるのではないかと心配になり、母に尋ねてみた。「入院や治療をするためには、本当なら何十万もかかるけど、医療費が人々の生活を圧迫することがないよう、高額になった医療費をカバーする高額療養費制度という制度によって負担が軽減するんだよ。介護施設も介護用品も、費用負担が過大にならないように税金が助けてくれてるんだよ。」という母の話を聞いて、初めて医療費や介護施設費、介護用品などにもたくさんの税金が活用されていることを知った。

一年前まで、もう前みたいに歩けないかもしれないと言われていた祖母が、たくさんの治療とリハビリを繰り返し、今は思っていた以上に回復し、前よりかなり元気に過ごすことができるようになった。「今日ね、介護施設の友達と介護士さんが私が施設の自由時間に書いた絵手紙を見て、すごく褒めてくれたの！。」と満面の笑みで話す祖母。介護施設の皆さんのおかげで、また祖母が絵手紙を書き始めた。私のために張り切って楽しそうにご飯を作ってくれることもある。毎日元気に笑う祖母を見て、病気になる前の祖母が戻ってきたように感じ、私はとっても嬉しかった。

祖母も世の中のお年寄りの皆さんも、高額な医療費や介護サービスだったら、もう一度頑張ってみることを諦めていたかもしれない。税金は大切な人の快適な生活や生命を守ってくれる宝物だと思う。だからこれからは、そんな税金に感謝しながら、私もいつかしっかり働いて、税金を納められる人になっていこうと思う。

医療を支える税金

下諏訪町立下諏訪社中学校３年　　池田　來未

私は下垂体機能低下症という病気を持っています。体に必要なホルモンが自分では作れないため、薬に頼って生きています。この薬は、とても高額ですが、私の病気は難病に指定されているため、税金で医療費の多くを負担して頂き、ほんのわずかな自己負担で治療を続けることができています。そのおかげで私は普通の人と同じように成長し、大人と同じ身長になることができました。

また、私が受けた手術も、本来ならとても高額で家族だけでは払うことができないものでした。それに加えて、その手術は世界的にも数か国でしか行われない先進医療でした。もし私が日本ではなく別の国に生まれていたらそもそも手術を受けることもできず、今こうしていられなかったかもしれません。日本に生まれて、日本の医療受けられたことは本当に幸せなことで、それを支えている税金に感謝しています。

私は毎月病院に通っていますが、そのたびに先生に診ていただいています。病気のことだけでなく、学校生活や日常生活のことまで気にかけてくださり、安心して過ごせるようにサポートしてくださっています。こうして先生方におせわになるのも、病院の仕組みや医療が税金によって支えられているからだと思います。先生の温かさと医療を守る税金の力に感謝しています。

病気はいつ誰がなるかわかりません。私も突然病気になり、不安でいっぱいでしたが、日本では税金で医療費や、医療制度が支えられているので、安心して治療を受けることができました。更に、日本の医療は税金によって発展してきたからこそ、私の手術のような先進的な治療が行えたのだと思います。

一方で、今の日本は医療費の負担が大きく、日本の財政が苦しいというニュースをよく聞きます。その中で治療を続けられているということは決して当たり前ではなくて、多くの人の支えによって成り立っているんだと思います。だからこそ、私は自分の命を守る薬を無駄にせず、大切に使っていきたいと思います。

税金は、病気と闘う人の命や生活を守り、安心して暮らせる社会を作るために使われています。私はこれからも税金のあり方を忘れずに、できることを考えながら生きて行きたいです。

安心を守る税金

船橋市立七林中学校３年　　星　実花

二〇二六年の四月から、法人税、たばこ税などが「防衛関係費」のために増税されると聞いた。防衛関係費は国の歳出総額の中で四番目に高い割合だが、私は国の防衛の費用という事しかわからない。そもそも、戦争をしないと誓った日本は防衛を強くする必要があるのだろうか。法人税は、将来、私が働くようになったときにも身近に関わる税金だ。増税するからには、私たちに良い影響があることにお金を使ってほしいと思う。そのため、防衛関係費は私たちとどのように結びついているのか調べてみようと思った。

防衛省・自衛隊のサイトによると、この税金は自衛隊員の人件・糧食費や燃料、新しい装備品の購入などに使われているらしい。費用の使い道は納得できたが、なぜ災害時などではないのに増税するのかは疑問のままだった。しかし、読み進めると、自衛隊は国の「抑止力」を守っているという文を見つけた。抑止力とは、「攻めさせない力」だ。今の日本の平和な状況が崩れることを未然に防ぐためには、強い武器を持つことで、日本に攻めることを思いとどまらせることが一番重要だということだろう。私は今まで、戦争をしないと誓ったのなら、戦車や戦闘機を購入し自衛隊を強くする必要はないと思っていた。しかし、これは言いかえれば経済的にも物理的にも守りを固める必要が高まったということだ。むしろ平和を誓ったからこそ、自衛隊は強くなければいけないのだと思う。また、今回の増税は、抑止力の強化に加えてアメリカの負担を軽減する目的もあったという。防衛関係費は、今の私達だけでなく未来の私達も守る重要な税金の使い道だとわかった。

私の住んでいる地域には自衛隊の駐屯地で毎年開催される夏まつりがある。多くの人が訪れ、自衛隊員の方々による和太鼓の演奏はとても迫力があって大人気だ。しかし、何年か前に、この和太鼓の演奏は「税金の無駄」なのではないかと意見した人がいたらしい。

事実、この演奏は防衛関係費の内の広報・募集活動費、つまり私たちの税金で支えられている。しかし、私はこのような使い道もまた、国民を守るために使われていると思う。

私は和太鼓の演奏を聞いたときその力強さから「この人たちなら緊急事態でもしっかり助けてくれそうだな」と安心することができた。この活動は、地域の人々と交流し、災害などが起きた時に信頼してもらうために行われていると思う。きっと私は、緊急時に知らない人しかいなかったら怖くて信用できない。しかし、自衛隊の迷彩が見えれば安心がぐっと高まるだろう。防衛関係費は災害時だけでなく普段の生活でも安心を与えてくれる、「安心を守る」税金の使い道だとわかった。

普段は意識しないところでも、税金は私たちの安全や安心に役立っている。これからは税金の使い方を知り、納めることの意味を考えて納税したいと思った。

緑の力を育てる為に

大田区立六郷中学校３年　　松尾　陽栞

今年も、暑すぎる夏がやって来た。外に出たとたん目がくらむ。私の家から歩いて数メートルの所に多摩川があり、河川敷手前の神社から聞こえてくる蝉の声も、暑さのせいかなんだか元気がなさそうに聞こえる。しかし私が毎日お参りにいくと、暑さを忘れることができる。大きな木々に囲まれた境内は風が涼しく心地良い。気持ちもすっきりし、リフレッシュできる。これが「緑の力」だ。私の住む大田区は多摩川と共にあり、緑に寄り添っている町だと思う。しかし、命の危険を感じる暑さの中では、もっと緑豊かな町であれば良いのにと思ってしまう。人工的な建物が開発され、便利な時代になった一方で、大切な緑はどの様な仕組みで守られているのだろうかと気になった。

昨年から日本でも「森林環境税」が制定され、一人１０００円を国税として納める事になったとニュースで見たことがある。この税金は、温室効果ガス排出削減などの為、「差し迫った重要な課題である森林整備に対応するため」として、令和元年に定められていた「森林環境譲与税」に充当されているそうだ。市町村に譲与されている「森林環境譲与税」を調べてみると、その使途について公開の必要があり、大田区は平成元年に２７２６万、平成二年には５９７４万、平成四年まで合計２億円以上の金額が「公共施設整備資金積立基金」に積み立てられているだけだった。これは「差し迫った重要な課題」の為に使われていたといえるのだろうか。調べるのにも限界があったので、直接大田区財政課に電話してみることにした。電話に出た方は、とても丁寧に説明して下さった。まず、「公共施設整備資金積立基金」は、学校の体育館の床や公共施設の木材に使う費用、保育園の木のおもちゃの購入に充当されているとのことだった。確かに、体育館はとても広くその床材の費用は沢山かかるなと思った。また、「大田区には森林がない為森林環境整備の費用としての予定はなく、公共施設に木材を使用する事で森林資源の活用に繋げている。」とのお話だった。それ以外に、大田区には大きな取り組みがない事が分かった。品川区のように、他の区市町村と連携し多摩川上流の森林循環の費用に使ったり、林業を行う人材の育成や森林環境保全への啓発を行ったり、様々な取り組みがあると思う。公園や公共施設への植林、木々の整備など緑豊かな町である為、本来の目的に沿い税を積極的に活用してほしい。将来への積立は大切だが、「緑の力」を育てる事は年月を要する。危機迫った課題を解決する為に、大田区ＳＤＧｓ推進委員会やみどりの取り組み事業と連携し「森林環境譲与税」のより良い使い道を検討して頂きたいと感じた。私も「税金は先の問題」と何もしないのではなく、「緑の力」をもっと広め、考え行動していこうと思う。中学生としてできる一歩を進めたい。

二つの米騒動

練馬区立開進第三中学校３年　　小原　みなみ

お盆に祖母が、祖母にとって義母であるまつゑさんの話をしてくれた。私の曽祖母のまつゑさんは、明治の終わりに富山県魚津市の漁師の家に生まれた。九人兄弟だったが、そのうち無事に大人になったのは二人だけだった。死因ははっきり分からないが、病気など様々な原因で亡くなったという。私は、九人も兄弟がいるということにも驚いたが、そのうちの七人が子供時代に死んでしまうということにショックを受けた。

まつゑさんの子供時代の出来事として、一九一八年の富山の米騒動がある。まつゑさんが八歳の時のことだ。この暴動はまつゑさんの住んでいた魚津市で始まり、全国にも広がっていった。庶民は米不足や食料の高騰で食べ物に困ったのだろう。飢えで子供が死んでしまう事態にあったのかもしれない。母親達は死んでしまいそうな我が子のため、暴動を起こしたのかもしれない。

今の時代、子供が死ぬことはあってはならない。そのために、赤ちゃんの頃に何種類ものワクチン接種が受けられ、体調が悪くなったら病院にすぐかかれるように、救急車がすぐ来てくれるように、心の相談ができるように様々な機関が設けられている。今の時代では、これらはすべて税金のおかげで無料でサービスを受けられる。それに比べて、明治大正時代は、まつゑさんの兄弟のように、体の弱った子供は為す術もなく簡単に死んでしまったのだ。そう考えると、今のあたりまえは私の曽祖父母の時代には無かったことだ。

偶然に、今年の日本にも米騒動があった。しかし昔のような暴動にならなかったのはなぜなのだろう。それは、国が税金によって国民の悩みを解消するように働いたからだ。備蓄米が放出され、私達の生活を救ってくれた。それ以外にも国は税金を通じて支えの手を差し伸べている。たとえば、被災時などの様々な給付金、子育て世帯への補助、収入の少ない世帯への支援金などは、すべて税によってまかなわれている。また、医療費の助成、無償で教育が受けられる制度も、税金から成り立っている。

大正時代の米騒動では、民衆が立ち上がらなければ何も変わらなかった。一方、令和の私達は、既に整えられた社会保障や公的制度の仕組みの中で、苦しい状況でも生活が守られている。これはまさに、税の恩恵だ。私達の社会が制度や税によって支えられているから、暴動を起こさずにすんだのだ。

大正と令和の二つの米騒動を知ることは、「税」がどれほど私たちの生活を支えているかを実感するきっかけにもなった。

私は、今の時代の日本に生まれ育ってきて、本当に良かったと心から思う。しかし、このような豊かで安心安全の生活があるのは、まつゑさん達の生きた苦難の時代があったからこそだと思う。そして、国民の苦しみを解決する税金があるからこそなのだ。

税金と鉄道がつなぐ、私たちの未来

学校法人暁星学園暁星中学校２年　　松木　圭

私は、中学校で鉄道研究部に所属しています。部活動では、鉄道模型の製作や写真撮影のために、全国各地の鉄道に乗って旅をします。仲間と一緒に、まだ見ぬ景色や車両との出会いに心を躍らせながら、とても楽しい時間を過ごしています。また、部活動だけでなく、電車を使って通学している私は、これまでであまり意識してこなかった「税金」と鉄道は関係があるのかが、ふと疑問に思い考えてみることにしました。

私が利用している鉄道路線には、ほとんどの駅のホームと線路の間にホームドアが設置されています。これらは人身事故や転落事故を防ぎ、安全な運行を守るために欠かせない設備です。調べてみると、ホームドアの設置や駅の改修、災害時の復旧などには鉄道会社で差はあるものの、税金が使われている場合もあるそうです。安全に学校へ通えることは当たり前ではなく、社会全体の支えがあってこそだと気づいた瞬間でした。

また、鉄道の運賃には消費税が含まれていることをこれまではまったく意識したことがありませんでした。中学生の私でも電車に乗ることで、税金の支払いに関わっていたのです。毎日の通学や部活動での移動という日常の生活の中に、税金を納める一員として、自分も役立っていたのだと感じた瞬間でした。

その他には、鉄道事業そのものが税金によって支えられていることも分かりました。新しい路線の整備や老朽化した設備の更新、自然災害で被害を受けた路線の復旧。これらは運賃だけでは賄えず、国や自治体の税金が投入されています。鉄道は人や物を運ぶだけではなく、地域の経済や人々の暮らしを支える大動脈であり、その安全性と安定性を守るためには、これからも税金が必要であることを学びました。

今回、税金と鉄道の関わりを調べてみて、私は初めて「鉄道に税金が使われていること」や「運賃に税金が含まれていること」を知りました。今までは、改札を通って電車に乗る、そんな当たり前に感じていた日々の行為でしたが、その背後には税金による支えや多くの人々の関わりがあったのです。

毎日の電車利用は、ただ目的地へ運んでくれるだけではありません。私たちは運賃に含まれる消費税を通じて税金を支払い、その税金に守られながら暮らしています。安全なホーム、快適な車両、災害後の早い復旧。それらは決して当たり前ではなく、見えない多くの人の努力と税金の力によって成り立っていたのです。

明日から私は、電車の窓から見える景色や鉄道車両、鉄道に関わる人々を、少し違った思いや視点で眺めてみたいと思います。税金が「取られる・納めるべきもの」という義務的な考え方ではなく、「皆で社会を支え合い、社会を走らせる力」ということを知ることができたのだから。

税金で「助け助けられる」社会

目黒区立第十中学校３年　　泉　愛実

私には今年三月に大学を卒業して就職した姉がいます。初任給で、家族にピザパーティーを開いてくれてとても楽しかったです。そんな時、何気なく、姉が「初任給で所得税を初めて払った」と話してくれました。消費税はいつも払っていますが、「税金を払う」ことを初めて真剣に考えた瞬間でした。

今まで気にしてこなかったのですが、実は、私たちは色々な助け合いの中に生活を営んでいます。朝のゴミの回収だけでなく、交通整理、町の安全、救急や消防、中学校での授業やおいしい給食、テスト勉強の時は地域の図書館にもお世話になります。それだけでなく、災害救助やインターネットのネットワークの整備もすべて税金でまかなわれていると知りました。毎日、元気に学校に通えるのは当たり前のことではなく、すべて税金の助け合いの中でまかなわれていることだったのです。

これまでは姉も私と同じように「助けられる」側だったのが、これからは税金を払い他の人を「助ける」側になったのだと思いました。そんな姉をとても眩しく感じ、私もそうなりたいと思いました。

父にこの話しをしたところ、「税金を払うのを嫌だと思ったことはない」と言っていたのが印象的でした。「税金は助け合い」なのだそうです。毎年、確定申告をするのを、若い頃は面倒臭いと思ったこともあったそうですが、今はそうでなく、確定申告を通じて年に一度自分の財産について考えるきっかけを税務署の方々が作ってくださり感謝しているそうです。みんなが税金を払うことで社会の助け合いの仕組みがうまく機能し、社会が安定するのだと教えてくれました。

実は、一学期の授業で、太平洋戦争の体験談を聞き、戦争の原因をクラス全員で考えたことがありました。私は声をつまらし涙がでてしまいそうな戦争の悲惨さを知り、その中で、欠食児童問題のような当時の日本の「貧しさ」が国を戦争へとつき動かした原因の一つだったと学びました。社会科の日本史の授業では、弥生時代に稲作が広まりせっかく国が豊かになったのに、豊かになれた人となれなかった人が生まれてしまい、「貧富の差」が争いの原因となり、やがて戦乱の時代へとつながったと学びました。

戦後の日本人は、税金の仕組みを工夫して、お金のある人からそうでない人へと、お金を移動させて「貧富の差」を解消し、人と人の助け合いを通じ、安定して平和な社会を作ったのだそうです。それは、お金持ちにとってもメリットがあることで、そのような社会に貢献したいと父は言っていました。日本の平和が戦後八十年間も続いたのは世界的にも歴史的に大変珍しいことで、それは税金の仕組みのおかげなのだと学びました。私も父や姉のようにしっかり収入を得て、しっかり税金を納め、社会も自分も豊かになるように貢献したいと思います。

税が支える音楽のある日常

綾瀬市立綾瀬中学校３年　　黒田　桃子

静寂の中、私の名前が呼ばれる。私はゆっくりと舞台へと進む。まばゆい光に包まれた瞬間、緊張で小さな心臓は今にも壊れそうになる。そんな私をいつも支えてくれるのは、舞台の中央に佇む一台のグランドピアノだ。完璧に調律されたその鍵盤は、確かな音を響かせてくれる信頼がある。ホールの音響も、繊細な一音まで余すことなくすくい取ってくれよう。そして、鍵盤に触れた瞬間、時間も重力も消え、ただ音楽だけが満ちる世界に包まれる感覚になる。私なりのゾーンに入ったと実感するそのとき、音を紡ぎながら、深く温かな感謝が胸の奥に広がっていく。

この「感謝」の対象には、先生や家族、仲間たちがいる。だが最近、そこにもう一つ加わった存在がある。それが「税金」だ。

幼少期からピアノと共に歩んできた私は、数多くの「税の恩恵」を受けてきた。コンサートホールの建設や維持、音響設備の整備、ピアノの管理。地域の芸術プログラムや学校教育も、税の支えがあってこそ成り立っている。私が当たり前のように音楽室でピアノを弾けたのも、その環境が税で整えられていたからだ。

今年、生まれ故郷の静岡県における心温まる取り組みを知った。県内の小中・特別支援学校八十校に、グランドピアノ四十台と電子ピアノ四十台が寄贈されたという。これは、教育支援財団と楽器メーカーの協働によるものだ。学校という「公共の場」が税に支えられているからこそ、こうした寄贈が意味を持つ。公的基盤の上に、地域や民間の善意が重なった美しい連携のかたちだ。子どもたちが「本物の音」に触れる機会が広がれば、感性や可能性の芽も育っていくだろう。

文化活動、とりわけ音楽や美術、舞台芸術は「ぜいたく」と見なされることもある。だが人はパンだけで生きているのではない。心を揺さぶるもの、感情を分かち合うもの、それが芸術の役割だ。災害や困難のなかで、人々の気持ちを結び直す力も、見えない心の傷を癒す力も、芸術にはある。

しかし、文化活動は経済的に不安定であり、民間の力だけでは支えきれない。だからこそ税の力が必要なのだ。助成金、公共施設の整備費、芸術祭への支援、それらは私たちの納めた税に依るところが大きい。そしてその恩恵は、芸術家だけでなく、少なくとも間接的にすべての市民が享受することができる。

税とは、ただ徴収されるものではない。誰かの挑戦を支え、夢を育む社会の共有財産である。税が私に与えてくれた恩恵は、音楽であり、ピアノであり、舞台であろう。

私はこれからも演奏を続けていく。音楽で誰かの心を動かすために。受けた恩を音で返していけるように。税に支えられた「音楽のある日常」に感謝しながら。

収集車はなぜ走り続けるのか

横浜市立上飯田中学校３年　　濵田　紗良

休日、遠くから微かに聞こえてくるゴミ収集車の音。機械の回転音に混じって、ゴミ袋が投げ入れられる重い音が家の中に響く。収集員が手際良く袋を持ち上げ、機械の中へと積み込む。その一連の動作には、何の迷いもない。誰かに注目されることも、称賛されることもなく、黙々と繰り返される作業。その姿に、どこか畏敬のような感情を覚えた。

実際、ゴミ排出量の増加に比例して処理にかかるコストは年々増えている。私の住む横浜市では、ゴミの収集・運搬・焼却などにかかる年間の予算が約四百億円にのぼる。東京二十三区では、実に一千億円超。これらはすべて、私たちが支払う税金でまかなわれている。税金は、見えないところで社会の基盤を支える不可欠なエネルギーなのだ。

この仕事が一日でも止まれば、街はすぐにゴミであふれ生活の秩序は崩れるだろう。日々の循環が乱れず滞りなく進むとき、その恩恵があまりに自然と日常に溶け込み、私たちはその裏側にある手間や仕組みを当たり前だと思いがちである。

そこで私は、自分にこう問いかけるようになった。

「自分の出したこの一袋のゴミに、どれだけの手間と税金がかかっているのか。」

例えば、一本のペットボトル。それが収集され処理されるまでに、多くの人の労働と見えない税の負担が積み重なっている。だからこそ「どうしたら捨てずに済むか」を考えることが、社会に貢献することにつながると思う。

使い捨てを減らす。必要なものを必要な分だけ買う。正確な分別を心がける。その小さな一歩が、結果として税の負担を軽くし、社会全体の効率を高める。税とは、ただ支払うものではない。自分の暮らしの延長線上にあるものだ。一人の百歩より、百人の一歩。私たちは、社会の持続性を共に担う当事者としての自覚をより高め、今を生きるべきではないだろうか。

将来、私が納税者となったときには、「いくら取られるか」ではなく、「どのように活かされているか」を基準に、様々な視点から社会に目を向けたい。そして、自分もその税によって構成される社会の一員として、自分の暮らし方が社会の負担とならないように、小さなことにも責任ある行動をしていく。税金によって守られてきた日常があるということを、私たちは忘れてはならない。

今日もまた、ゴミ収集車の音が家の中に響いている。その音は、税の力が社会を支えている証である。その支えが絶えない限り、私たちの暮らしは明日もまた整然と進んでいく。

ピンクのガーベラ

魚津市立西部中学校３年　　三田　ちさと

税金というと皆さんは何を思い浮かべるだろうか。中学生の私が一番関わっている税金と言えば消費税ではないだろうか。私が生まれた時の消費税の税率は三％。平成二十五年に八％になり、令和元年には十％に引き上げられた。少ないお小遣いをやりくりしている私はこの十％の消費税を不満に思っていた。

五年前、曽祖母が九十六才で亡くなった。

民宿を営んでいた曽祖母はいつも笑顔で優しかった。店を畳んでからは一人暮らしをしており、月に数回祖父母が会いに行っていた。玄関先でつまづき大腿骨を骨折してからは思う様に歩けなくなり、週に数回ヘルパーさんに身の回りのお世話をしていただいていたが、体調不良で自宅で倒れていたのをヘルパーさんが発見し救急車で運ばれてからは一人での生活も困難となり、施設へ入居する事となる。

施設での様子は月に一度祖父母の家に写真と手紙が送られてきており、その元気そうな曽祖母の写真を見ながらたくさんの話を聞くのが楽しかった。また会いたい。会いに行きたいと思っていたのに…。

コロナウイルスの大流行で面会出来ない日々が続いた。しばらくして施設から「亡くなりました。」と電話で連絡が来たそうだ。祖父母も曽祖母の最期を看取る事が出来なかった。

葬儀の後、祖父がぽつりと、「最期は看取れなかったけれど、施設では毎日とても楽しそうでのんびり生活が出来て良かった。税金のおかげだ。本当にありがたかった。」と言った。

私は、「税金・使い道」と調べてみた。

曽祖母がお世話になったヘルパーさんも、病院へ運んでいただいた救急車も、施設への入居も、税金の一部が使われている事を知った。私が支払っている消費税も介護などの社会保障に使われていた。私が不満に思いながら支払っていた消費税が少しでも曽祖母の為になっていたと思うと、胸が熱くなりそして誇らしく思えた。

この作文を書くにあたり、私は祖父に、曽祖母の事を書いてもよいかと相談をした。すると祖父は、「おばあちゃんはきっと喜ぶと思うよ。一緒にお墓参りに行って報告しよう。」と提案してくれた。

お墓参りに行く途中に花屋に寄ってもらった。税金について調べるきっかけを与え、消費税に対する気持ちを変えてくれた曽祖母へ「感謝」「前向き」「思いやり」が花言葉であるピンクのガーベラをお小遣いで買い、供えた。

税金は教科書や学校の机、椅子など私達の身近な所にも沢山使われている。その事を知れば税金に対する気持ちがもっと前向きになるだろう。

税金の使い道を知った私は、消費税に対する不満はない。誰かの役に立ち、沢山の笑顔が増えると良いなと思っている。

税からの恩恵

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校３年　　荒木　結夢

私の父は、日々、救急救命士として、救急車に乗っている。小学校のとき、学校に講師の方がいらっしゃって、税についての勉強をしたことがある。そのときの今でもとても記憶に残っているものがある。それは、講師の方が見せてくださった「もし、税金がなくなったら」というアニメだ。その中に、お金が払えないからと、けがをしている人がまわりに救急車を呼ばないでと必死に訴えているシーンがあった。呼んでほしいとお願いすることはあっても、呼ばないでと言うなんて、ととても驚いた。帰宅後、父にこのことを話すと、もし、税金がなかったら、消防署は会社になって、利益を求めることになるという話をしてくれた。

今年の七月。参議院選挙が行われた。ニュースで毎日のように、各党の減税についての方針が報道されていた。多くの人が、テレビ局のインタビューで減税に賛成だと答えていた。しかし、あるときのインタビューで強く反対すると答えている人がいた。その人は、減税することで、足りなくなった税収分を国債など他のもので補うのは良くないと述べていた。これを聞いて、減税が良いというのは、国民の消費という視点からだったことに気づいた。もし、税収が足りなくなれば、父の仕事をはじめとした様々なことがまわらなくなる。税についての考えが改められた機会だった。

父が、仕事の話をしてくれるときによく言う言葉がある。

「住民サービスの向上を一番に」

だ。自分の給料や救急車、消防車の運用は、住民が払っている税金でまかなわれている。だから、住民サービスを一番に行動しなければならないとよく言っている。このような話を聞くまでは、正直、私は税に対して、マイナスのイメージを持っていた。それは、税金の用途をあまり分かっていなかったからだ。

税金があることによって、国、県、市町村からの公共サービス、消防や警察の運用ができている。特に、近年、懸念されている災害への対策や復旧にも必要不可欠である。実際に、令和六年能登半島地震では、石川県などに特別交付税として四十九億円余りが交付されたそうだ。このような、いざというときに必要な資金も税金でまかなわれている。

私たち、中学生などの未成年者にとっての身近な税といえば、消費税くらいだ。しかし、教科書や学校の設備、その他の公共サービスなど、すでに多くの税金の恩恵を受けている。そのため、改めて税金とは何か、何に使われているかを知り、将来、自分も国民として、納税という義務を果たすべきだと考える。

税が守りぬく郷土の景色

稲沢市立稲沢西中学校３年　　田中　紗来

私はこの夏、「絵になる町」の課題に最後の挑戦をしている。小学一年生の夏から毎年欠かさず取り組み、九年目となる。五月に家族で市内の名所をまわり、構図を考えて撮影し絵を描くのが恒例だった。美濃路街道沿いに住む私は、普段から古い町並みを当たり前に感じている。しかし、毎年「絵になる町」でこの場所を描く友人が多い事に気づいた。先日も小学生が古い町家を撮影していた。皆が「描きたい」と思う風景は、心ひかれる歴史の重みと人の手で守られてきた証が感じられるのだ。振り返ると、これまで私が描いてきた神社や仏閣、古い町家も市や県の文化財としての案内板があった事を思い出す。小学生の頃は、単純に美しい風景を正確に描く事に夢中だった。中学三年生になり歴史や公共について学ぶ中で「なぜ古い建物が今も残っているのか」「誰がどのように守っているのか」の視点を持ち、その答えが「税金」であると気づいた。何気なく通り過ぎていた看板や案内板、新しくなった側溝や歩道の石畳、ＬＥＤ街路灯の増設、これら全ては私の目に見える形の税であり、町中にあふれていた。

今、私が描く「中高記念館」は、稲沢市に現存する最古の近代洋風建築とされ、市の指定文化財である。建物を後世に残すために移設され保存修理がくり返された歴史的な建造物だ。調べてみると、中高記念館のような市指定の文化財の修復や管理には、市の一般財源の他、県や国の補助金が活用される。例えば、自治体が自由に使える地方交付税や公共施設の整備に充てられる社会資本整備総合交付金などがある。さらにふるさと納税の一部や住民税や固定資産税も含まれると知り、こうした様々な税が合わさり大切な文化財が未来へ受け継がれていると感動した。税が文化を守る力になっていて今を支え、未来にこの感動と価値を託すための仕組みなのだ。誰かが納めた税が、私の記憶になり絵となり、風景を守り続けている。このつながりを大切に確実に実行できる大人に私はならなくてはいけないと決意した。

描き上げた絵は、毎年荻須記念美術館に展示され表彰式も文化活動を称える場として丁寧に開いてもらえる。これもまた文化振興費という税があるのだ。私が九年間続けられたのは、絵を描く児童生徒を支える仕組みが市に根づいていて、これは税があるからこそ、郷土の魅力を再認識し探求する機会が与えられた。毎年描いた「絵になる町」は税の恩恵に気づいた私自身の成長記録になった。近い将来納税者となる。この気づきを忘れずに自分の郷土を考え関心を持ち続ける大人になりたい。税と市の未来も自分事として描き続けたい。未来のため正しく納税し、その使い道を見守る大人にならなくてはいけない。その為に、今は学びを止めず関心を深め続けたい。心をこめて、最後の一枚を描こう。

未来をつなぐバトン

私は以前、一時保護所で生活していたことがあります。そこは家庭の事情などで安心して暮らせない子供が一時的に守られる場所です。慣れない環境に不安もありましたが、温かいご飯、勉強の時間、優しく声をかけてくれる職員さんたちに支えられ、私は安心して過ごすことができました。今振り返ると、あの場所があったからこそ、私は心を取り戻し前に進むことができたのだと思います。しかし、一時保護所は自然に存在している訳ではありません。建物や食事、生活に必要なもの、そして働く職員さんたちのお給料は、すべて社会から集められた税金によって支えられています。納められた税金が私のように助けを必要とする子供を守り、安心できる場を作っているのです。私はその仕組みを知ったとき心から「ありがとう」と思いました。同時に、私は気づきました。税金は私のためだけではなく、同じように困っている子供や、大人たちも支えているということに。病気になった人の治療費を助けたり、災害で家を失った人に支援を届けたり、学校や道路を整えたり、社会のあらゆる場面で誰かの暮らしを守っています。目に見える形だけではなく、一時保護所のように普段は意識されにくい場所でも、確かに税は力も発揮しているのです。私は、自分がその恩恵を受けたことで、社会全体がひとつにつながっていることを実感しました。私を守ってくれた税金は、どこか遠くで暮らす誰かが納めたものかもしれません。そして、私が元気に生きていくことは、また別の誰かの支えになるかもしれません。税はただお金でなく、人と人をつなぐ「思いやりの形」だと感じるようになりました。もし、税金がなかったら、私は安心できる場所を持てなかったでしょう。心が追い込まれ、未来を信じることさえできなかったかもしれません。けれど、税金によって成り立つ仕組みのおかげで、私は守られ、再び歩き出す力をもらいました。税金は、命を支える見えない大きな手のような存在なのだと強く思います。これから私は大人になり、働いて税を納める立場になります。そのとき、私は迷わずその役割を果たしたいです。なぜなら、それが「過去の私」を救ってくれたように、未来の誰かを守ることにつながるからです。税を納めることは義務であるだけではなく、社会に「ありがとう」を返す方法だと思います。私は過去の誰かが納めてくれたから、今の私が助かりました。そして、これから私が納める税はまだ見ぬ誰かの希望になるはずです。そう考えると、税金は世代を超えて未来をつなぐバトンのように思えます。安心できる暮しや、学ぶ環境、困ったときの支えは途切れずに受け渡されたからこそ存在しているのです。私はこれからもあの一時保護所での経験を胸に、税の意味を忘れず、未来の誰かに安心と希望を届ける大人になりたいです。

「見えた現実」と「支える力」

岐南町立岐南中学校３年　　加藤　柚空

「税金は人々の生活を支えるために使われている」そう聞くと、安心で温かいイメージがあるかもしれません。けれど、私が中学二年生の秋に見た被災地の光景は、そんな理想とは大きく違っていました。

その年、私は石川県の震災、土砂災害の被災地を訪れ、現地の中学生や介護施設のご高齢者と交流する機会がありました。復旧が進んでいると報道されていたけれど、道中目にしたものは、傾いた電柱や壊れた家、ひびが入り盛りあがった道路、道路が土砂で通れない状態、草木がのびて荒れている光景です。訪れた中学校の建物には、亀裂がはいり、コンクリートの階段が割れていて危ないと感じました。災害にあった時にあると良いものを尋ねたら、状況にもよるけれど、倒壊してしまった時に木材を切るため、「家にチェンソーがあると、とても助かるから良い」と同学年の子が教えてくれたのは、とても驚きました。また、施設でお話したおばあさんは、住んでいた家が全壊してしまい、親戚の家で暮らしていると話してくださいました。倒壊や水が止まってしまい、運営できないお店も数多くありました。そんな状況の中でも、みんな明るく元気でした。「支え合って、日常に感謝して過ごしている」私は心がギュッと締め付けられたのを今でも覚えています。

こうした光景を目の当たりにして、「税金は本当にちゃんと使われているの？」と疑問に思いました。災害復旧や福祉の現場などには税金が使われています。税金は、人の命や暮らしを守るためにあるはずなのに、手続きや予算の関係、使い方や優先順位を間違えてしまうと、必要な場所や、本当に困っている人たちに届かなくなります。それが現実だと思いました。

これまでの私は、税金と聞いても「高くなるな」「大人が払うもの」と思うくらいで、深く考えることはありませんでした。けれど被災地や、支援が間に合わず困っている人たちを見て、税金は「ただ集めればいいもの」ではなく、「正しく、必要なところに使われてこそ意味があるもの」だと考えるようになりました。

今はまだ、社会の仕組みを学んでいる途中です。この経験を通して、どんな情報も鵜呑みにせず、自分の目で見て、感じて、考えることの大切さを学びました。そして、私も将来働いて納税することになります。その時私は、ただ義務として払うのではなく、「これは、困っている人を支えるお金だ」と信じて払える社会であってほしいと思います。例えば、通学路の整備や学校の図書、救急医療など、私たちの生活のあらゆる場面に税金が関わっています。そうした身近な部分にも意識を向けながら、税金の役割を学び続けたいです。そして、自分の身の回りの出来事に関心を持ち、未来の社会づくりに少しでも役立てる人になりたいです。

税がくれた贈り物

羽島市立中央中学校１年　　山田　桃花

令和四年二月、心優しかった祖父が天国へ旅立ちました。ステージⅣの末期がんが見つかってから約二年間、病気に打ち克つためにつらい抗がん剤治療を続けました。治療は三週間おきに通院し、抗がん剤の点滴投与を受けるものでした。通院に付き添っていた祖母からこんな話を聞いたことがありました。

「治療には毎月高額な医療費がかかるけれど、国民健康保険の高額療養費制度のおかげで病院へ支払うのは、所得ごとに決められた限度額までで済むの。本当にありがたい。」

その時はあまり気に留めていなかったけれど、祖父が使った限度額以上の医療費を誰が負担してくれていたのか気になり、調べてみました。すると、被保険者から徴収した保険料の他に税金が使われていることが分かりました。祖父が医療費の心配なく治療を続けることができたのは、税のおかげだったことを初めて知りました。また、祖父は病気の進行に伴い、介護が必要になりました。そのため、介護保険制度の要介護認定を受け、デイサービスなどの介護サービスを利用していました。入浴介助を受ける祖父だけでなく、一緒に暮らしていた祖母の負担も軽減されました。そして、この介護保険制度にも税金が使われていました。祖父の病気が分かってから、こんなにも税の恩恵を受けていたのだと気づき、改めて感謝しました。毎週末、祖父と一緒に祖母の手料理を食べられたこと、孫である私の話を笑顔で聞いてくれたこと、祖父と共有できたこの時間は、私達家族にとってかけがえのないものでした。まさに税がくれた贈り物だと思っています。

私はこれまで、「税金は本当に必要なのか？」と漠然と思っていました。中学生の私に一番身近な税金である「消費税」は、コンビニで買い物をした時などにその代金に上乗せして負担しています。物価高騰が叫ばれる今、消費税の存在は一層負担に感じられ、税金に対するイメージは決して良いものではありませんでした。しかし、今回この作文を書くにあたり、税金について調べ、考えることによって、税金への思いが一八〇度変わりました。私達が何気なく納めている消費税が年金・医療・介護・少子化対策などの社会保障政策に使われていることを知ったからです。国民が納める税金があるからこそ、私達の不自由ない暮らしが守られているのです。私達は税金に対する負担感ばかり大きくて、税金から受ける恩恵を当たり前に感じてしまっているのではないでしょうか。祖父が税に助けてもらったように、私が納めた税金が日本のどこかで、誰かを笑顔にしているのだと思うと誇らしいです。学生である今は「消費税」という形でしか納税できないけれど、近い将来、もっといろいろな形で税金を納めることになるでしょう。その時はきちんと納税し、社会に貢献できる人になりたいです。きっと天国の祖父も喜んでくれると思います。

税金

草津市立草津中学校３年　　村田　晴美

二〇二四年度の日本の一般会計税収は約六九兆円に達しました。国民一人あたりにすると約五五万円を収めている計算になります。これほどの大金が国に集められているのに、私たちはその使い道をどこまで理解できているのでしょうか？

国際的な調査「オープン・バジェット・サーベイ二〇二三」によると、日本の予算透明性スコアは六三点で、ＤＥＣＤ平均の六七点を下回っています。さらに「税の優遇策の公開度」は一〇四カ国中九四位と、世界的に見ても低い順位にとどまっています。つまり、「集める額は多く、使い道は不透明」という現状だということです。私自身も、買い物のたびに払っている消費税が本当に役に立っているのか、疑問を持つようになりました。

その不透明さは他の国と比べるとさらに鮮明です。台湾では政府の予算や補助金の使い道がすべてインターネットで公開され、誰でも確認できます。インドやペルーでは、税の優遇でどれだけ税収が減ったかを明確に数字で示し、政策が本当に効果的だったのかを検証できる仕組みがあります。スコットランドでは予算案を事前に公開し、市民や議会の意見を取り入れる制度が導入されています。こうした例を見ると、日本も改善できる余地がたくさんあると感じます。

一方日本では会計検査院が毎年税金の無駄遣いを指摘しており、二〇二三年度だけでも三四五件、総額六四八億円にのぼりました。これを知れば誰もがもったいないと思うでしょう。教育や福祉、災害復興といった分野に使えばどれだけの人が助かるのかと考えると数字の重みを実感できます。例えば六四八億円あれば、公立小学校に新しい教科書を配ったり、被災地に支援物資を繰り返し届けたりすることができるはずです。

ではそれを実現するためには私は次の三つを取り入れるべきだと思います。第一に、台湾のように税金の使い道をオンラインで公開し、途中経過や成果も見えるようにすること。第二に、インドやペルーのように税を使った政策が本当に効果があったか検証すること。第三に、スコットランドのように市民が意見を出せる制度を整えることです。まずは一から作り出そうとせず、実績のある政策から始めることで、確実に信頼を高めていきます。

税金は国民から集められた「未来への投資資金」です。透明性を高めれば「社会の役に立っている」ことの実感が生まれ、私達のような若い世代も将来、税の負担に前向きになれるように思います。中学生や高校生の今、だからこそ「税のあり方」を考えておくことが大切だと思います。

六九兆円という巨額の税金。その数字は、ただの金額ではなく、日本社会を支える力そのものです。私は他国の政策や過去を教訓に「見える税金」の実現を望みます。それこそが信頼と未来を築く第一歩になるからです。

私と夢と税金と

京都市立七条中学校３年　　山下　真生子

みなさんに「夢」はありますか。

私の夢は、陸上自衛隊の音楽隊に入隊し、音楽の力で人々の心と生活を守ることです。そんな夢を追いかけられるのは、自分の人生が税によって支えられてきたからです。

私は生まれたとき、口唇口蓋裂（こうしんこうがいれつ）という先天性異常がありました。唇、口の中の天井、はぐきなどが生まれたときから裂けているのです。そのままでは見た目にも問題がある上、食事もまともにとることができません。そんな私が生まれてすぐに手術を受けることができたのは、税金のおかげです。日本には、十八歳までの障害児を対象に医療費助成を行う自立支援医療という制度があります。この制度によって、本来ならば何百万円というお金がかかる手術の自己負担額を数千円ほどに軽減することができ、自治体の乳幼児・こども医療費助成の対象となれば、自己負担額をほぼ無料にまで軽減することができるのです。これらの制度で受け取れるお金は全て公費でまかなわれています。税金がなければ私は手術ができなかったし、追いかけられる夢の幅も狭まったと思います。税金が私の夢を広げてくれました。

中学生になり、私は吹奏楽に出会いました。楽器を吹くことも、目標に向かってがんばることも、仲間たちや先生から新しいことをたくさん学ぶことも、全てが楽しくて、その楽しさと同時に、こうして仲間や先生と音楽ができることがどれだけ恵まれていることかを感じました。私は吹奏楽部でクラリネットを吹いていますが、そのクラリネットは学校のものです。つまり私は、税金で購入されたクラリネットのおかげで、今この楽しさをかみしめることができています。そして、そもそも税金によって公立の中学校が存在していなければこの地域で暮らす仲間たちと出会うことはできなかったし、教員の収入は税金から出ているため、税金がなければ今の先生方にも出会えていませんでした。税金は私に新たな出会いをくれました。この出会いが私を夢へと導いてくれています。

もし私が将来、陸上自衛隊の音楽隊に入隊したら、活動費や給与は国民が納める税金が財源となります。しかし中には、「国民の税金で音楽を主の仕事としている自衛隊の音楽隊は本当に必要なのだろうか。」という意見を出す人もいます。でも私は、税金はただのお金ではないと考えています。私のように、人は税金に支えられた生活によってそれぞれの夢を持てるのです。自衛隊の音楽隊は、そんな夢を与える職業です。お金のままでは与えられない夢を音楽という形にかえて背中を押してくれるものです。

だから私は、税金を「夢」にかえて人に届けられるようになりたいです。

裁判所で考えた「税の正義」

大阪女学院中学校３年　　冨田　莉櫻

この夏、私は裁判所を見学した。実際に傍聴もさせてもらい、ドラマでしか見たことのないような本物の法廷の空気を体験した。白く広い法廷には、静かな緊張感が張りつめていた。証言台の前に立つ被告人、真剣な表情の裁判官、そして一言も聞き逃すまいとする傍聴席の人々。その姿を見て、「裁判ってこんなに静かで、でも重たいんだ」と感じた。

傍聴したのは、ある暴力事件の裁判だった。税金とは直接関係のない内容だったが、判決が言い渡される瞬間、私は思った。「これが『正義』なんだ」と。

私にとって『正義』とは、「ルールを守ること」だ。裁判所は、社会のルールを破ってしまった人に向き合い、何が正しいかをはっきりさせる場所。そして、その裁判所自体が税金によって支えられている。建物も人件費も、使われている資料や設備も全てが税金で賄われている。もし税金がなければ、裁判所も正義も成り立たない。

税金という言葉には、どこか「取られるもの」というイメージがある。でも、裁判所見学の経験から、私はその考え方が変わった。税は「正義を支える力」だと思った。道が整備されているのも、警察が安全を見守ってくれるのも、災害のときに避難所が開設されるのも、全部が税金のおかげ。つまり税金は、見えないところで人々の命や平和を守っている。

さらに言えば、税をきちんと納めることもまた「正義」だ。税金を払わない人がいたとすれば、その分誰かが苦しむ。社会の仕組みは、みんながルールを守ってはじめて成り立つ。税のルールを破ることは、裁判で罰せられることもある。税金は単なるお金のやり取りではなく、社会全体を支えるための約束ごとだ。だからこそ、その約束を破る人を放っておいては、社会の仕組みそのものがゆがんでしまう。

それを見逃さず、正しく判断するのが裁判所の役割だと、見学を通して知った。

裁判所は正義を示す「場所」であり、税もまた正義に深く関わっている。

ルールを守ることの大切さと、それを支える税の重みを、あの日私は法廷で実感した。

それまでは税金に対して「取られるもの」「なんとなく面倒なもの」という印象しかなかった。しかし、今では税が社会の仕組みを支える「柱」であり、「正義の実現」にも深く関わっているのだと気づいた。

将来、社会の一員として生きていく中で、税に無関心ではいられないと感じた。税の役割や仕組みを正しく理解し、自分にできることを考えて行動する力を身につけたい。責任ある納税者として。これからの社会と向き合い続ける立派な大人になりたいと、正義を守る人たちの背中を裁判所で見たからこそ、そう強く思う。

消えた税金が教えてくれたこと

神戸海星女子学院中学校３年　　椋野　心美

現在はもう使われていない税制度。私は今回の課題に取り組むにあたって、税金には多くの種類があることを知りました。中でも私が興味を持ったのが、「特別土地保有税」という、現在は課税されていない税金です。

特別土地保有税とは、昭和四十九年に導入された制度で、広い土地を所有している個人や企業に課せられていた税金です。当時の日本では地価が上昇し続け、投資目的で土地を買い占める人が増えていました。その結果、本当に家を建てたい人が土地を手に入れにくくなるという問題が起こっていたそうです。こうした状況を改善するために、国はこの税制度を設け、むやみに土地を持ち続けることを抑えようとしました。

ところが、平成十五年度からはこの税の課税が停止されました。理由は、バブル経済の崩壊によって地価が大きく下落し、土地を投資目的で買い占める人が減ったからだと言われています。つまり、特別土地保有税は役割を終えたと判断されたのです。

このことを知ったとき、税制度は一度決まると税率が変動することはあっても、制度自体がなくなることはないと思っていた私の考えが変わりました。社会や経済の状況によって税のしくみは見直され、時には使われなくなることもあるのだと初めて知りました。

また、税金にはただお金を集めるだけでなく、社会の問題を解決するための大切な役割があることにも気づきました。特別土地保有税は、土地の使い方を公平にしようとする意図を持った制度だったと思います。土地の値上がりに困っていた人たちにとってこの制度は暮らしやすさを取り戻すための一歩だったのではないでしょうか。

現代でも、都市部では住宅価格が高く、多くの人が住まいを確保しにくい状況が続いています。さらに、テレワークの広がりや少子高齢化など、時代が変われば新たな課題も生まれてきます。これからの社会でも、こうした変化に応じた新たな税制度が必要になるかもしれません。今回調べた特別土地保有税のように、税金は社会の課題に対応するための「しくみ」であるという視点を持つことが、これからの時代にはより一層大切になると思います。

今回の学習で税制度は社会の動きに合わせて変化し続けているということを知ることができました。過去に存在した制度を通して、税には暮らしを守るための工夫や意図が込められていることがわかり、税に対する見方がプラスの方へと大きく変わりました。今後は、社会の動きとともに税の役割にも目を向けながら、自分の考えを深めていけるようになりたいと思います。

希望の火打石

尼崎市立園田東中学校３年　　岩崎　透也

小学三年生の後期、私の人生は大きく変わりました。姉は私学の中高一貫の進学校を目指し、毎日机に向かって受験勉強に励んでいました。家の中には緊張感がただよい、私は幼いながらもその空気を感じ取っていました。そんな中、私にとって大きな出来事が起こります、父が癌で亡くなったのです。

父は東京に単身赴任をしていました。兵庫に暮らす私たち家族のために、毎週末のように夜行バスなどで帰ってきては、必ずどこかに遊びに連れて行ってくれました。その時間は短くても、私にとって大切な思い出です。けれども、私の目に映る父は、多忙のせいか心が沈んでいるように見えることもありました。その背中を今も忘れられずにいます。

やがて父は病に倒れ、私たちの前からいなくなってしまいました。そのときの衝撃は大きく、小学四年生から中学二年生まで、私は学校に通えないまま過ごしました。勉強からも友達からも遠ざかり、姉の机に向かう姿を横目に、取り残されていく自分を感じていました。

それでも家族の暮らしは続いていきました。母は黙々と働き、姉は学びを続け、私はただ時間の流れを見つめていました。どうしてここまで生活を保ててるのか、不思議に思う気持ちもありました。その答えを知ったのは、ごく最近のことです。ある日、ニュースで「遺族年金に関する法律の一部改正」について報じられていました。そのおかげで、制度の存在を初めて知ったのです。

私は深い驚きと同時に感謝を覚えました。不登校の間も、社会の仕組みが見えない形で私たちを支えてくれていたのです。もしその制度がなければ、姉は受験を続けられず、母も働きづめになっていたかもしれません。自分が立ち止まっていた間も、社会と確かにつながっていたのだと気づいたとき、心の奥に小さな希望が灯りました。

社会は目に見えないつながりによって支えられています。税金や保険料を納めることは、自分の未来を守るだけでなく、誰かの生活を支えることにも繋がります。そして必要なときには、年金という形でその支えが自分に返ってくるのです。

父を失った悲しみや、不登校で過ごした時間は消えることはありません。しかしその経験があったからこそ、社会の仕組みのありがたさを実感できたのだと思います。

私は将来、過去の自分のように立ち止まってしまった人と出会った時に、少しでも安心して歩き出せるよう、胸を張って「大丈夫だよ」と言えるようになりたいです。そのために今ある受験という壁を乗り越えて、社会や人を支えていけるような、たくましい大人を目指そうと思っています。

「ありがとう」を伝えたい

生駒市立生駒北中学校３年　　塩崎　陽梨

私が所属していたバドミントン部では、夏になると必ず悩まされたことがある。それは体育館の暑さだ。夏の体育館はサウナのように暑い。シャトルが揺らぐために扇風機は付けられず、窓も開けられない。強いて言うなら地獄のようだ。プレー中に何度も「熱中症」という言葉が頭をよぎった。私は顔が火照りやすいので「水分を取りなさい」と顧問の先生によく声をかけられた。けれど、どれほど気をつけても、熱中症警戒アラートが発表されると練習は中止になった。

引退を控えていた今年も例外ではなかった。私たちは今日も練習できないのかと悔しい思いを何度もした。残り少ない、貴重な練習時間。みんなと汗を流したいのに、それが叶わない。試合前でもお構いなく暑さはやってくるし、来てすぐ帰ることになった日もある。部活動がしたいという気持ちが強い分、練習時間を奪われることは、無念だった。

ある日、そんな私たちに朗報が届いた。なんと体育館にエアコンが設置されるというのだ。初めてそのことを聞いたとき、私は心が弾んだ。というのに、工事は夏休みに、完成は今年の秋だった。引退する私たちはそこで練習することができない。本音を言えば、私もその環境で練習してみたかった。いくら暑くても気合いで走った日々。それはそれで楽しかった。けれど、後輩たちはあの暑さに耐えずとも、全力で練習できる。熱中症の危険におびえることなく、仲間と夢中になれる。もう熱中症警戒アラートに邪魔をされない。それが嬉しく、どこか羨ましかった。

エアコンの設置には莫大なお金が必要だ。そのお金は税金から支払われている。税金と聞くと今までは、納めるばかりというマイナスなイメージだった。しかし、私たちにとって最大の悩みだった暑さは、税金のおかげで解決されるのだ。私が感じた無念を、次の世代が味わわずに済むのは、税があったからこそ。今回の経験で、税は私たちの生活や未来を形づくる力なのだと実感した。

振り返れば、学校や教科書も、体育館も、バスも、部活の試合や備品だって、すべて税で支えられている。私たちは日々その恩恵を受けながら生活していたのに、それを当たり前だと思い込んでいた。部活動という身近な出来事を通して、私は初めて「税に守られている」という実感を持つことができた。

後輩たちが快適な環境で練習できるように、将来の子どもたちもまた、もっと良い環境で学び、成長していく。そしてもっと良い社会を作っていってくれるのだろう。強い者が弱い者を守り、弱い者は強くなってまた弱い者を助ける。この循環こそが、次世代の素晴しい社会を構築していくのだと思う。

これは人々が支え合い、つくり出した希望だ。私自身もいつか、その希望を次の世代へ、灯していける大人になりたい。

森の未来をつなぐ森林環境税

和歌山県立田辺中学校３年　　上村　聖奈

森林環境税を知っていますか？この税金は、二〇二四年から始まり、国民一人当たり年間千円が課税されています。住民税に上乗せされる形で徴収され、全国の自治体に分配、森林の整備や保全活動に使われています。

私の祖母の山はこの税の恩恵を受けています。今年一月私の母が祖母の代わりに森林組合で行われた新春初競りに山主として参加しました。この行事は木材業者にとって一年の始まりを祝う大切なイベントであり、縁起物として高値で取引されることもあります。母が小学生の頃植林した杉と桧はまだ小さいので競りには出せないと言っていましたが、祖父や曾祖父が育てた木が競りに出されました。四年前に亡くなった祖父は林業従事者ではありませんでしたが、山の手入れをしっかりしていました。手入れをする人がいなくなった今、この森林環境税で祖父の山は「使って育てる循環型の山」に生まれ変わろうとしています。

森林組合の方が祖母の山に作業道をつける話を持って来て下さり、木材の伐採や運び出し、森林の手入れ、保全作業をする人や機械が通れるように考えてくれました。その作業道周辺に植林していた木は伐採され、初競りに出されることになったのです。

母の曾祖父が書き記した明治二十二年の水害日誌によると、この山の近くの川で山の深層崩壊が起こり、川の流れをせき止め、土砂ダムがされたとありました。作業道は山の中で起こる土砂崩れや火災などの災害時に復旧ルートとして使われます。作業道は、木を運ぶだけではなく森を守り、地域の人々の暮らしや安全を維持する道として必要なものです。

森林環境税によって、祖母のように森林所有者は整備費用の支援が受けられ、地元材の活用や木材の普及啓発に税金が使われることでその価値が高まりつつあります。さらに、国が徴収した森林環境税を、私有林の人工林面積・林業従事者数・人口などの基準に基づいて市町村と都道府県に分配したものを「森林環境譲与税」といい、その税は学校の机の天板や教室の床材に活用されています。無垢の木材で作られた机や教室で学ぶことは、子どもたちの心身の健康や学習環境の質を高める効果があることが近年分かってきました。

私の家の柱や梁（はり）や床板は、祖母の裏山にあった先祖が植えた桧を伐採して建てた家です。裏の山の桧を見に行ったとき、腕を木の幹にまわしても全てを覆（おお）えないほど、巨木でした。先祖の手によって植えられた木が今の私の暮らしを支えてくれているのです。森と人が長い年月をかけてバトンを渡してきたように感じました。そして私もそのバトンを未来の人に渡していきたいです。

和歌山の森を守ることは、私たちの暮らしを守ること。税金も、森を未来へつなぐための大切な力の一つなのです。

未来を守る約束

倉敷市立南中学校３年　　景山　煌世

あの夜、雨は止まらなかった。屋根や窓をたたく音が何日も続き、スマホの警報は何度も鳴り響いた。濁った川は堤防ぎりぎりまで迫り、家の中にいても胸の奥がざわざわして眠れない。テレビには「避難指示」の赤い文字。普段は静かな町が、見えない巨大な水の力に追い詰められていた。

二〇一八年、西日本豪雨。降り続いた雨が弱まって外に出ると、道路は所々で冠水し、側溝から泥水があふれていた。ニュースには泥に埋まった家、流された車、懸命に片づけをする人たち。あの映像は今も頭から離れない。「もし水があと少し高かったら…」そう思うと背筋が冷えた。

あれから数年、町は変わった。川幅は広げられ、堤防は高く厚くなり、道路も整備された。重機の音、工事車両、積み上がるコンクリート。あのとき不安に震えた町に「備える力」が形になって立ち上がっていくのを見ていた。そこに流れ込んでいたのは、水ではなく日本中から集まったたくさんの支援と、税金という希望の光だったのだ。

大規模な河川改修は個人や一つの町だけでは到底できない。材料費、設計、工事、復旧と改良にかかる長い時間。誰か一人では支えられない重さを、全国のみんなが少しずつ分け合って背負う仕組み、それが税金なのだと実感した。そして気づく。税金が守っているのは洪水対策だけじゃない。教科書、壊れた机を直す費用、通学路の街灯、災害時の非常食や避難所の毛布。こうした、あたりまえの多くに税金が使われている。給食のトレイを受け取る手を見ながら「これも支え合いの一部なんだ」と思うようになった。

もし税金がなかったら？堤防は作れず、壊れた道路もそのまま、避難所に備蓄もなく、次の大雨で同じ悲しみが繰り返されるかもしれない。税金は「災害が起きてから助ける」だけでなく「前もって備えて被害を小さくする」お金でもある。命の余白、安全の予備力。それが税金の正体だ。

では、僕たち中学生に今できることはあるだろうか。まず、知ること。何に使われ誰を支え、どんな未来につながるのか学ぶこと。次に、守ること。公共のものを大事に扱う、教科書を汚さない。水道を出しっぱなしにしない。無駄を減らすことも、立派な税金の活かし方だ。そして、備えること。避難訓練を本気でやる。家族と集合場所を決める。非常袋を点検する。命を守る準備は、税金で作られた仕組みと、僕たちの行動が重なってこそ力になるのだ。

税金は「僕たち全員の力」を集めて形にした共同の約束だ。今は守られる側にいる僕たちもやがて働き納税し、次の世代を守る側になる。そのとき「ありがとう」で終わらず、「今度は任せて」と言える大人になりたい。

だから伝えたい。税金、それは『未来を守る約束』なのだと。

消費税がなくなったら

玉野市立八浜中学校１年　　平藤　正堂

もう少しで夏休みだとワクワクしていたころ、七月二十日に行われる参議院議員選挙に向けて政治家たちの声がテレビから聞こえてきた。どの政治家もたくさんのマイクを握って力強く演説しているが、

「消費税減税で国民の暮らしを守る！」

と言っているのをよく見た。ぼくは、税金がぼくたちの暮らしを守っていると習ったのにおかしいなと疑問に思った。

調べてみると、やっぱり税金は公共サービスや医療、福祉などに使われていて、ぼくたちの暮らしを守ったり豊かにしたりするために必要なものだ。税金の中でも、消費税は買い物をするすべての人が必ず納める公平な税だ。むしろ、資金の確保のために過去に何度か税率が上がっている。消費税の税率を下げると、今の暮らしは維持できなくなるのではないだろうか。

選挙で政治家たちが言っていた消費税の減税は物価高への対策らしい。確かに、ぼくの好きなお菓子も二倍ぐらい高くなっているので、消費税がかからないとうれしい。五％割引の日のスーパーが混雑すると母から聞くので、消費税が減税になったらみんなも助かると思う。でも、ぼくは道路が陥没してトラックが落ちて運転手が亡くなったニュースが忘れられない。水道管が老朽化しているので、同じようなことは全国どこでも起こり得るらしい。ぼくは不安に思いながら道路を通りたくない。それと同じで、犯罪に怯えながら暮らしたくないし、病気になった時や災害が起こった時に余計に不安になりたくない。税金はぼくたちが安心安全に暮らせるように、たくさんの面から支えている。だから、消費税のない社会と安心安全に暮らせる社会なら、ぼくは安心安全に暮らせる社会がいい。物価高への対策は消費税の減税ではないことで政治家たちにお願いしたい。

デンマークの消費税は二十五％もあるが、教育費は幼稚園から大学まで無料で、病院も無料だ。国民の幸福度も高いらしい。これは高い税金でも払っていることが意味のあることだと理解できているからだと思う。ぼくが働くようになって消費税以外の税金も納めるようになったら、国の財政が苦しいからと言われるより、国民の安心安全で豊かな生活を保障するためと言われたほうが、気持ち良く税金を納められるだろう。同じ税金を払うなら不満に思うより納得して払うほうがいい。税について考えてみて、税は意味のあるものだと改めて思った。だから、税の仕組みを理解し、どんなことに税が使われているのか、正しく使われているのか関心を持っていきたいと思う。

空から届く命の支え

島根大学教育学部附属義務教育学校９年　　武田　紫愛

パタパタパタパタ…その日、サンルームで愛犬の洗濯物を干していると、家の上をものすごい音が通りすぎた。驚いてベランダに出てみると、低い位置をヘリコプターが飛んで行った。よく見ると、それはドクターヘリだった。数日後、友だちからこんな話を聞いた。お父さんが海で釣りをしていた時、崖から落ちて大けがをしたらしい。道が悪く救急車ではたどり着けなかったそうだ。そこで出動したのが―あの日見たドクターヘリだった。お父さんはすぐに病院に運ばれ、何ヶ月も入院とリハビリをして、今では元気に働いているそうだ。その話を聞いたとき、私はふと、あの日の音を思い出した。あの音は、「命をつなぐ音」だったのかもしれない。

ドクターヘリには、お医者さんと看護師さんが乗っていて、現場で治療ができる。遠い場所でもすぐに助けに行ける。でも、あんなすごいヘリを動かすのにどれくらいお金がかかるんだろう？誰がその費用を支えているんだろう？あとで調べてみると、一台あたり一年間の維持費に約二億五千万円、一回の出動でも約四六万円もかかると知って驚いた。しかも、そのお金はけがをした人が払うのではなく、国や県などの税金でまかなわれているという。さらに調べてみると、世界の国々ではこの仕組みが少し違う。例えばアメリカでは、ドクターヘリを一度使うだけで百万円以上の請求が来ることがあり、保険がなければ全額を自分で払わなければならない。ドイツでは保険でカバーされることが多いけど、未加入だと高額な自己負担になるらしい。イギリスでは、なんと寄付やチャリティーによって運営されているそうだ。それに比べ、日本では病気やけがをした人が費用を気にせずに助けを呼べる。これって、とてもすごいことなんだと思った。その時、私は初めて「税金ってなんだろう」と考えるようになった。もし税金がなかったら…。そんなに高いお金、自分で払えない人も大勢いると思う。ドクターヘリを使えない人が出てきたら、それは「命の差」になってしまう。そんな世の中は、こわい。私はそれまで、税金にはあまり良いイメージがなかった。「高い」「取られるだけ」と思っていた。だけど、周りを見てみると、学校の校舎、教科書、公園、道路、ごみ収集車、消防車、病院、そしてドクターヘリ…。いつもは気づかないけど、たくさんの大事なものが税金で成り立っている。

税金は「取られるお金」なんかじゃない。みんなで生きていくための、「見えないチカラ」なんだと思う。

あのとき、空から聞こえた音が、私の考えを変えてくれた。私もいつか、大人になって税金を納めるようになったら、その一部が誰かの命をつなぐために使われるのかもしれない。そう思うと、少しだけ誇らしい気持ちになった。

税に育てられたわたしたち

東温市立川内中学校３年　　柿坂　千咲子

新しい教科書が好きだ。新学期の初め、あの独特の紙の匂いに、胸が高鳴る。まっさらな教科書は、これからの一年を共に歩いてくれる相棒のような存在に思えて、なんだかわくわくしてしまう。ある年の春。私は、先生からもらった新しい教科書に名前を記入しようと、教科書の裏側を見た。すると、こんな文章が目に留まった。「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待を込め、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」私は、新しい教科書が毎年手に入ることに、今まで何も疑問を抱いてこなかった。当たり前のことだと思い込んでいたことに気が付いた私は、教科書について調べてみることにした。

最初に驚いたのが、世界中すべての国で教科書が無償で配布されるわけではないということである。オランダや欧米諸国は、教科書を有償で配布したり、使いまわしたりしている。貧しい家は、教科書を購入する余裕などない。教科書どころか、学校に通わせることすら困難だ。また、使いまわされている教科書はもちろん綺麗ではないし、書き込みなどもできない。日本に住んでいる私には、到底信じがたい事実だった。

しかし実際のところ、教科書だけを渡されても、私たちは学ぶことができない。それはなぜか。学習する際には、学習に適した「環境」が必ず必要だからだ。私たちが学ぶ場所である校舎や体育館やプール、そして教室の黒板や椅子や机、今やなくてはならないものの一つとなったパソコン・・・。今挙げたもの全て、税金でまかなわれたものである。「税」によってこれら全てを使用することができている、と意識しながら生活してきた人は、果たしてどのくらいいるのだろうか。正しい税の使い方を学び、ありがたさを噛みしめて生活していくことは、私たちが大人になるうえで必要不可欠なのではないかと思う。

「税」と聞くと、なんだか堅苦しくて、遠い存在のように思えてしまう。しかし、そうではない。私たちの生活には、税によってもたらされたものがたくさんある。誰かが納めた税金で、私たちは教科書を手に入れることができる。学ぶことができる。大人になることができる。このありがたさ、素晴らしさ、尊さを、一人一人が噛みしめて生きていってほしいと、強く思う。豊かな国、日本に生まれた私たちだから、今、当たり前のように学ぶことができる。この奇跡を、当たり前と思ってはならない。私たちは、未来を「期待」されているのだ。税によってもたらされたものを使用するということは、そういうことなのだ。誰かの税金で育てられた私たちは、そう遠くない未来で、誰かを育てるための税金を納めていかなくてはならない。これからの未来を担う若き命のために税金を納めることが、恩返しと言えるのではないだろうか。

私と本と税金

鳴門教育大学附属中学校３年　　瀧　可南子

私の趣味は読書だ。両親が本屋に連れて行ってくれる度に本を１冊買ってくれるのだが、それが昔からとても嬉しくて楽しみだった。しかし、月日が経つと読んだことのある文庫本が部屋の片隅の住人と化し、その本達の存在をもてあますようになった。漫画なら何度も読み返すが、文庫本は２回読み返すのが関の山である。部屋の片隅が読まなくなった本で埋め尽くされていくのも悩みだったが、１回だけしか読まない本にお金をかけてもらうのも子供心にどうなのかと思い、小学４年生の頃から図書館へ連れて行ってもらうようになった。図書館は素晴らしいところだ。自分が読みたい本が無料で読めるのはもちろんだが、自分だと選ばないような本も気軽に借りて読むことができ、その上読み終わった本が部屋の片隅でところなさげに存在しなくなったのはとても嬉しいことだった。自分で買うことに比べてのデメリットをあげるならば、返却日を守らなければならないことと、本の扱いに気を遣うところくらいだ。

図書館に行くと、老若男女問わず、多くの人が本を借りにきていたり、読んでいたりする。たくさんの本が整然と整理されて並んでいる様はとても気持ちが良い。図書館がどうやって維持されているのだろうと、小学６年生のときに疑問に思ったことがある。図書館には古い本もあるが新しい本も購入されているし、本をきれいに管理する図書館司書さんが何人もいるので、維持するにはそれなりにお金がかかるはずだが、私が本を借りるときにお金を取られることはなかったからだ。父に聞くと、「公共サービスとして税金でまかなわれているんだよ」と教えてくれた。その時は、「ふーん」としか思わなかったが、じわじわとその当たり前のことがすごく有り難いことだと思うようになった。

納税が国民の義務だということは小学校で習ったが、納税自体を自分事として意識していなかったため、ピンとこなかった。しかし、身近な生活インフラが、国民から納税されたお金で維持されていると分かると、納税の重要性がとても理解できた。納税の重要性が分かってくると、税金の恩恵を誰もが平等に享受できるシステムで動いている今の社会はすごいことだ、と改めて感じることができる。当たり前のように道路はきれいに舗装されているし、水道は蛇口をひねれば飲料水が出てくる。他にも、生活ゴミの収集や警察、消防などの社会インフラも税金からまかなわれているが、やはりすごいことだと思う。

こうして、自分たちが住みやすい環境を整え、その環境を維持し、互いに幸せになれるように皆がお金を出し合うことが「納税の義務」の重要な意味だと、身近なところからも感じることができる。私自身も私の家族も、私の友達や他の人達も、誰もが幸せな環境で生活できるように、「納税の義務」を果たし、社会に貢献できる大人になりたいと私は思う。

減税について

佐賀大学教育学部附属中学校３年　　横尾　愛

税金を下げることに賛成する人は多いだろう。しかし本当にそれでよいのだろうかと私は考える。最近では、地方の下水管の破損や老朽化したインフラが大きな問題となり、ニュースで取り上げられている。今でも地方自治体は住民の生活を支えるために多くの費用を必要としている。もし税金を軽くするだけを優先すれば、生活に欠かせない公共サービスや安全が守られなくなる危険があるのではないかと感じる。

八月、学校に佐賀財務事務所の方々が来られ、国の予算について考える授業が行われた。私たちの班はオリジナルの予算案を作り、専門の方にアドバイスをいただいた。私たちがテーマにしたのは「少子化と高齢化」という問題である。最初、私たちは高齢者が増えているのだから教育よりも年金に多くの費用を回すべきだと考えた。しかし話し合いをしていくうちに、教育費を減らせば子育てにかかる負担が増し、ますます親が子どもを産みにくい社会がうまれてしまうことに気づいた。そうなれば、より一層少子化が進み、結果的に社会全体を支える力が弱まってしまう。つまり、年金を守るためにも教育や子育てに予算をあてることは欠かせないのだということが分かった。

さらに日本は憲法で戦力を持てないと定められているため、防衛の一部をアメリカなどに依存している。また、アメリカに守ってもらうための費用や、国際社会の中で信頼を得るための協力資金も必要となる。発展途上国への支援も、日本の立場を維持し世界とつながるために欠かせない出費だと学んだ。こうした視点を得ることで、税金は単に「取られるお金」ではなく、「社会を安定させ、未来を築くために使われる大切な資源」と感じるようになった。

このことから、これから私たちは、まずひとりひとりが税金の役割を理解し、自分の生活と結び付けて考えることが大切だと思う。将来私たちが社会に出れば、必ず納税者となる。税は人任せにできるものではない。そのために、学生のうちから政治や経済の仕組みに関心を持ち、自分の意見を考える習慣を身につけていく必要があるだろう。

私たちが声を上げることで、よりよい社会をつくっていくことができる。単に「税金を下げてほしい」と願うのではなく、「税をどのように使えばみんなが安心して楽しく暮らせるのか」を考え、行動することこそが、これからの私たちに求められているのではないかと思う。

税金は、現在の生活を守るだけでなく、未来を支えるための「みんなの財産」である。

私は今回学んだことから、私は、しっかりと税金の意味を知り、ただ税金を安くしてもらおうとするのではなく行動していくことが大切だと分かった。

税金で生きた私

長崎市立小島中学校３年　　奥田　瑠奈

私が小学五年生まで過ごした場所は児童養護施設です。九年間暮していた児童養護施設では沢山の税金が使われていました。税金で生きていることを知ったのは小学生の頃です。毎年あたりまえにもらっていた誕生日プレゼント、朝昼晩毎日食べられるご飯、衣類や生活用品、病院や薬代などどうして払っていないのに当たり前にもらったり使用できるのかが不思議でした。高学年になったとき税金の仕組みについて学校で学びました。税金の使い道はみんなが使う公共の場や日本のためにある場所、職業などその中に私が暮らしている児童養護施設も入っていました。そのことをきっかけに興味を持ちました。詳しく知ってみたい気持ちもありましたが施設内ではインターネットが使えずそれ以上知ることはありませんでした。税金の事をする前、小学校低学年の頃に施設の職員に私たちのお小遣いや食費はここで働いてる人が払っているのかを聞いたこともありません。その時は国がお金を出しているということを少し教えてもらいました。学校の授業で税金の存在を知り税金は国に無限にあるお金ではなく日本で生きる大人が支払ったものだと知りました。その時に税金が国を通して私達の暮らしにつながっていることを知り、本当に感謝しました。施設で不自由なく暮らせたのも、しっかり栄養のあるご飯が食べられたのも税金があって本当によかったなと思いました。未成年の私には大人が払うような大量の税金を払ったことがありません。税金に納得できない人、生活が苦しくて税金を払うのが大変な人、さまざまな気持ちを持つ人がたくさんいると思います。今私が思う気持ちは、私が幸せに暮らせたようにそういう場所に正しく税金が使われてほしいと思いました。知らない人のために自分が払ったお金を使われるのを不快に思ったり児童養護施設に対していい思いをしていない人が世の中にたくさんいることを知っています。施設で暮らしていた私に対して国のお金を使って裕福な暮らしをしているや、特別扱いされているなど嫌な言葉をかけてくる人もいました。ですが、税金を使用しているのは子供たちだけでなく税金を支払っている大人も使用しているのです。病院や警察など身近なものにも税金が使われています。税金を払ったり使用する人に嫌な気持ちを向けず一人一人がしっかり払うようになってほしいです。もっと周りに税金の使い道や税金がないとどんな未来になるか、知ってもらったり少しでも税金のことについて前向きな考えを持つ人が増えたらいいなと思います。そのために学校で詳しく勉強したり、みんなが目に付くとこに記載したりして日本で暮す人が税金のことについて詳しく知る機会があるといいなと思いました。より良い日本になるために日本に住む人々が協力できることの一つだと思います。自分たちで過しやすい日本をつくろう！

税金がくれた安心と笑顔

佐世保市立光海中学校３年　　田淵　美来

私には障害のある弟がいます。言葉を話すことが難しく、毎日の生活の中でさまざまなサポートが必要です。弟が生まれた頃は、障害のこともよく分からず、福祉という言葉も自分とは遠いもののように思っていました。しかし、成長するにつれて、弟のまわりにはたくさんの人の支えがあり、その多くが「税金」によって成り立っていることを知りました。

弟は現在、療育施設や児童発達支援に通っています。そこでは、専門の先生が弟の成長に合わせた支援をしてくれます。例えば、体の体幹をきたえる理学療法士による訓練だったり、作業療法士による手先の訓練や体の使い方を学ぶ運動遊びなどです。弟はその時間をとても楽しみにしていて、言葉ではうまく伝えられなくても、そこに行く日は朝からうれしそうな表情をしています。安心できる場所があることで、家でも明るい表情を見せることが増えました。私たち家族にとっても、その時間は大切な支えです。こうした施設の運営には、私たちが普段支払っている税金が使われていると聞き、「税金って、誰かの暮らしを支えるためにあるんだ」と実感しました。

「税金はみんなで支え合うしくみ」だと学びました。税金があることで、道路や学校、病院が整備され、災害が起きたときには支援金や復旧のための費用にも使われます。中でも、弟が利用している施設のように、障害のある人やその家族を支えるための制度に税金が使われていると聞き、「税金は、私たちの暮らしの安心をつくる土台なんだ」と思うようになりました。

もし税金がなかったら、弟のような子どもたちはどこで安心して過ごせばいいのか、どこに頼ればいいのか、と考えると、とても不安になります。弟が安心して過ごせる居場所があることで、私も安心して学校に通うことができます。税金は、直接自分に見える形で使われていなくても、まわりの大切な人を支えてくれる、大事な存在だと感じます。

私は将来、福祉に関わる仕事がしたいと考えています。弟と過ごす中で、障害のある人にもその人らしい生活があることで、そしてその生活を支える社会のしくみが必要であることを知りました。そのしくみの一つである「税金」はただの支払いではなく、「みんなで支え合う」という気持ちのあらわれなのだと思います。

これから大人になり、自分も税金を納める立場になったとき、税金の向こうにいる誰かの暮らしを思いながら、社会に貢献していきたいと思います。そして、今はまだ子どもですが、税について正しく理解し、必要なところに使われているかに関心を持ち続けることが、やさしい社会をつくる一歩になると信じています。

僕の町が壊れた日

学校法人鎮西学園真和中学校３年　　清永　皐樹

それは本当に突然起きた。二〇一六年四月十四日、夜。ゆらゆらと地面が揺れ出し、家が軋み始めた。僕は立ち上がることもできず、必死に床をつかんでいた。震度七の揺れが二八時間以内に二度も襲った熊本地震。六歳だった僕は、揺れが収まってからも家の中にいるのが怖くて、しばらく車の中で過ごした。古い家だからあんなに揺れたのだと思っていた。でも、住んでいた阿蘇から祖父母の住む益城町へと向かう道すがら目にしたのは、大きく地割れしうねる地面、崩落した道路、倒壊した家屋、機能しない信号と、さんざんに壊れた町の様子だった。この地震で阿蘇カルデラ外輪山の崖は横幅約二〇〇メートルが崩れ落ち、交通の要衝も土砂に呑まれた。頑丈な阿蘇大橋まで橋げたから崩落した。見慣れた景色は一変した。この地震での人的被害は直接死五〇人、関連死二二三人。車中泊を余儀なくされた人も多く、避難生活は苛烈さを極めた。公になった負傷者だけでも約二八〇〇人。その他、建物被害や停電、断水によるライフライン問題、交通インフラ麻痺による生活への影響に皆が打ちのめされた。日常が巨大な暴力によってあっけなく奪われ、それぞれが命を守ることだけに集中したあのとき、復興への気力もお金も足りてはいなかった。

今、僕は安全に整備された町、耐震化の進んだ学校で学ぶことができている。発災直後に県知事が「創造的な復興」という方針を掲げたように、地震前より安全で便利な町がつくられてきたからだ。ここには国や県、市町村の税金が使われている。予測困難な災害で国民の安全な生活が揺らがないよう、復興に充てられる税金があった。その税金は湯水のように湧き出るものではなく、誰かが限りある自分の時間やエネルギーを注いで得た収入から払われるものだ。小学生の頃、僕はお菓子を買うのにレジで一円足りなかったことがある。でも後ろに並んでいた人がそっと一円を渡してくれて会計を済ませることができた。所持金の把握もせず、見知らぬ人にお金を出してもらうなんて反省すべき出来事だ。でも、僕ががっかりしないようにと差し出してもらった一円はあたたかく、忘れられない出来事となった。僕の町が壊れた日、誰もが不安そうな顔をしていた。でもその日から税金が動き続けて、各分野での地道な作業が続けられて、町も人々の希望もよみがえった。失われた命だけは戻らなかったけれど、震災で起きたことを記憶し教訓を後世に伝えるため「熊本地震　震災ミュージアムＫＩＯＫＵ」が建てられた。直接もらった一円同様、税金はとてもあたたかかった。僕は税に感謝している。

税金は災害だけでなく社会保障や教育、公共事業等、安心安全な暮らしのすべてに使われる。僕は税の恩恵を自覚し一生懸命学ぼうと思う。そしてしっかりと納税する大人になり、受けたぬくもりを巡らせていきたい。

「関税から考える世界のつながり」

別府市立鶴見台中学校３年　　徳丸　葵

「アメリカが、すべての輸入品に高い関税をかける。」最近、ニュースでトランプ大統領が語る姿を見て、関税という言葉が強く心に残った。彼の最初の任期の時もそうだったが、再び大統領になった今、その動きは私たちの生活と無関係ではない。遠い国の話ではなく、今まさに起きている問題として、私は関税について考え始めた。

そもそも関税とは、外国からの輸入品にかけられる税金のことだ。その主な目的は、自国の産業を守ることにある。例えば、外国から安い製品がたくさん入ってくると、国内の同じ製品が売れなくなり、作っている会社が困ってしまう。そこに関税をかけることで輸入品の値段を少し上げ、国内の産業が競争しやすくするのである。国内の企業や雇用を守るための、いわば「防波堤」のような役割だ。

もちろん、関税には良い面ばかりではない。私たち消費者にとっては、輸入品の価格が上がるという直接的な影響がある。多くの人々が使うスマートフォンも、その部品の多くは海外製だ。もし高い関税がかけられれば、製品の値段が上がり、私たちの負担が増えることになる。

さらに大きな問題は、国と国との関係に影響を与えることだ。トランプ大統領が進めるように、ある国が一方的に高い関税をかけると、相手の国も「仕返し」として日本の製品に関税をかける「報復関税」に発展しかねない。日本は自動車や電子部品など、優れた製品を世界中に輸出している。もし貿易戦争のような状態になれば、日本の製品が海外で売れなくなり、日本経済全体が大きな打撃を受ける。自国を守るための関税が、結果的に自国の首を絞めることにもなりかねないのだ。

トランプ大統領の政策は、「自国の利益を最優先する」という考えに基づいている。自分の国のことを第一に考えるのは大切かもしれない。しかし、現代の世界は貿易などを通じて複雑につながり合っている。一つの国が自分だけの利益を追求し、高い「壁」を築いてしまえば、国同士の信頼関係は失われ、世界全体の経済が混乱してしまうだろう。

関税は、国内産業を守るために必要な「道具」であると同時に、使い方を間違えれば国同士の関係を壊しかねない「両刃の剣」なのだと分かった。大切なのは、自国を守ることと、世界と協力することのバランス感覚だろう。

ニュースで流れる難しい言葉をただ聞き流すのではなく、その背景や私たちの生活への影響まで考えること。そして、現在進行形の問題として見つめていくことの大切さを学んでいる。これからの未来を生きる私たちは、自国のことだけでなく、世界とのつながりを意識し、共に生きていくという視点がますます重要になっていくと思う。

納税は愛を継ぐ

学校法人川島学園れいめい中学校３年　　重永　樹里

「ばあば、頑張ったね。ありがとう。」
家族が見守る中、祖母の鼓動は停止した。祖母は最後まで生き抜き、命を全うした。

私が小学校五年生の時に、祖母は亡くなった。幼かった私は、入院している祖母に会うことすら許されなく、大人も厳しい時間制限があった。例え患者が危篤状態だとしても、例外などない。またコロナ陽性患者は、お骨になって初めて家族と再会が叶う状態となる。コロナ禍は今までの常識を変えてしまった。家族が、最後の時間を一緒に過ごせないなんて間違っている。誰に怒りをぶつけたらいいのか分からない苛立ち。祖母の寿命はコロナ禍の収束を待ってくれそうにない。

祖母の限りある時間を大切にする為に、この不条理を乗り越えようと、私達家族は話し合った。介護保険を使い、祖母を看取る大きな決断をした。老人ホームで働く母が断言する。介護保険は、祖母の尊厳や家族が抱えるあらゆる負担、何より家族の絆を守ることができると。また、介護保険は税金から成り立ち、経済格差に左右されず、誰でも分け隔てなく受けられる。私達の命綱だとも言った。

祖母は、介護支援専門員・介護士・介看師、福祉用具専門相談員・衛生師・医科と歯科の主治医の七つの職種で構成してもらった。寝たきりだった祖母の体温や血圧、その他脈拍呼吸など体調管理をし、次にやるべきことを示してくれる。家族が置き去りにならないよう、詳しく説明し判断を委ねてくれた。いつしか、家族も支援チームの一員となっていた。

祖母一人に、どれだけ多くの人が支えてくれたのだろう。祖母を通して、改めて人は独りでは生きられないものだと学んだ。税金の恩恵は、私達家族の望みを叶え後悔のない時間を過ごすことができた。祖母が亡くなった時、大きな淋しみの中にも全力で祖母を支えてくださった支援チームに、大きな感謝の気持ちで一杯になった。

税金は、社会保証となり当たり前のように誰かの助けとなっている。現代社会は、自分の生き方や在り方を決め、うやむやにせず最後を迎える場所を選択できる。だからこそ、税金は多様化する選択の架橋となり、私達の生きる礎となっている。税金が高いと不満を言う人は、一つの方向でしか見ていないと自分に問うてみて欲しい。自分を優先して欲しい余りに、自己都合を強く主張しているだけではないか。

私の祖母が税金で支えられたように、私も誰かの一助となりたい。社会に役立つ納税をする為には、勉学に励み経験を積み、目標とする将来の夢を叶えることだ。これが今の私にできること。納税は、未来を創り継ぐ価値ある義務であり、人への愛であると気付いた。

現代を生き抜く私達が、社会の担い手として喜んで納税したい。愛があふれる社会保証を、全ての国民が受けられるように。

支え合う社会をつくる税金

うるま市立高江洲中学校３年　　仲村　心恋

私の父には、障がいのある兄と弟がいます。父は「きょうだい児」として育ち、幼い頃からたくさんの悩みを抱えていました。家庭でも両親からの愛情をあまり感じられず、寂しい思いをしてきたと聞きました。

そんな父にとって、心から信頼できる存在が、母方の祖父でした。祖父は礼儀やマナーを教え、一緒に遊び、アイスを買ってくれるなど、父の心の支えになってくれたそうです。父は今、家庭を持ち、私たち家族を大切にして生きています。けれど最近、祖父母から「障がいのある兄弟の面倒を見てほしい」と強く言われ、心が苦しんでいます。一緒に暮らすには現実的に難しく、父は行政の支援を受けながら、兄弟のために福祉施設への入所を考えるようになりました。もちろん、見捨てる気持ちはありません。面会や関わりは続けながら、お互いに安心して暮らせる形を選びたいと思っているのです。

実は、その祖父母は昔、障がい者のための作業所を、地域で先頭に立ってつくりあげた人たちです。今では、その作業所も成長し、プロのスタッフによる支援が行われ、父の弟も通っています。祖父母が歩んできた道には、障がいのある子どもたちへの深い愛情と、社会への強い思いがあります。だからこそ祖父母にとって、「兄弟を施設に預けたい」という父の提案は、自分たちの努力が否定されたように感じてしまうのかもしれません。時には「冷たい」「そんな事はさせない」と心ない言葉を父にぶつけてしまうこともあります。私はその言葉にショックを受けましたが、今は、祖父母もまた「支えてきた誇り」や「愛情を注いできた年月」に強くこだわるのも無理はないと感じています。ですが、福祉も時代と共に変わっています。誰か一人がすべてを抱え込むのではなく、社会全体で支える仕組みが必要です。そしてその支えの柱こそ、「税金」です。障がいのある人が施設や作業所で安心して過ごせるように、またその家族が安心して過ごせるように、またその家族が相談したり休んだりできるように、福祉サービスや支援制度は整えられています。その運営に使われているのが、私たちの税金です。税金というと、なんとなく「とられるもの」「自分に関係ないもの」と思われがちですが、実は困っている誰かをそっと支える「見えない力」だと思います。父が安心して相談できる場所があること、兄弟が安心して通える施設があること、それはすべて税金の力であってこそ実現できることです。

私はこれからも、税金が人の人生を支えるものであることを忘れずにいたいと思います。そして、家族のかたちも支援のかたちも一つではないことを、多くの人に知ってもらいたいです。税金は、誰もが「自分らしく生きられる」社会をつくるための、大切な仕組みなのだと思います。

炭素税を取り入れよう

学校法人尚学学園沖縄尚学高等学校附属中学校３年　　神下　美海

私たちが日々使っている電気や乗り物、クーラーなどのさまざまな電化製品は、生活のあらゆる面で「二酸化炭素」という温室効果ガスが出ています。この二酸化炭素が地球温暖化の原因であることも社会で近年よく聞くようになりました。また、異常気象や大雨、気温の上昇でも地球温暖化が影響していることを知りました。

こうした問題を改善するために、私は「炭素税」という税金のしくみを日本でもより取り入れていくことを提案します。炭素税とは、二酸化炭素を多く出す石油や石炭のエネルギーにかけられる税金です。授業で海外のめずらしい税について学ぶ機会があり、太らないための税などについて知り、他にも知りたくなり、「炭素税」というものを知りました。

使えば使うほど税金がかかるので、一人一人が二酸化炭素を減らそうというきっかけになると思います。

実際に、カナダやスウェーデンでこの炭素税をすでに導入されていて、スウェーデンでは３０％以上の二酸化炭素の軽減に成功しています。一方、日本では、一部で導入されているが、あまり効果を得られていないのが現状です。

では、炭素税を高くすると生活が苦しくなるのでは？という意見もあるでしょう。確かに、電気やガソリン代が少し上がる可能性はあります。しかし、その税収を使って再生可能エネルギーを導入してもらう会社の支援金にしたり、電気自動車や省エネルギーの家電の購入の援助したりすることで、国全体で環境にやさしい社会づくりの方向へと進んでいけると思います。

私たち一人一人も電気の使い方や移動手段の選び方を見直すことになるでしょう。小さな努力かもしれませんが、一人一人の努力が地球の未来を守ることができる大きな力になると思います。

税金というと、「お金を取られるもの」というイメージを持つ人が多いです。しかし本来、税金は私たちの暮らしをよりよくするためのものです。道路や学校、防災対策など、多くの面において税金は、私たちの暮らしを支えています。炭素税もその一つであり、環境保護への大きな一歩であると思います。

もし、炭素税を強化すれば、企業は環境にやさしい製品やサービスを開発しやすくなります。

地球温暖化は世界全体での問題であり、どこか一つの国の努力では解決できません。しかし、日本が率先して取り組めば他国にも良い影響を与え、未来へ豊かな地球を残すことにつながると思います。

私は、炭素税が単なる負担ではなく、未来への資金として理解される社会を願っています。環境を守る一歩として、炭素税を活用することが、今の私たちにできる大切な責任だと思います。

薬袋にある税金のありがとう

函館白百合学園中学校３年　　中谷　瑠唯

私の母は薬剤師です。白衣を着て、患者さんの名前を何度も確認しながらひとつひとつ丁寧に薬を渡しています。母の働く姿はとてもかっこいいけれど、忙しくて帰りが遅くなる日も多い毎日です。そんなある日、ふと私は母に聞いてみました。「薬って高そうだけど、どうして私は無料なの？」母は優しく答えてくれました。「医療費って、実はすごく高いんだよ。でもね、日本には健康保険制度があるから、自己負担が３割で済むの。そして、あなたの住んでいる市では、市が税金を使ってその分を負担してくれているから、子どもたちは無料になっているのよ。これも、みんなが納めてくれている税金のおかげなんだよ。」私は驚きました。いつも何気なく無料でもらっている薬の裏で、「税金」という見えない力が働いていたなんて、思ってもみませんでした。

母はよく言います。「お薬を渡すのは仕事だけど、その人の心と体が少しでも軽くなってくれたらいいなって思ってるの。」そんな母の仕事も、国の制度や税金があるから成り立っているのだと知り、私は税金に対する気持ちが変化しました。前までは、税金を「ただ払わされているお金」だと思っていました。でも今は、「人のぬくもり」のように感じられるようになりました。

病気やけがは、誰にでも起こることです。もし税金がなかったら、薬をもらいたくてももらえない人、病院に行きたくても行けない人が増えてしまうかもしれません。そう思うと、税金は誰か一人を助けるためのものではなく、「みんなで支え合う仕組み」なのだと気づきました。

病院だけでなく、小学校や中学校の学費、私達が毎日使っている道路の整備など、私達の生活のさまざまな場面で税金は使われています。目には見えないけれど、確かに私達のすぐそばにある。それが、税金の力なのだと思います。だから私は、日々、所得税を納めてくださっている働く人々や、消費税を払って物を買ってくれている人々に、感謝の気持ちを込めて学校生活を送りたいと思います。

そして、薬剤師である母の背中を見て育ちながら、将来は私も誰かの健康や命を支えれる大人になりたいです。そして、きちんと税金を納め、見えないところで誰かを支えられる大人になりたいです。

私は気がつきました。「ありがとう」は、薬をくれる母にも、支えてくれる税金にも伝えたい言葉なんだと。

私たちが支える未来の社会

北海道教育大学附属札幌中学校１年　　岡田　あさひ

将来、私たちはどのくらいの税を負担しなければならないのだろうか。そんな疑問がふと頭をよぎった。私たちはいずれ大人になり、社会を支える側に回っていく。そんな未来ははっきりとは見えないが、今から考えておくべき大切な問題だと私は思う。

二〇〇〇年には、一人の高齢者を支える現役世代は三・六人いた。しかし、少子高齢化が進み、二〇二〇年には一・九人まで減少し、将来二〇五〇年には一・三人まで減ると予想されている。これは、働く人が減る一方で支えるべき高齢者が増えることを意味し、社会保障費の負担が重くなることを示している。

こうした状況の中で、税の負担が増えるのを完全に止めることは厳しいだろう。人口構成の変化は自然の流れであり、私たちの力だけで簡単に変えられるものではない。しかし、ただ負担に耐えるだけでなく、それとどう向き合い、どう考え、どんな行動を取っていくかが問われているのだと思う。

そもそも税金は、決して「重荷」だけではない。社会全体を支える「助け合いのしくみ」だ。今、税金によって生活を支えられている高齢者も、かつては税を納める側として社会を築いてきた。そのバトンを、これから私たちが受け継ぐ番なのだ。

もちろん、税金が無駄に使われていないか、もっと効率的な制度にできないかといった視点も重要である。ただ不満を言うだけでなく、「自分はどんな社会にしたいのか」「どう支えていきたいのか」と考える姿勢が、これからの時代にはますます求められていくはずだ。

例えば、教育、医療、介護、災害対策、道路や図書館など、私たちの身の回りには税によって支えられているものがたくさんある。私自身も、通っている学校や使っている教材、病院や公共施設など、日々の生活の中で税の恩恵をたくさん受けていると感じる場面が多い。税金は未来を生きる私たちへの「投資」でもあるのだ。

だからこそ、税について無関心でいてはいけない。一人ひとりがその意味や役割を理解し、「どう使われるべきか」「何を支えるべきか」を考えることが大切だ。税負担の増加は避けられないかもしれないが、それを「社会を良くするための支え」としてとらえられたら、きっと未来に希望が持てるだろう。

未来、私たちの税の負担がどれほど大きくなっているかはわからない。しかし、その未来が「苦しみ」だけで終わるのか、それとも「支え合い」で乗り越えられる社会になるのかは、今の私たちの意識と行動にかかっている。私は税を「重荷」ではなく「誇り」として考えられるような社会を、みんなで築いていきたいと思う。

あたたかい一杯の裏側に

秋田市立城東中学校３年　　伊藤　佑月

何気ない学校生活。何気ないお昼の時間。私はふと不思議に思うことがある。毎日提供される温かく栄養のある給食が、いったいどれほどの手間と費用によって支えられているのだろうか。自宅での食事作りを思い返せば、献立を考えるのも調理するのも一苦労だ。ましてや、何百人分もの食事を、毎日、時間通りに、栄養バランスまで考えて準備するというのは、並大抵のことではないはずだ。調べてみて現実を目の当たりにした。巨大な釜で煮込まれるスープ、丁寧に下処理された食材、慌ただしくも整然と働く調理員の方々。そして、衛生管理や栄養バランスを徹底するために、細かな記録と点検が行われていると知った。想像以上の労力と責任が、私たちの一食に込められていた。だが、さらに驚いたのは、その運営の多くが税金によって支えられているという事実だった。

私たちが納めている給食費は、あくまで食材費の一部にすぎない。実際には、施設の維持管理費、設備投資、光熱費、調理員や栄養士の人件費など、さまざまな費用が必要であり、その大半は市や国の予算、つまり税金によってまかなわれている。「税金で給食が成り立っている」という事実は、私にとって一つの転機だった。

これまで私は、税金と聞いても「給料からひかれるもの」「大人たちが不満を口にするもの」というくらいの認識しか持っていなかった。しかし、目の前の食事に税金が使われていると知った瞬間、それはまったく違った意味を帯び始めた。税金はただ国に「取られる」ものではない、社会全体の未来と安全、そして私たちの「当たり前」を形づくるための投資なのだ。この給食だけではない。教科書、図書館、道路や公園、さらには病院や消防といった社会インフラまで、あらゆる場面で税金は使われている。しかし、それらの多くは「あって当然」と見なされ感謝されることは少ない。目の前のあたたかい一杯のスープが誰かの働きと、社会全体の支えによって生まれていること。その一杯が、私の健康をつくり学びを支えてくれていること、それに気付いたとき、私は給食のありがたみを初めて心から実感した。

将来、私も働くようになれば税金を納める立場になる。そのときには、きっと思い出すだろう。子どものころ何気なく食べていたあの給食。その裏側に合った無数の「見えない支え」の存在を。そして今度は自分が支えの一部となって、未来の誰かの食卓や学びを支える番だということを。日々の生活のなかで税金のありがたみを実感する機会はそう多くない。けれど、だからこそ私は毎日食べている給食を通してその存在に気づけたことを大切にしたい。

「あたたかい一杯の裏側に」―そう思えるようになった自分の変化もまた、社会からの贈り物なのかもしれない。

自分が支え、支えられる税制度

河北町立河北中学校３年　　足立　大河

僕は、一昨年の春休みにルーツ巡りとして香港を訪れた。僕が産まれる直前まで、父の仕事の都合で生活し、香港の病院で診察を受けて育った。その後、帰国したが中学生になったことをきっかけに、両親と兄が生活していた香港とはどういう国なのかを知る旅に出かけた。

香港の空港に着くと、ありとあらゆる場所に「免税」という看板が掲げられていた。僕は、両替をしてお菓子を買ってみると、表示価格のままの金額で買うことができた。これに僕は、消費税のかからない素晴らしい国だと感激し、母に

「消費税がかからないこの国での生活は、商品が安く買えて最高だね。」

というと、

「メリットばかりではないんだよ。消費税がなかったり、国に支払う税金が少なかったりする分、医療費などは自己負担なんだよ。」と教えてくれた。実際に、僕が産まれるまでの健診の費用はすべて自己負担で、一回の費用が約二万円かかり、出産まで、トータルすると約三百万の費用がかかることを聞いた。日本では約五十万円ということも聞き、その差にとても驚いた。そこで、他国の税制についても興味が沸き、税への関心を持つきっかけとなった。

その旅がきっかけとなり、異国への興味が沸いた僕を見て、母が学生時代に留学していた台湾へと連れていってくれた。台湾では、また制度が違っていて、消費税は五パーセントかかり、税込みで表示された金額をそのまま支払った。医療費は、日本と同様に、台湾の住民を対象とした全民健康保険というものがあり、保険料率が五・一七パーセントだった。出産費用についても調べてみると、トータルの金額が約三万円と低く、大部分が補助されると知った。三国を比較すると、同じアジアでも、税制が全く違うことを知った。

また、香港と台湾を訪れて、貧富の差が激しいことを感じた。両国ともに、観光地がにぎわう反面、地方ではお金をもらいに観光客に近寄る姿があった。これを見て僕は、日本人で良かったなと強く実感した。そして、母がよく言う、

「私たちは国に守られて生きている。」

という言葉の意味がよく分かった。

僕の父は、僕が生後二か月のとき、香港で病死してしまった。それでも僕が不自由なく、暮らせているのは、この税制度があるからだと強く実感した。僕はこの恩返しができるよう、学校生活でたくさんの事を学び、将来は社会のために役立つ人間になりたい。そして、自分は税に支えられて生きていることを実感し、これからもしっかりと税を納めていきたい。

税とともに生きる

檜枝岐村立檜枝岐中学校３年　　星　優月

私は社会科の授業が好きだ。特に昔の人がつくった様々なものの始まりを知ると、その背景や当時の人々について想像が広がり、とてもわくわくする。それは建築物であったり、今に活かされている社会の仕組みであったりするが、知るたびにそれらがうまく成り立っているということと、それを思いつき、広めた人々の知恵に感心する。

税金もその一つだ。一学期、私たちは学校で租税教室があり、税金の種類やどのようなところに使われているのかを学んだ。私たちの地域には温泉があるため、温泉に入る際にお客さんが百五十円を税金として支払うという、入湯税が身近な税金として挙げられる。現代だからこそ入湯税が日常的に浸透しているものの、最初に思いついた人は本当にすごいと思う。

租税教室と同じ頃、ニュースでは参議院選挙の演説の内容を報じていた。「所得税の見直し」「食料品の消費税をゼロに」「消費税の減税、段階的廃止を」。選挙の一つの争点となっていた税についての主張を見て、私は疑問に思った。なぜ大人は私たちに税の大切さを教えているのに、それを減らしたり、無くしたりすることを主張しているのだろう。私たちの今を支えてくれている税金を、大きく変えてしまうのは問題ではないのだろうか。

そこで私は、どんな視点で税制が見直されることがあるのかを調べてみた。税制改正は、四月から秋ごろまで時間をかけて審議され、その視点は主に三つに分けられるそうだ。一つ目は政策的な理由で改正されるもの。二つ目は災害対応のために改正されるもの。そして三つ目が、時代に合わせて見直されるものである。私は、時代の変化によって税金も変えられているということに驚いた。考えてみれば、確かにそれは必要なことである。時代が変化すれば人々の生活も変化するのだから、そのしくみが変わらない方が問題だ。

私は今まで、税金を払わなければならないというきまりのなかで私たちは暮らしているのだと思っていた。しかしそうではなくて、税金が私たちに合わせて変化するということは、私たちはそのきまりとともに暮らしているのだということに気が付いた。

これからの時代、私たちが生きていく時代は予測不可能であるとよく耳にする。だからこそ、生活の変化が起きたときに、税金や他にも色々な社会のきまりを変えられるよう、一人一人が自分の声を届ける投票に行くことが大切だと思った。

今までもこれからも、ずっと私たちは社会のきまりとともに変化しながら生きていくだろう。私は納税者、そして三年後からは有権者として、私たちの未来を支えられるよう、納得のできる行動をしていきたい。

大きな木の根を張るように

土浦日本大学中等教育学校３年　　髙田　汐音

小学一年生の夏、私は心臓の手術を受けることになった。病名は「動脈管開存症」。小さな私には何もわからず、ただ漠然と怖く、大きな不安に包まれていた。私だけではなく、両親も不安は抱えていた。東京での手術は、高額な医療費だったからだ。そのときに両親が申請してくれたのが「乳幼児医療費助成制度」だった。この制度のおかげで、家計の負担となっていた医療費が大幅に減ったと後から聞いた。

当時の私は、まだその制度のありがたさを理解できなかった。しかし、学校の授業で税金について学んだ際、ふと「あの入院の時はどうだったんだろう？」と思い、両親に聞いてみた。すると、この乳幼児医療費制度は、私たちが住む自治体が医療費を肩代わりしてくれる仕組みであり、その財源は、私たち国民が納める税金によって賄われていることを教えてくれた。

この話を聞いて、私は大きな衝撃を受けた。私の手術は、見ず知らずの誰かが納めた税金によって支えられていたのである。それはまるで、深い大地に張り巡らされた根のように、目には見えないけれど、頑丈な基盤となって私を支えてくれた。私を支えていたのは、身の回りの大人だけでなく、社会全体の人々でもあったのだ。そのことを知った時、私は感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

これは私だけの特別な経験ではない。実際には多くの人が税に助けられたことはたくさんあるはずだ。例えば、普段私たちが使っている学校の机や教科書、そして安全な道路。これらも全て税金によって支えられている。税金は私たちの暮らしを陰で支える、人と人をつなぐ命の根幹である。

ＳＮＳなどでは「税金をなくせ」「増税反対」といった批判的な意見をよく目にするが、そうした意見を持つ人は、今一度税金について考えてみてほしい。なぜなら、私たちが納めている税金は、きっと誰かのことを助けていて、私たち自身もまた、税金によって助けられているからだ。税を納めることは、単なる義務や負担ではなく、人助けをしていることそのものである。自分が納めたお金は、巡り巡って誰かを救うことになり、その恩恵は自分自身にも返ってくるのだ。

私は改めて「税」という言葉の重みを感じた。それは決してマイナスなイメージを持つべきものではなく、誰もが安心して暮らせる社会の「基盤」だと捉えたい。私が成人して納める税金が増えた時、私はもっと多くの人を救うことができるのかもしれない。人と人をつなげる命の根幹、それが税金だと知った。支えられていた私が、今度は根となって誰かを支える番になれたらいいなと思う。

誰かの納めたお金が、また別の誰かを支える根となり、その上に立つ木には、たくさんの実がつき、誰かの命を育む力になりますように。

全国の人に感謝して

栃木市立栃木東中学校２年　　松尾　采美

私の母は古くから続く神社の家に生まれました。緑豊かな田舎にある神社で、本殿は室町時代後期に建てられ、国の重要文化財に指定されています。

私が幼稚園児だった時、栃木市では豪雨災害がありました。その時、神社の周りには土砂災害警戒区域があるため、祖母、曽祖母、叔母、いとこ達は、避難指示が出る前に私の家に避難しました。しかし叔父は、神社が心配で、指示が出るまでは自宅に残ることにしたのです。幸い、神社にも自宅にも被害はなく済んだのですが、叔父が神社を守ろうとするには、様々な理由があったと後で知りました。

本殿の屋根は檜皮葺という工法で、檜の樹皮を薄くはぎ、それを何枚か重ね、金属ではなく竹釘で固定し作られています。屋根は数十年に一度葺き替えが必要で、前回の葺き替えは十九年前に行われました。この葺き替えにかかる多額の費用のうち、二分の一を国、四分の一を県、八分の一を市、残りの八分の一を神社の氏子で負担したそうです。実に費用の八分の七に税金が使われたことになり、それは全国のたくさんの人に、神社の歴史と文化を守っていただいたことになるのです。そのことへの感謝の気持ちが、叔父が神社を大切に守ろうとする理由の一つだったのです。

税金の使い道として、中学生の私たちにとって身近なのは、医療や教育に関するものだと思います。これらは中学生にも、税金の支えがあって日々生活していることを実感しやすいものです。しかし、調べてみると、税金の使い道は多岐にわたり、私の知らなかった使い道もたくさんありました。将来納税者になる私も今からしっかり税に関心を持ち、納税の意義を考える必要があると思いました。私は、屋根の葺き替えの話を通し、全国の顔も名前も知らない多くの人のおかげで、神社の歴史や文化が守られていることを知りました。自分が知らずに、税金の恩恵を受けていることもあるし、自分の身近ではなくても、納めた税金が、どこか遠くで知らない誰かの役に立つことに使われ、感謝されていることもあると知ることができました。次に屋根の葺き替えをするのは、二十年以上先になるそうです。その頃私は、納税者になっています。今よりずっと税に対する理解が深まっていることでしょう。税金は古くから続くものを守ること、そしてそれを未来につなげる役割も担っています。その税金を納めている全国の人に深く感謝して、私は神社の屋根を見上げているのではないかと思います。

見守る義務

下仁田町立下仁田中学校３年　　岩井　ひなた

私は今まで「税」というものに対して関心を持つ事ができませんでした。それは自分の生活と結びついている実感がなく、それらがどう遣われているものなのか知ろうとしていなかったからです。

私の住む町では中学生が海外へ行き、異文化に触れる事や、英語力の向上を目的として行われている中学生海外派遣事業というものがあります。私はこの事業に参加しオーストラリアに行きました。ホームステイ先には六歳の男の子がいました。ある日、みんなでスーパーに行く機会があり、入店するなりその男の子が突然売り場にあった果物を手に取って食べ始めたのです。ホストマザーが「Free Fruit for Kids」と書かれた看板を指差しながら、これが書かれている籠の中は自由に食べていいのだと教えてくれました。私の中にひとつの疑問が浮かびました。「お金は誰が払うの？」と。この疑問が私の「税」への興味の始まりでした。

この看板の正体は、オーストラリア政府が推奨する「２＆５（一日に二つの果物と五つの野菜を食べよう)」という取り組みであることが分かりました。お菓子やジャンクフードの代わりに果物と野菜を食べて、健康的な食生活を推進し国全体を健康にしていく事を目的としており、そこには税金が遣われている事を知ったのです。その他にも十六歳未満は週末や祝日の公共交通機関の利用が無料になるといった州があり、それらの全てに税金が遣われていたのです。日本に帰国して私は、自分が住んでいる町ではどのような事に税金が遣われているのか調べてみることにしました。すると、保育料や給食費が無料であったり、十八歳までの医療費も無料であることが分かりました。そして、今回の海外派遣事業も、その多くが公費で賄われていて、個人の負担は通常海外へ行くよりもずっと少ないものだったのです。

私は今まで「税」と自分の生活が無縁だと思っていたことが、とても恥ずかしくなりました。私が知ろう、理解しようとしていなかっただけで、私たちはたくさんの税の恩恵を受けて生活しているという事や、税と私たちの生活は実は密接に関係していて、必要不可欠なものだという事を知りました。納税は国民の義務の一つです。その義務を果たすのはもちろん、その遣い方についても積極的に知る責任があると私は思います。遣い方を知り、それにより私たち国民の生活が豊かになるように見守る事や、私たちの明るい未来のために正しく税金が遣われているか、自分自身の目で見届ける義務があると思うのです。

来年、私は高校生になります。将来の納税者として、全ての人の幸せな未来のために「税」に対して理解を深め、日々感謝しながら行動できる大人になりたいです。

勇気の支え

越谷市立富士中学校３年　　上神田　那奈

「お父さんの給料は、みんなが払っている税金から出ているんだよ。」

去年、私は母のこの言葉をもとに作文を書いた。自衛官である父を通して、税金が誰かの仕事や生活を支えていることに気づいたからだ。身近な人の姿を介し、初めて税金が、「人と人をつなぐもの」に見えた。けれど今年、私はもっと大きな「支え」に気がついた。

二〇一六年、最大震度七の揺れを観測する熊本地震が発生した。暗い部屋の中、私は母と共に、召集がかかり出かけてゆく父の背中を見送った。幼いながらにも、父が危険な場所に行くことは理解していた。それは、自然が猛威をふるい、今まさに何人もの民間人が被害に合っている場所。怖くないわけがない。危険があると分かっていて、それでも行く。私は疑問に思った。父のその覚悟を支えているものはなんだろうと。

後日、父が帰宅した時、私は何気なく「怖くなかったのか。」と聞いた。父は少し考えてからこう言った。

「怖くないわけじゃないけれど、仲間もいるし、大丈夫だよ。」

父の言う「仲間」とは同じ自衛官として働く人のことだけではない。任務に必要な装備、安全な車両、情報を伝える通信設備、訓練を受ける施設、食事や医療の体制。そのすべてがあってこそ、父は自衛官として、誰かの命を守ることができる。そしてそれらを支えているのが、税金なのだ。

二〇二四年度の防衛費は、過去最高の七兆円越えであり、国家予算の約七パーセントにおよぶ金額である。このお金が、給料となり、武器となり、装備となり、国を、誰かを守るために働く自衛官を支えているのだ。

税金は、ただのお金じゃない。人の安全を、行動を、命を支え、そしてその命を守る人の「覚悟」を支える。誰かが命をかけて働くとき、それを支える見えない力だ。「見えないけれど確かにそこにある支え」それが税金なのだと、自分の家族を通して知った。

将来、私が税金を納める立場になったとき、ただ義務としてではなく、「このお金が、誰かの勇気の支えになる」と思いたい。そして私は、自分の税金で誰かが守られる社会を、誇りに思える人間でありたい。

税金と水道工事

学校法人武南学園武南中学校１年　　吉田　怜奈

今年の夏もとにかく暑いです。中学校からの帰り道、この酷暑の中、道路工事が行われていました。看板を見ると「水道管を新しくしています」と書いてあります。水道管、という言葉を読んで私はある事故のことを思い出しました。今年一月に起きた八潮市の道路陥没事故です。

大きく穴があいた道路をニュースで見て、「道路って壊れるんだ」ととても驚きました。そしてたまたまそこを通っていた車の運転手さんが行方不明になってしまって、自分にも起こるかもしれない、と考えたら本当に怖いと思いました。そしてこの陥没事故の原因が下水道管が古くなってしまったことだというのを思い出したので、水道について調べてみることにしました。

今私たちが使っている水道管は一九五五年頃から七三年頃までの高度経済成長期に作られたものが多く、古くなってしまっていたり、地震に耐えられなかったりするので少しずつ取り替える必要があることがわかりました。水道に関わることは市民が払っている水道料金を使うので税金は使われていませんが、国土交通省の令和七年度の予算を見てみると、「水道施設設備費・下水道事業費等」として一三八三億円が計上されており、税金が補助金として使われることがわかりました。私が住んでいる川口市内の水道管の長さは約千四百キロメートルでした。母に実際どのくらいの距離か聞いてみると東京から鹿児島までの高速道路と同じくらいの長さだということで、想像よりも長くてとても驚きました。川口市だけでこんなに長い水道管があるのに、日本全国では一体どれくらいの長さになるのでしょうか。そしてそれを四十年ごとに工事して新しくするとは、気の遠くなる話だと思いました。

次の日に同じ道路を通ると、工事した部分が少し盛り上がっていました。しかし夏休みが終わってまたその道を通ってみると、ピカピカの真新しい道路に生まれ変わっていて、自転車で通るのが気持ちよかったです。この暑さの中、一生懸命工事をしてくださった方のおかげで私たちが安心して水道を使うことができるので、感謝しなければならないな、と思いました。そして水道管を新しくして、こんなに滑らかな道路を作ってしまう日本の技術はすごいな、とも思いました。

蛇口をひねればいつでもきれいな水が出てくる。トイレでもたくさんの水が流れてきれいにしてくれる。それが当たり前だと思っていましたが、決してそうではありません。みんなの水道はみんなの税金で作られています。そしてこれからもずっと当たり前にきれいな水が使えるように、きちんとメンテナンスして維持していかなければなりません。大切な税金がきちんと使われていることを実感した工事でした。

ふるさと納税について

小川町立小川中学校３年　　関谷　実月

ある日、私の家の朝ごはんに、突如「鮭ルイベ漬け」なる一品が現れました。どこで入手したのかを母に聞いてみると、北海道のＩ市への「ふるさと納税」の返礼品として届いたものだそうでした。

ふるさと納税とは、自分のふるさとや応援したい自治体に寄附をすることで、住んでいる自治体の住民税の控除や所得税の還付を受けることができる、というものです。自治体にとっては税収入源及び認知・関与の拡大に繋げられ、納税者にとっても税金の控除や返礼品（我が家でいう鮭ルイベ漬け）を受けられる、双方にメリットがある制度なのです。

が、そんな良いことづくしの制度ゆえに、問題点もたくさんあるようです。一つ目は、返礼品めあてで納税する自治体を選んでいる人が多いということです。確かに、返礼品はその自治体の特産品となっているものが多く、それが応援したい、と思える重要な要素にもなると思います。でも、選ぶ理由がそれだけになってしまうと、「ふるさと納税」の本来の目的からは逸れてしまっていると思います。逆に自治体側も、過度な返礼品競争の過熱から、その自治体に全く関係のないＥＣサイトの商品券や換金性の高い電化製品などを送る自治体が相次いでいたそうです。現在では法改正が行われ、その自治体の地場産品が届くようになっていますが、特産品の少ない自治体にはやはり寄附が集まりにくく、依然として自治体の財政の課題は残っています。

そして何よりも問題になってしまっているのが、「市町村民税の流出」です。「ふるさと納税」とは、他自治体への寄附で、住んでいる自治体の住民税が控除されます。つまり、住んでいる自治体に入るはずだった住民税が入らない、ということです。実際に、愛知県のＴ市では、本来納められるはずだった市民税のうち、なんと約十六億円が市外へと流出していたそうです。十六億とは相当な数字で、税金の主な使い道の一つである土木費などのうち、防犯カメラ・カーブミラーの設置は三千七百ヶ所分、ガードレールの設置は四十五キロメートル分にあたるそうです。他自治体の財政難の助けになる代わりに、自分の住んでいる自治体が逆に財政難に陥ってしまうなんて、なんとも皮肉なものだなぁと思いました。

私は、ふるさと納税には賛成です。素敵な返礼品がもらえて、しかも寄附したお金がその自治体のためになるなら、ウィンウィンだと思うからです。でも、やっぱり自分の住んでいる自治体にも忘れずに貢献するのが大事だと思います。「ふるさと納税」がどんな目的で、どんな願いを持って創設されたのかを忘れないように、節度を持ってこれからもこの「ふるさと納税」を利用していってほしいです。

鮭ルイベ漬けはとても美味しかったです。

ひとりひとりの理想の社会のために

長野市立川中島中学校１年　　平澤　綾

「あやちゃん……あやちゃん……」
声を絞り出すように、祖母が私の名前を呼んだ。今年五月の連休に、私は祖母に会うために東京の病院に行った。幼い頃から私を優しく見守ってくれていた祖母は、病院のベッドに寝ながら私を見つめた。私が生まれる前に祖父が難病で急逝し、祖母は徐々に体調を崩していったと母から聞いた。病を患いながらも、祖母は私に料理や裁縫を教えてくれた。けれど病状は悪化し、手術や入退院を繰り返して、最も高い介護度になった。

退院後の祖母を自宅で介護するためには何が必要か、伯父と母が相談している会話を聞いているうちに、介護に税金が関係していることを知った。家族だけで介護を続けることには限界がある。伯父と母が交代で祖母を介護するとしても、介護サービスを利用しなければ難しいことがたくさんある。介護保険について調べてみると、介護を必要とする人とその家族を社会全体で支えるしくみであり、介護サービスの費用は、自己負担の他に、税金が使われているということが分かった。

近年、高齢化が急速に進んでいるというニュースをよく耳にする。私が大人になった頃には、高齢者がもっと増えているだろう。社会保障の必要性が今まで以上に高まったら、その活動を支えるために必要なお金も増えると思う。税金は、私達の健康や生活を守るために多く使われている。私は、自分が税金を納める立場になったら、どんな目的のために、どのくらいの税金が使われているのか、自分が納めた税金が何に使われているのかを明確に知りたいと考えている。可能なことならば、自分が税金を納める分野を選べるようになったら良いと思う。どの分野が困っているのか、助けを必要としているのかを、自分でしっかり考えて納税できるとしたら、一人一人が世の中に目を向けて、どのようにお金を使ったら良いか、我が事として考えるようになるのではないか。もし今の私が納税する立場で、納める分野を選べるとしたら、介護、福祉が最初に思い浮かぶだろう。

使い道を選択して税金を納めるというしくみの実現は難しいかもしれないが、一人一人が税について真剣に考えることが大切だと思う。自分が助けたい、より良くしたいという強い思いがあるところには、お金を使うことを惜しまないと思う。税金が何の目的のためにどのように使われているのか、税金の使い道が明確に示されること、その内容を理解しようとすることの両方が、税金のしくみを支えていくために欠かせないことだと考える。

祖母は、きっと言葉では表せない気持ちを抱えながら頑張っている。今まで祖母からもらった優しさに、今度は私が応えたいと思う。自分の家族だけでなく、助けを必要としている人達を支えられるように、社会の一員として目的意識を持って税金と向き合っていきたい。一人一人の理想の社会の実現のために。

より良い日本へ

成田市立公津の杜中学校３年　　崎尾　心結

皆さんは、「復興特別所得税」という言葉を聞いたことはありますか？私は災害について調べたときにこの言葉を知りました。「復興特別所得税は何のためにあるのだろう」と疑問に思い、調べてみることにしました。

復興特別所得税とは、復興のために必要な財源の確保を目的として徴収されている税金のことです。平成二十三年に公布された「東日本大震災からの復興のための施策を実施するために必要な財源の確保に関する特別措置法」に基づいて、平成二十五年から令和十九年まで、所得税を払っている人が追加で税金を納める仕組みだそうです。復興特別所得税は被災者支援や産業の再生、住宅再建などに使われているそうです。

東日本大震災の当時の様子について、父に話を聞いてみました。父は当時、成田空港で仕事をしていました。揺れはとても大きく、オフィスから荷物が沢山落ちてきたと話していました。空港では大勢の人が列を作り、駐車場へ避難していたそうです。空港が封鎖されて誰も空港から出られない時間もあったそうです。震災後も定期的に震度四程度の地震が発生し、空港の天井が壊れてしまったそうです。

当時の様子について、岩手県に住む伯父にも話を聞いてみました。町中が大きく揺れ、いつもの景色、いつもの日常が一瞬にして奪われてしまったと話していました。ライフラインは完全に寸断され、何日かお風呂にも入れず、夜はろうそくを灯して生活をしていたそうです。

私はその話を聞いて驚きました。地震が原因で日常生活に欠かせないライフラインが突然使えなくなるなんて今まで想像したこともありませんでした。今までは普通に生活できることが当たり前だと思っていましたが、それが決して当たり前ではないということに気付きました。

今現在、被災地は少しずつ復旧、復興が進んでいます。しかし、十四年経った今でも復旧、復興の進んでいない地域が残っているのが現状です。私はまだ税金を納められる年齢ではないので、被災地の特産品を買ってその地域を応援したり、ボランティアに参加して社会に貢献したりしたいと思います。

私は、復興特別所得税について調べて、災害の復旧、復興にも税金が大きく関わっているということがわかりました。多くの人が税金を納めているおかげで復旧、復興が進められていることを知り、感謝の気持ちを持ちました。今は自分ができることを前向きに取り組み、大人になったら税金を納めて、復旧、復興のお手伝いをすることができたらいいなと思います。そして多くの人が税金を通して助け合いのできる社会になっていくことを心から願っています。私自身も助け合いをすることの大切さを忘れずに生きていきたいと思います。

祖母の「生きる」を支える税金

千葉市立加曽利中学校３年　　宮前　奈央

この夏の参議院選挙では、各党がさまざまな減税策を掲げ、物価高が続く中で「誰がどれだけ税を負担するか」が大きな争点の一つとなっていた。確かに、主食の米も野菜も驚くほど値上がりし、「それほど贅沢な暮らしをしているわけではないのに、常に余裕がない……」という生活を送っている家庭が多いと、ニュースなどで耳にすることがたびたびある。税金を払う額が少しでも減ったら、どの家庭も助かるし喜ぶに決まっている。家計が苦しく、生活に余裕がないとき、「税金＝悪者」という感情が生まれるのは自然なことだと思うが、本当に税金は悪者で、排除してもよいものなのだろうかと考えていたとき、ふと、祖母の家を思い出した。

祖母の家には、玄関からリビング、寝室、お風呂、トイレ、祖母が使う全ての部屋に手すりが付き、玄関やお風呂には介護用の椅子が置かれている。これらは、祖母が病気になってから設置したものだ。祖母は、脳出血で入院をしていた四か月の間、少しでも早く家に帰ることを夢見ながら、毎日厳しいリハビリをこなしていた。しかし、心の中では、「帰っても、以前のままの家では今まで通りの生活をすることは難しい。そうなると、もう家には戻れないかもしれない……」と常に不安に思っていたそうだ。だから、数か月ぶりに帰ってきた家の、自分の生活動線につけられたいくつもの手すりを見たときには、「私は戻ってきてよかったんだ」と涙を流していた。このときの心からほっとしたような祖母の顔は、私は今でも忘れられない。そして、これらのおかげで、退院後すぐから今まで、祖母は自分の家で自分の力で動くことができている。このとき、祖母の「生きる」を支えたものは、介護保険や自治体の助成金という形の私たちが納めた税金である。

税金が大切なことが分かっていても、それが何に使われているかが見えないと、ただ取られているだけで損をしたような気分になるかもしれない。しかし、私は、税金は、高齢者や病気の人を支える医療、福祉の分野でも大きな役割を果たしていることを、祖母のことで実感することができた。高齢化が進む中、自分の家族や地域の高齢者が安全に安心して暮らせるのは、私たちが納めた税金による支えがあるからだ。

三年後、私は成人して選挙権を得る。多くの問題を抱えた社会において、投票を通じて、税の使い道を決める大切な一票を投じられるようになるのだ。祖母は今も税金に支えられながら、生き生きと一日一日を大切に生きている。私もきちんと前を向き、今から介護や福祉、教育、その他さまざまな分野における税の役割を学び、数年後、「税金＝悪者」という単純な見方ではなく、「どのように使えば社会がよくなるか」、「誰が誰をどのように支えるか」、「将来に向けて何を残すのか」をしっかり考えられる大人になっていたい。

私達の未来を支える応援団

杉並区立松ノ木中学校３年　　園川　和奏

私は中学一年生のとき、「杉並区中学生小笠原自然体験交流事業」に参加しました。この事業は、杉並区の次世代育成基金を活用して実施されており、世界自然遺産である小笠原で貴重な自然体験と文化体験を通して成長する機会をくれるものです。

小笠原に到着した瞬間、私は目を奪われました。一面に広がる青く透き通った海、そこにしかない都会では味わえない自然の雄大さと、豊かな命の営みを目にしてただただ感動しました。その後の体験は忘れられません。シュノーケリングで出会った色とりどりの魚たち、ガイドさんの話す固有種や外来種の違いについて意見を伝え合った時間、現地の人々との交流を通して肌で感じた文化の深さや島の誇り。ほんの数日でも、自然と人とのつながりの意味を深く学ぶことができました。

このような体験ができたのは、すべて税金によって支えられる、次世代育成基金があったからこそです。私や、私と同じようにこの事業に参加した仲間達が無償で参加できたこと、交通費や宿泊費を気にせず思い切り現地で学べたこと、何よりこんなに貴重な経験をさせてもらえたのは、皆さんのおかげです。皆さんがしている納税で支えられました。もちろん、この経験だけでなく、普段の生活でも私達を支えてくれています。私達学生も税金で支えられているものが多くあります。でも、実際にその使い道が身近に見えづらいことがあると思います。私の場合は、小笠原の事業で税というものを身近に感じました。税のおかげだからこそ、私は税金は応援団という存在で、「税金が私達を支えてくれている」という実感が湧きました。

私はこの体験を通して、税金という一見みえづらい存在が、私達一人ひとりを支えてくれる大切な存在であることを実感し、税金がただの制度や仕組みではなく、私達の未来を支え、豊かな成長を応援してくれているのだと改めて気づかされました。

小笠原に行けると分かったとき、とても嬉しかったのと同時に感謝の気持ちがありました。小笠原という場所に行き、自然と向き合い、人と繋がる貴重な経験ができたからこそ、私はこれからも感謝を忘れず、未来に役立つ行動を続けていきたいと思いました。

私は今回の体験を通して、税金は単なるお金ではなく、私達の未来や社会全体の支えになっていることを学びました。普段何気なく利用しているものの多くが税によって成り立っています。これからの社会を担う一人として、税の仕組みや使い道に関心を持つことが大切だと感じました。そして、私のような経験をたくさんの人にしてもらいたいと考えたので、誰かの未来を支えられるような社会づくりに貢献していきたいと思います。

税を納める意味

台東区立上野中学校２年　　成田　瑞葵

税金は、私たちにたくさんの経験をさせてくれる。税金とは何かをインターネットで調べてみると、「国や地方公共団体が、その必要な経費をまかなうために国民から徴収する金銭」と出てきた。では、「必要な経費」とあるが、私たちは何をもって「必要」なのか「不要」なのかを判断しているのだろうか。そしてそれは、私たちに何を与えてくれるのだろうか。

私は今夏、区の海外派遣事業で、オーストラリアへ短期留学をした。この事業には、書類や面接を通じて選抜された各中学校からのメンバーが参加し、事前学習を重ねて出発をした。そして現地では、ほとんど英語でコミュニケーションを取った。緊張してうまく話せないこともあったが、一週間という短い期間で大切な友達をつくることができた。そして最終日には、班ごとに計画を立て、シドニー市を観光することもできた。これが税金によって賄われていると考えると、感謝の気持ちしか生まれてこなかった。

しかし、ここで使用された税金は、同じ区に住んでいる人々が納めたものである。では、その税金は、この事業に関わっていない人たちにとって、必要だったのだろうかと考えてしまう。感謝の気持ちもあるのだが、それと同じくらい、申し訳ないという気持ちにもなってしまった。

だが、こういった考えにたどり着いてしまったとき、重要なのは「支え合い」という精神であると気が付いた。この世の中には、幼児、小学生、中学生、高校生、大学生、社会人、高齢者など様々な人々が暮らしている。そして、それぞれの年代ごとに、求めるものは違ってくる。そのため、自分に必要なものには協力してもらう、自分に必要のないものにも協力するという関係が、社会を動かすことに繋がるのだ。また、自分に直接は関係のないものが、全く自分のためにならないという訳でもないだろう。こういった事の例を二つ挙げてみる。一つ目は、地域での図書館や公園の整備である。普段そういった場所に出向かないという人にとっては、あまり関係のないことかもしれない。だが、そういった施設が地域にあることにより、土地の価値が上がったり、治安が良く保たれたりする可能性がある。二つ目の例として、生活保護制度や、失業保険などが挙げられる。「自分は利用したことがない」という人も多いかもしれないが、この制度を続けることによって、ホームレスや犯罪の増加を抑えることができ、結果的に社会が安定することに繋がる。

このように、税金があることによって、私たちの間には見えない糸が紡がれる。その糸を通して、他人を助け、他人に助けられている。もしもこの社会に税金というものが存在しなかったら、繋がりがあるおかげで味わえる体験、経験も無くなる。だから今日も、自分のために、社会のために税を納めるのだ。

多様性と恩返し

大田区立雪谷中学校３年　　髙田　幸恵

みなさんは「療育」という言葉を聞いたことがあるだろうか。発達に特性がある子たち、一人ひとりの育ち方に合ったサポートをしてくれる場所。それが療育施設だ。例えば、友達と遊ぶときのルールを学んだり、集中して物事に取り組む練習をしたり。私の妹は、週に何回かその療育施設に通っている。

一度、母と一緒に療育施設での妹の様子を見に行ったことがある。先生や友達と楽しそうに活動している妹の姿を見て、この場所があって良かったと思った。後日、母が「療育には税金が使われているんだよ。」と教えてくれた。妹は三年ほど前から療育に通っているが、税金が使われていると知ったのはこのとき初めてだった。

調べてみると、妹が通っている療育施設は「児童発達支援」や「放課後デイサービス」と呼ばれている福祉施設だった。今年から小学生になった妹の利用料は、九割が税金で賄われていて、保護者が負担するのは一割で済むそうだ。幼稚園の頃は無償化制度により、利用料は全額税金で賄われていた。

妹の療育施設が、こんなにも税金に支えられているなんて。驚いたとともに、税金について今一度考えるようになった。学校の教科書や給食、風邪をひいたときに行く病院、小さい頃よく行った図書館や公園。考えてみると、税金に支えられているのは妹だけでなく私も同じだ。税金は誰かの未来を支えている。だから、妹も笑顔で過ごすことができているのだ。また、妹のようにサポートが必要な人一人ひとりに合わせた支援ができるように、税金は見えないところでも働いている。どんな人でも安心して生活できる社会をつくっているのが税金だ。税金を納めることで、私たちのより良い暮らしが支えられるのはもちろん、巡り巡って「多様性を認めること」にも繋がっている。一人ひとりの個性が尊重される今の時代だからこそ、その思いが税金の使い道にも込められているのではないだろうか。

最近は、「税が高すぎる」「減税するべきだ」という声をよく耳にする。しかし、本当にそれで終わらせていいのだろうか。誰だって、何度も税金に助けられているはずだ。私は、今まで生きてきた十五年間でたくさんの税金に支えられてきた。これからも、税金に支えられることが多々あるだろう。税金に支えられてきた分、妹たちの笑顔をつくってくれた分、大人になったら「税金は誰かを支えている」という意識で、社会に恩返しをしていきたい。そして、誰もが安心して暮らせる税金の使い道を考え、今度は私が支える人になりたい。

夢を見る目に、見えない支え

横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校附属中学校３年　　田淵　心優

税金とは、私たちの暮らしを見えないところで支える力。大人に近づく中学最後の夏、その力が海の向こうの誰かの命や笑顔、夢までも支えていることを知った。

私は以前、ドキュメンタリー番組「世界の子どもの未来のために」をよく見ていた。そこには、厳しい環境で日々懸命に生きる子どもたちの姿があった。市場で深夜まで働く子、掛け持ち仕事で家族を養う子、危険な線路沿いでゴミ拾いをする子。学校に通えない子どもはたくさんいた。

番組では、取材した子どもに将来の夢を尋ねる場面がある。「学校の先生になりたい」「お医者さんになりたい」「警察官になりたい」――。苦しい生活の中でもそう語る彼らの表情は希望に満ち溢れていて、今でも私の胸に強く残っている。

一方で、何度も辛い現実に直面し、その夢を諦めてしまう子どもも中にはいた。

同じ「子ども」である私と彼らの生活は、あまりにも違った。私は毎日安全な道を通って学校に行き、教科書や文房具も揃っていて、ご飯もある。病気になれば病院に行ける。これらはすべて当たり前のことのように感じていた。しかし彼らを見て、その当たり前はとても恵まれたことで、それらは税金によって支えられているのだと気がついた。

ある日、彼らのような子どもを取り巻く環境を変える方法はないのか調べてみたところ、ＪＩＣＡ(国際協力機構)がＯＤＡ（政府開発援助）を通じてボリビアで井戸の掘削をしたときの記事を見つけた。簡単に安全な水を汲めるようになり、病気にもかかりにくくなったそうだ。井戸ができた後はポンプで水を出せるようになり、そのときの現地の子どもたちの弾ける笑顔の写真が印象的だった。

ＯＤＡとは開発途上地域の暮らしをよくするために行う政府の国際協力のことで、財源の一部は税金で賄われている。他にもＯＤＡを通じて学校や教室の建設、教科書や学用品の提供、予防接種や病気の治療支援などをしている。税金が、国の中だけでなく世界の子どもたちの生活向上に役立っているのだ。

もしもこのような支援が広がり番組で紹介されていたような子どもたちにもしっかり届けば、誰もが安心して学校に通い、自分の夢に向かって歩き始めることができるはずだ。

将来私が働いて税金を納めるとき、そのお金は誰かの暮らしや命を守り、笑顔を支え、夢へとつながる道をつくるかもしれない。そう考えると税金を納めることは単なる義務ではなく、世界の誰かへの応援だと思えてくる。

ＪＩＣＡの記事やドキュメンタリー番組で見た子どもたちの笑顔を思い出すたび、私はこう思う。「夢は誰にでもある。そして、その夢を叶えるための土台をつくるのが、税金なのだ」と。

税金による株式会社「私」

横浜市立南が丘中学校３年　　吉田　咲々音

私たち中学三年生は半年後、受験をして高校へ入学する。もう今までの義務教育とは異なり、自分の意志で高校へ通うのだ。それぞれが自分自身のやりたいこと、将来に向けて本気で進路を考える。しかし、どの高校へ行きたいか考えていたとき、やはり私の頭には公立高校と私立高校の最大の違いともいえる学費のことがちらついていた。

そんな中、私の耳に高校実質無償化のニュースが入ってきた。最初は本当に有難い、感謝の気持ちでいっぱいだった。これのおかげで進路がひらけた人も多いのではないか。しかし、冷静になって考えると、この費用を誰が出しているのかが不思議に思えてきた。私と同年代の子供だけでも一〇〇万人以上いる。全員に適応されるとなると莫大な費用が必要となるはずである。

この費用は国の歳入によりまかなわれる。その歳入のうち約六八％は税金から得られるものである。税金、と言われて私が思いつくものは身近にある消費税だ。しかし私たち中学生はそもそも自分で稼いだお金で買い物をすることはほとんどない上、買い物の量も大人と比べると微量である。また、所得税や法人税を合わせると消費税の二倍ほどの額となる。そうなると高校無償化の費用はほぼ全て大人が負担してくださるということになる。

そこで私はこの負担していただいている費用を「私たちの将来に対する大人からの投資」と捉えてみた。投資してもらえた株式会社は何らかの形で株主に還元しなければならない。私たちは何で還元できるのか。還元するには何をする必要があるのか。大人に投資していただいている以上、これらを考える責任があると思う。

教育を私たちに施すことで期待できること、それは日本社会の発展だろうか。それとも、少子高齢化社会、働き手不足といわれる現代または未来で日本社会を支えることだろうか。今の私にはまだ明確にはわからない。だが、今後高校へ進学する、そしていつか社会へ出るときまでに答えを出しておきたいと思う。

私はこの少しでも期待してもらえている状況がうれしくてたまらない。この無償化という投資は私にとって、私たちへの期待度を示す大切な指標なのである。やはり期待されるとやる気が起こるわけなのだ。

この期待と与えていただいた機会を無駄にせず、感謝と喜びを社会、税金を通じて表現したい。そのために今は全力でやるべきことを行い、努力を継続していこうと思う。

『この度は、私たちに対する貴重なご支援に心より感謝申し上げます。今後皆様の期待に応えるために、更なる成長を目指してまいります。今後とも、何卒よろしくお願い申し上げます。株式会社「私」』

税が問う未来

都留市立都留第二中学校３年　　舟久保　有位

私にとって「税金」という言葉は、これまでどこか遠い存在でした。しかし、ニュースで報じられる政治家の不祥事や無駄遣いの話を聞くたび、心の中に募る漠然とした怒りを感じずにはいられません。私たちが汗水流して納めたお金が、本当に国民や将来の日本のために、使われ、役立っているのか。そんな疑問が、税について深く考えるきっかけとなりました。

特に、少子高齢化や環境問題、地域間の格差など、深刻な社会課題を目の当たりにすると、政治の機能不全を感じます。税金は、これらの課題を解決し、よりよい社会への大切な資金であるはずです。しかし、政治家がその責任を十分果たしていないことに不信感を覚えます。そしてこの問題の根底には、私たち国民の無関心があるのではないでしょうか。「どうせ政治は変わらない」という諦めの気持ちが政治家を甘えさせ、現状を維持させているのかもしれません。私達納税者は、税金を払うだけではなく、その使い道に関心を持ち、意見を表明する“権利と責任”を持っています。

私は、これからの社会は、私たち一人ひとりが「社会を変えていく意思」を持たなければ、決して良くならないと思います。政治家任せにするのではなく、私たちが主体的に社会に関わっていくこと。それは選挙に行って自分の意志を示すことかもしれません。あるいは、ニュースを見て、社会の動きに関心を持つこと、身近な問題について友人や家族と話し合うことかもしれません。私たちが納める税金は、道路や学校、病院といった公共サービスを支え、私たちの生活の基盤となっています。しかし、それ以上に税金は、私たちが理想とする社会を実現するための「希望の投資」であるべきです。

将来、私も社会の一員として税金を納めることになります。その時、私は単に義務を果たすだけではなく、自分の納めた税金がどのように使われているかを常に意識し、その透明性を強く求めていきたいです。もし不適切だと感じることがあれば、恐れることなく声を上げ、改善を求める姿勢を持ち続けたいと思います。なぜなら、税金は単なる支払いではなく、より良い社会を築くための「投資」であると思ったからです。私達が描く理想の社会は、誰かに与えられるものではなく、私たち自身の行動によって創造されるものです。税金という形で社会を支えるだけではなく、その使い道に目を光らせ、未来に向けてどのような社会を望むかを明確に発信していくこと。それが今の私達に課せられた最大の責任ではないでしょうか。私たちが紡ぐ未来は、決して政治家任せにするものではありません。私たち一人ひとりの主体的な関心と、社会を変えようとする揺るぎない意思、そして具体的な行動が積み重なることで、初めて理想の社会への続く道が拓かれると信じています。

税が支える日々に感謝して

小松市立芦城中学校３年

私の家は母子家庭で、母と妹と私の３人で暮らしています。そのため、母の収入だけでは生活が苦しく、小松市のひとり親家庭への支援の制度を利用しています。私の住む小松市には、母子家庭や父子家庭などいわゆる「ひとり親家庭」への様々な支援が行われ、私のような家庭を支える制度があります。

私の家では、児童扶養手当として２人合わせて５万円程度の給付、学校での必要経費の一部免除など、主に経済的な支援を利用しています。これらの援助のおかげで、私は母子家庭でありながら、みんなと同じように学校に通えていて、さらに塾まで通えています。つまり、私の学習環境やみんなと同じ教育を受ける権利、生活は税金によって保障されているのです。

私は税に対し「絶対に払わなければいけないお金」というイメージ、つまり否定的なイメージを持っていました。しかし、この作文をきっかけに、私にとって税がどれほど重要な役割を果たしているのかを知ることができました。たとえ私たちが気づいていなくても、納めた税は道路建設や上下水道の整備、医療や国の防衛費などに確かに役立てられているのです。蛇口をひねればきれいな水が出て、何かあったら救急車や消防車が呼べて、災害が起こったら自衛隊がすぐに駆けつける。税は、私たちの生活の「当たり前」を支え、安全・安心を保障しています。「当たり前」だからこそ、私は税の重要性に気づかず、否定的なイメージを持ってしまっていました。しかし、税が私の生活を支えていることを知り、その大切さを改めて実感しました。

私たちが納めた税は、日本のインフラを整備し、社会保障費に使われ、国民の安全・安心な生活を守るのに役立てられています。ほかにも、他国の支援や科学技術の研究、森林の保護にも使われています。つまり、私たちは、私たち自身の「当たり前」の日常を「税」というシステムを利用して守り、税を納めることでＳＤＧｓの達成や日本の発展に貢献しているということです。税は、私たちの日常や、日本の発展を陰で支えています。私が生きている今が当たり前ではないということを忘れずに、これからもちゃんと税を納め、もっと税についての知識を深めていきたいです。納税者の一人として、税に救われた者として。

あたり前があたり前ではなかった時代

越前市武生第三中学校３年　　髙田　倫央

数か月前、私は祖父母の家で「地券」を見せてもらった。地券には私の先祖の名前や地価、土地の面積、税率などが記載されていた。「地租改正」とは、明治時代に行われた政策で、政府が土地の所有者に地価の三パーセントにあたる地租を現金で納めさせていた、ということを教えてもらった。

そこで、過去の税の仕組みについて興味をもった。江戸時代を例に見ていくと、税制は二公一民で、今までに比べて非常に高いものだった。平常時の収穫量を一とすると平常時の百姓の米の入手量は三分の一となる。さらに、この頃たびたび発生していた飢餓では平常時の収穫量の約三割程度まで減っていたので、収穫量は平常時の十分の三となった。飢餓が起きても同じ税率が課されるので飢餓時の百姓の米の入手量は平常時の収穫量の三十分の三、つまり十分の一となる。

ここで一つ疑問が出てくる。前述のとおりこの時代には非常に重い税負担が課されていたのだから、当然社会保障のような制度が整っていたはずである。しかしながら、税を負担する百姓には現代のような社会保障などなく、生活がどんなに苦しくても何の支援もない。現在では考えられないことだ。

また、この時代に「百姓と胡麻の油は絞れば絞るほど出るものとなり」という言葉があったように、幕府や藩は、百姓に生活のゆとりを残せないほど、厳しく年貢を取り立てていた。そのため、多くの百姓が重税と飢餓に苦しみ、餓死者も多く出て、全国各地で百姓一揆が勃発していた。このことから当時の生活の苦しさが想像できるだろう。

では、現代の税制を見ていこう。日本には所得税や法人税、消費税など約五十種類の税がある。現代の税負担は前述の江戸時代や明治時代に比べて断然低いというのが現状だ。そして、過去と大きく異なるのは、これらの税金のおかげで社会保障が充実しており、病気にかかったり失業したりするなどしても、国民全員が平等に安心して生活することができることだ。これは、私たちの先祖が重税に耐え、現在の税制の礎を築いてきてくれたおかげである。

このように、飛鳥時代から始まった税制は形を変えながら現在まで課されてきた。そして時代を追うごとに、より私たち国民に寄り添うものとなってきた。現在、少子高齢化に伴い、社会保障の費用に対する現役世代一人あたりの経済的負担が一層重くなることが予想されている。将来、私たちが安心して生活を送れるようにするには一人一人が社会の一員としての自覚を持つとともに、税を納めることの意義を理解し、現代の社会保障制度は私たちの先祖の苦労の上に成り立っているものであり、あたり前ではないということを意識することが大事だと思う。

関税を通して考えた「税」の役割

豊川市立中部中学校３年　　田中　伶奈

私はこれまでに、父の仕事の都合でベルギーや南アフリカ共和国に住んだことがある。海外で暮らす中で、日本では当たり前に手に入るものが手に入らず、初めて「関税」という税の存在を実感する機会があった。

ベルギーに住んでいたとき、日本の食材がとても恋しくなった。アジア食品店では、味噌や醤油、お米などを買うことができたが日本で買うよりも品ぞろえは限られていて値段もずっと高かった。それに、インターネットを使って日本から文房具や洋服などを取り寄せようとしたが、送料に加えて関税がかかるため、実際の値段よりもずっと高くなってしまった。「同じ商品なのに、なぜこんなに高くなるの？」と当時は不思議に思っていた。

また、南アフリカから帰国の際、家族で気に入ったワインを日本に送りたくて、たくさんのワインを船便で送ったことがあった。数ヶ月後、日本の家に荷物が届いたが、そのときにワイン一本一本に関税がかかり、まとめて大きな金額を支払うことになった。まさか「自分たちの家に送ったもの」に税金がかかるとは思っていなかったので驚いたが、関税というものが、どれだけ国と国の間でしっかりと管理されているのかということが分かった。それにアルコール飲料は特に厳しく関税がかけられており、関税には品目ごとに異なる基準があることを学んだ。

関税とは、外国からの輸入品に対してかけられる税金であり、国内産業を守るための手段でもある。例えば安い海外製品が大量に入ってきたら、日本の企業や農家が作る製品が売れなくなるおそれがある。そうならないように、関税をかけて「価値のバランス」をとることで、国内の産業を守っているのだ。一方で、関税が高すぎると、消費者である私たちが自由に世界中の品物を手に入れにくくなってしまう。特に、海外に住んでいると「どうしても欲しい日本の商品」がある。送料や関税が高いためにあきらめざるを得ないことも少なくなかった。国を守るための制度でありながら、私たち一人ひとりの生活にも直接影響する税金なのだということを実感をもって理解するようになった。

また、関税は国と国との交渉にも関係している。どの国とどのような貿易をするかによって、関税のルールは変わる。こうした制度の裏には、外交や経済政策が深く関わっているのだと思うと、関税は単なるお金の問題ではなく、国の在り方そのものを映しているようにも感じる。これから先、国際交流が広がる中で、関税のあり方も変わっていくかもしれない。輸出入のバランスや公平な貿易の実現には税に対する正しい理解と、それが私たちの暮らしにどのようにかかわっているのかを見つめる視点が欠かせない。関税は、国境を超えるものと思いをつなぐ懸け橋でもある。私はこうした税の役割を正しく理解しながら広い世界と関わっていける人でありたい。

「笑いに税がかかったらどうなるのか」

伊東市立対島中学校３年　　日吉　笑瑠

もし笑うたびに税金がかかる世界になったら、あなたはどうするだろうか。友達とふざけて笑ったら十円、テレビなどを見て爆笑したら百円。そんな世界になったら、私たちはきっと笑うことをためらうだろう。

けれども、想像してみてほしい。その「笑い税」で集められたお金が、病気で笑えない人たちのために使われるとしたらどうだろう。入院している子供達に本を届ける、独り身の高齢者に寄り添う場所をつくる。そう考えると、自分の笑いが誰かの支えになると思えて少し誇らしい気持ちにならないだろうか。

もちろん、実際に笑いに税がかけられることはない。だが、この空想を通して私は、税の本質に気づいた。それは「自分の喜びや利益の一部を、まだそれを得られていない誰かに分ける仕組み」だということだ。お金を払うこと自体が目的ではなく、そこから生まれる「つながり」こそが税の意味なのだと私は思う。

実際、今の税金も同じだ。私が払う消費税は、道路や学校、消防や救急に使われている。自分が直接そこに関わっていなくても、必ず誰かの安心や笑顔を生み出している。つまり税は「見えない笑顔のリレー」なのだ。

もし笑いに税がかかる世界を想像して、私たちが少しドキッとするのは、笑うことがとても大切だと思うからだ。人が生きていくために必要なのは食べ物やお金だけではないと考えた。安心できる社会で、心から笑えることこそが、人間らしい暮らしの証なのだと思う。

だからこそ、税を考えるときに「取られる」と思うのではなく、「笑顔をつなぐもの」として考えてみたい。私が将来、税を納めるとき、そのお金はどこかで誰かの笑顔につながっているはずだ。

税は数字ではなく、笑顔の数で考えたほうがわかりやすいのかもしれない。そう思うと、ちょっとだけ「納税って悪くないな」と感じる自分がいる。

実際、私は学校生活の中で友達と笑い合う時間に何度も救われてきた。緊張したテストの前も、部活で失敗して落ち込んだときも、友達の一言に笑って気持ちが軽くなった。笑いには、人の心を支える力がある。だからもし「笑い税」があれば、それは単なる冗談ではなく、本当に人を救う仕組みになり得るのだろう。

そう考えると、今の社会にある税も同じように、人々の心や生活を支える力を持っている。税金があるから学校に通える、困ったときには病院にいける。つまり税は「生活の安心を守る笑いの裏側」にあるものだ。

私はこれから大人になり、働き、税を納めることになる。きっとそのときは「お金が減る」という感情のほうが強いだろう。そのときに税は数字だけではなく、人の笑顔につながることを思い出し、ちゃんと納めたい。

納税の喜び

静岡大学教育学部附属島田中学校３年　　市川　紗季

「教育・勤労・納税」
この三つは日本国憲法に定められている日本国民の三大義務である。この三つの義務は制定以来改正されていないが、時代と共に私たちの受け止め方は変化しているように思う。今、政治家たちが口々をそろえて「減税」を掲げているように、この義務が負担であると感じる人が多くなっているのだと考えた。こんな今だからこそ私は「納税」の良さを探してみたいと思った。

私が一番初めにこの義務について知ったとき「勤労と納税は似ているな」と感じた。社会人になり手に職を持った時、得た給与の中から所得税・住民税などの納税の義務が発生することがわかった。

私の身近な社会人である母は、仕事が大好きである。そんな母は数年前、骨折により二ヶ月間入院していたことがある。このとき母は、仕事ができないという悲しみと共に仕事ができる喜びも感じたという。また、私が産まれた頃、保育園の入所先が見つからずこのまま仕事に復帰できるのだろうかと不安になったことがあるという。この事がきっかけで、以前より「勤労」に尊さを感じるようになったそうだ。この話を聞き、私は“働きたくても働けない人”はどのような思いなのか自分なりに考えてみた。

初めに、税金の使い道について調べてみた。税金の多くは、医療・介護・教育など私たちの身近なところで使用されていることがわかった。私たちが安心して暮らし、勉学に励んだりできるのは、税金があるおかげだ。そして、納税をすることは少しでも社会に貢献できる機会であると思った。税金は「誰かを幸せにするためのもの」なのかもしれないと感じた。誰かの一円で救われる命があるかもしれない、誰かの一円で生まれる笑顔もあるだろう。そんな素敵な税金は「私たち」と「社会」を繋ぐものでもあると思った。だから、病気や育児、介護などで働きたくても働けず納税が出来ない人は「私は社会を作る一員なのだろうか」と孤立感を感じているのではないかと思った。働く意欲を持った人が働ける環境を作るために税金を使い、再び納められた税金でもっと良い環境を創る。税金の循環の中で喜びの循環も生まれる。私の働きが誰かの助けになり、少しでも世界を良くしていると考えれば、負担に感じすぎず「納税」の魅力が見えてくるのではないか。

「税」に対してマイナスなイメージを抱きやすい今だからこそ、「自分が税を納める理由」について各々が考える必要があると思う。また、どのように税金を使えば、大切な人やもっと多くの人が幸せになれるのか考えていけたらいいと思う。みんなが納めた、みんなの笑顔のためのみんなの税金なのだから。

私も将来、税金を納める時が来た時、こんな風に言える社会であればいいなと願う「納税は私の喜びです」

人々が繋ぐ未来と可能性

大津市立南郷中学校３年　　小野　瑛葉

公民の授業で税金について学びました。それが改めて税について考えるきっかけになりました。私は指定難病を持ち生まれました。また難病と言っても日本には症例が無く、どの病院に行っても同じ病気の人が居らず治療にも慎重にならなくてはいけない為、様々な検査や大学病院の遺伝子検査もしました。そのためにかかった費用など後に両親から聞くと、莫大な金額であり私自身、とても驚きました。他にもキアリ奇形という脊髄の疾患や難聴・側湾症などがあったため幼い頃から十数回に及ぶ手術や長期の入院が必要不可欠でした。さらに補聴器や車椅子、コルセット等の補装具も必需品で、それらはどれも高額でしたが、私にとって一生欠かせないパートナーのような物です。

ある時父に去年分の医療費の領収書を見せてもらいました。そこで医療費の大半は会社の公費や税金で負担され、自己負担は三割ほどだと知りました。気になって医療費支払いの流れについて調べてみました。まず、被保険者や被扶養者は医療機関等で受診した際、健康保険で定められた自己負担額を先に支払います。その後、医療機関は医療費の残りの請求書を作成し、支払基金に送ります。支払基金は提出された請求書が適正か審査し、健康保険組合に医療費の請求をします。健康保険組合は届いた請求内容を確認し、支払いをして、支払基金から医療機関等に医療費の支払いをするというような流れです。調べてみて思ったことは、自分達の為に沢山人が動いてくれているという事です。中学に入学する際も　身体虚弱学級が新設され、私が過ごしやすい教室に作り変えたり、階段の所にスロープが付いたり、車椅子でも学習が出来る環境にしていただきました。もしその様な税制度が無かったら、生活に必要な補装具も買えないし、必要な治療も受けられません。そしたら今の命があるかも分からないと思うと、ぞっとしました。

このように税制度が根本にあるおかげで当たり前の日常を送る事ができます。これらは、私に限らず日本に住む全ての人に当てはまります。どこかで知らない人が納税をして、それにより、誰かが普通の日常を送ることが出来ます。私達は、納税をする事でお互いを助け合い、お互いの日常を守る事が出来ます。私自身も、その誰かのお陰で、買えた物や、受けられた治療があります。なので知らないどこかに住む、誰かが繋いでくれたこの命を大切にしていきたいです。私もそんな社会に貢献できる人になろうと心から思いました。

最後に、私はこの税作文を書く機会がなかったら、税について調べたりする事は無かったと思います。ですがそれはそんな事を考えなくても、当たり前の日常が送れていたからだと思いました。私はそんな日本に生まれてこられて良かったと　心からひしひしと感じました。

税が拓く、夢への入り口

京都市立西京高等学校附属中学校３年　　荒谷　心琴

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無料で支給されています。」
教科書の裏に小さく印刷されたこの言葉を、私は今まで何気なく読み流していた。しかし、ある日ふとその一文が目にとまり、頭の中で何度も繰り返されるようになった。無料であるはずの教育も、実は誰かがその費用を負担している。その費用は税金によって賄われているのだ。

私は幼い頃から教師になることが夢であり、教える立場から子供たちの未来を支えたいと考えている。しかし、夢を実現するには、教育の現場だけでなく、その背景にある仕組みや支えについても知る必要があると感じた。そして、その鍵となるのが「税金」だと気づいた。これまで当然のように受けてきた教育は、どのように支えられているのか。私は教育と税の関係について調べてみることにした。

調べていく中で、驚くべき事実が分かった。国や地方が負担している公立小学校の生徒一人あたりの年間教育費は約九十四万円、公立中学校では約百八万円にもなるという。単純に計算すると、私は中学三年生になるまでに、約七百八十万円もの教育費を国や地方に負担してもらっていたことになる。そのお金は、教科書やパソコン、実験器具などに使われているほか、教師への給料にも充てられている。つまり、私たちの学校生活は、ほとんど税金によって支えられているのだ。

では、その税金はどこから来るのか。それは、私たちが日々払っている消費税や所得税、住民税などから集められている。ここで、ふと疑問に思った。「私のように教育を受けている人は税金の恩恵を受けているけれど、もう教育を必要としない大人たちは、税金を払いたいと思うのだろうか」と。もう一度、教科書の裏を見てみた。「これからの日本を担う皆さんへの期待」――。この言葉に、私ははっとさせられた。私たちは未来の日本をつくっていく存在として、大人たちからの期待支援を受けているのだ。そのことに気づき、少し嬉しい気持ちになったと同時に、「期待されている分、しっかり学ばなければ」と思った。これまで私は税に対してあまり良いイメージを持っていなかったし、なんとなくで払うものだと思っていた。しかし、教育という側面から税を見つめ直してみることで、それは私たちの未来をつくるための、なくてはならない仕組みだと気づかされた。

将来、私は教師となり、子供たちの教育に深く関わることで、次の時代を担う若者たちの未来を共に築いていきたいと考えている。これまで自分が多くの人々から支えられてきたことを忘れず、その恩に報いるためにも、教育という道を通して社会に貢献していくつもりだ。また、これから税金を払うときには、「日本の未来を支える行為」であるという意識を常に持ちながら納税していこうと思う。

誰かの笑顔に繋がる税であるために

島本町立第二中学校３年　　生越　莉子

私の祖父は田舎の街で一人暮らしをしている。田んぼが広がり大きな夕日が見える景色は綺麗で大好きだが、生活面では不便もある。日常で行くスーパーや病院は歩いて行ける範囲にはなく、どうしても車に乗らなければいけない。私は、高齢者の事故のニュースを見ると胸がギュッとなる。祖父に会うと、元気で変わりない様子だが運動能力や認知能力の衰えは目にはわからない。私は市内で目にしたコミュニティバスの話をした。祖父は「初めは便利で病院までよく乗ったよ。だけど、利用者が減って税金の無駄使いであることが指摘されたから現在は走る本数がだいぶ減ってしまったよ。」と難しい顔をして言った。免許返納する機会を考えてはいるようだが、不便になってしまう。確かに誰も乗っていないバスがぐるぐると走っている姿は税金の無駄使いに見えるだろう。無駄使いにならないよう有効的手段で高齢者向けの便利な交通サービスを考えられないだろうか。他の地域には予約システムのあるバスやタクシー補助券、町内会やＮＰＯが送迎する有償ボランティアなどの新たな取り組みがあることを知った。実際にコミュニティバスは運賃で経費をまかなうことは難しく多くの公的資金を利用している。運賃も一律に一〇〇円などの安さ重視ではなく長く運営するために既存のバスなどと連携をとることも必要だろう。祖父が住む愛知県のコミュニティバスは一年間にだいたい五千万円の公的資金を使っている。私たちは税金の無駄使いを無くし、どのようにしたら必要な人に有効的に税金を利用できるかを考えることが必要だと思った。そうすれば、税金の無駄使いだという批判的考えではなく、有効活用されているという納得的考えが浸透していくと思った。税金を納める人も税金利用によって便利になる人も双方が嬉しい社会になると思う。日本は少子高齢化社会へと変化している。税を納める人は減っていき福祉や医療の税負担は増えていく。今まで通りの税金の使い方ではなく新しい視点も必要だろう。そして税は全ての年齢層に平等に有意義なものであって欲しいと願う。子を産み、育てる環境を良くすることは未来の若い家族や子ども達の助けになるだろうし、高齢者にとって便利で住みやすい社会であって欲しい。私たちは税の意義や目的を理解し、これから直面する日本の問題に対応する必要がある。私は未来の担い手として税についてしっかり学び、祖父のように困っている人に届く税利用や税の無駄を無くす知識を実践できる大人になりたい。まずはすぐにできる税金の無駄使いをやめたい。毎日出るゴミをしっかり分別することや学校の備品を大切にすることも税金の無駄を無くす。税の深い知識は、より良い社会を作る基盤となっていくため、身近な人の笑顔を思い浮かべながら、未来へと考えを紡いでいきたい。税によって私たちの生活の質が上がる明るい未来を目指して。

税が築く未来――万博から学んだこと――

大阪府立咲くやこの花中学校３年　　大原　和花

2025 年に大阪・関西万博が開催される。テーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」である。世界各国から技術やアイデア、文化が集まり、人類の未来について考える機会となるこの万博は、単なるイベントではなく、社会の未来像を具体的に示す重要な場である。この万博について調べる中で驚かされたのは、その規模の大きさと、そこに投入される公的資金の額である。会場整備、交通インフラの拡充、警備、スタッフの雇用、国際交流のための準備など、莫大な費用が必要とされる。これらの費用の一部は、国民から集められた税金によって支えられている。つまり、万博は私たち一人ひとりの税金が集まり、形になっている場でもあるのだ。

税金というと、「取られるもの」や「負担が大きいもの」といったイメージを持つ人も多い。実際、日常生活の中で「税の使い道」を意識する場面は少なく、税は見えにくい存在である。しかし、万博というプロジェクトを通して、税金本来の意味に気づかされた。

万博で紹介される最新技術の中には、私たちの暮らしを根本から変える可能性を持つものが多い。例えば、高齢化社会に対応した医療の進化、災害に強い都市づくり、誰もが使いやすいユニバーサルデザインの導入などである。これらは、すぐに成果が見えるものではないかもしれないが長期的に見れば社会全体を良くする可能性を秘めている。

万博に税金を使うことは、未来の社会づくりへの投資である。しかし、今の社会に求められているのは、短期的な視野ではなく、持続可能な未来を見据えた長期的な視野である。そして、それを現実に近づける力を持つのが税金という仕組みである。

税とは、社会の構成　全員が参加する責任の形である。教育、福祉、医療など、あらゆる分野で使われており、それによって私たちの生活は成り立っている。税金は、国民全体の共有財産であり、それをどう使うかは、私たちの未来をどう形づくるかという問題でもある。

将来、私は社会人として税を納める立場になる。そのとき、ただ義務として納めるのではなく、税金がどのようにして社会に役立っているかを考え、意見を持てる大人でありたい。

万博は未来を体験し、考えるための場所である。そして、それを支える税金は、国民が行う、未来に向けた「共同投資」であるということである。万博を通して税の意義を学んだ今、私は税を払うことは、未来を築くことだと考える。これからの社会を支える一人として、責任ある行動をとっていきたい。

未来を支える税の役割

神戸市立烏帽子中学校３年　　井上　陽翔

一九九五年の冬、阪神・淡路大震災が神戸を襲いました。私はまだ生まれていませんが、母は今もその時の話になると、少し黙ってから、こう語ります。「電気も水も止まって、夜は真っ暗。どこからか助けてって声が聞こえても何も出来なかったのよ」。崩れた家、続く火災、割れた道路。どこにも安心できる場所なんて無かった中で、人々は見知らぬ誰かと声を掛け合い、励まし合いながら街を取り戻していったそうです。あれから三十年。私の通う学校は耐震化され、近くの公園には広い避難スペースや災害用の倉庫があります。ある日、防災訓練でその公園を訪れた時、母がつぶやきました。「この倉庫も、税金で造られているんだよ」。その瞬間、私は初めて「税って命を守る力なんだ」と気付いたのです。税金は、ただ「納めるもの」ではありません。誰かの命や暮らしを、静かに支える大切な仕組みです。道路、病院、学校、防災施設。いつもそばにある「当たり前」は、税によって作られています。今の日本では、少子高齢化が進み、医療や年金の負担が大きくなっています。一方で経済の成長は鈍く、国の借金は一人当たり一千万円を超えるとも言われています。二〇一九年には消費税が一〇％に引き上げられましたが、それでも十分な税収とは言えません。最近では、仮想通貨や株の利益への課税、環境を守るための「カーボンプライシング」など、新しい税制度の議論も始まっています。社会や技術が変化する中で、税のあり方も進化していく必要があると感じます。また、税務行政も変わりつつあります。マイナンバー制度の導入や電子申告の普及によって、徴税コストの削減や脱税防止が進められています。これにより、税の「公平性」が少しづつ実現されつつあります。そして持続可能な未来を目指すＳＤＧｓの観点からも、環境にやさしい取り組みを後押しする税の役割は、ますます重要になっていくでしょう。私はこれまで、「税＝義務」と思っていました。でも、震災の話や、防災施設を目にしたとき、その見方が変わりました。税は、未来への備えであり、誰かを守るやさしさの形です。災害への対応、子育て支援、地方の活性化など、全てが税と繋がっています。これからの社会に必要なのは、政治や行政だけではなく、私たち一人ひとりが税について「考える姿勢」です。「納める側」から「支える側」へ。その意識の変化が、未来を変えていくはずです。あなたの身近にも、税の力で守られている場所がきっとあるはずです。税金を通して、誰かの明日をつくる。私はそんな社会の一員でありたいと思います。

誰が得して、誰が損をする？

兵庫県立大学附属中学校３年　　西　彩那

毎年、母が楽しそうにふるさと納税の返礼品のサイトを見ている。テレビやＣＭでよく見かけていたので、“ふるさと納税”という言葉は知っていたが、その仕組みについてはよく分かっていなかった。ある日、母に、ふるさと納税の仕組みを尋ねると、

「自分が応援したい市や町にお金を寄付して、その地域の特産品などのお礼がもらえるのよ。簡単に言えば、普段住んでいる市に納める税金を、他の市に納めるようなものかな」

と教えてくれた。

「え、それって、私たちの住んでいる市の税金が減ってしまうんじゃないの？」

と、私は疑問に思った。

では、結局この制度は、誰が得をして、誰が損するのだろうか。

まず、寄付を受ける自治体には明確なメリットがある。寄付金によって地域の財政が潤うからだ。しかし、返礼品を準備するコストや、ふるさと納税サイトでの宣伝費、配送費などの負担もある。そのため、寄付金のうち半分程度は費用に消えてしまうとも言われている。

次に、利用者が住んでいる自治体について考えてみると、こちらにはほとんどメリットがない。ふるさと納税によって税収が流出するからだ。ふるさと納税で赤字になる自治体は、都市部が圧倒的に多い。都市部から地方に税収が再配分されている点では、制度として一定の成功を収めているとの意見もあるが、地方自治体の中にも、返礼品に魅力がなく寄付が集まらないところもある。特産品などの一次産業があるかどうかで、寄付額に大きな差が出てしまっている。税の再配分が返礼品によって左右されるのは、公平性の観点から見て問題があるのではないかと感じる。

最後に、利用者について考える。返礼品を受け取り、税金の控除も受けられるため、お得な制度ととらえる人が多いだろう。しかし、その裏で自分の住んでいる自治体の税収が減り、結果として行政サービスの低下につながる可能性がある。そう考えると、「お得だから」と安易に利用するのではなく、この制度の本来の目的や影響についても考える必要があるのではないだろうか。

一方で、ふるさと納税を利用していない人はどうか。ふるさと納税の仕組みや手続きを詳しく知らない人も一定数いる。税金は支払い、返礼品のメリットは受けられない。ふるさと納税で赤字の自治体に住み、行政サービスが低下すればなおさらだ。最も損をしていることになるのかもしれない。これは、情報の格差で損得が生まれているのではないかと考える。

利用していない人が最も損するいびつな制度。制度のあり方については、制度設計した国が考えていく必要があるはずだ。

見えないところで支える力、支える人

天理中学校２年　　楠戸　理誠

ぼくはどちらかと言えば内気な性格で、クラスでも大きな声で意見を言ったり、みんなの前で発表したりするのは特に苦手です。部活でも目立つプレーより、シュートにつながるアシストをしたり相手の攻めやシュートをおさえるディフェンスをしたりする方が好きです。そんな自分と「税」というものは、少しだけ似ているようにも思います。

税金はどんなことに使われているのかを調べてみたら、税金で学校の教科書を配っていました。また道路がきれいに整備されていることもわかりました。ぼくの家の前の道も、前にデコボコがあり車やバイクが通るたびに、ガタンとなったり自転車はハンドルを取られて危険でしたが、町内の自治会長さんが言ってくれて、とてもきれいに舗装されました。

ぼくたちが毎日何気なく使っているものの中には税によって支えられているものがたくさんあることがわかりました。ぼくの家の前の道もそのひとつです。

それからぼくは読書が好きで、図書館はとてもいい場所だと思います。その図書館も税金で運営されていると知り、ありがたいことだと感じました。静かな空間で集中して読書できる図書館を、これからも積極的に活用したいです。

税は普段、目には見えません。だけどなくなったら困るものが多いです。道路がデコボコでも直らない、学校へ行っても教科書がない、本を読みたくても高価な本を買わなければ読むことができないでは、安心して暮らせないし不便だと思います。知らないところで税はぼくたちの生活を守ってくれているのです。そんな税の姿は、ぼくが将来なりたい人の姿によく似ています。消して目立たない、でも誰かを陰で支えられるかっこいい存在です。部活で仲間を助けるように、社会で誰かの助けになり、静かに人を支える税、ぼくはそんな大人になりたいです。

これから大人になって働くようになれば、ぼくは税金を納める側になると思います。その時には、「自分の納めた税金が誰かの役に立っている」と考え、自信をもって税金を納めたいです。目立たなくても確かに人を助けている。それはまるで、ぼくが理想とする目立つことより目立たないところで人の役に立つ人間像に似ている気がします。やはりその姿はかっこいい。だからぼくは、これからも変わらず自信をもって陰で人を支えられる大人を目指します。

私たちの食と税金

和歌山市立東中学校２年

少し前、買い物から帰ってきた母がこんなものを買ってきた。備蓄米だ。令和四年度のお米を買ってきて、試しに今日は備蓄米のお米を使うと言っていた。母が買ってくるよりもう少し前に、備蓄米は放出され、大阪や東京のスーパーでは朝から備蓄米を買いに求める人たちで大行列をつくっていたというニュースを見た。そもそも私たちは、政府がお米を備蓄していたというのが知らなかったので、とても驚いた。晩ご飯にほかほかの炊きたて備蓄米を使ったご飯が並べられた。ネットやＳＮＳを見ていると「まずい」や「かたい」などの意見もあったが、備蓄米と言われなければ分からないほどおいしく食べることができた。

ニュースを見ていると、備蓄米放出の仕組みを放送していた。なかでもよく紹介していたのが随意契約のことだが、どのようにお米を買ったり、備蓄しているのかと気になった。

調べてみると、備蓄米を買っていることに税金が使われていることを知った。また、備蓄米について調べてみると、政府備蓄米の制度が始まったのは一九七〇年代。戦後の混乱期には食料の需給が不安定でお米が足りずに困った経験があった。それを踏まえ、一九九五年から、法律により国によるお米の備蓄を制度化したらしい。そして、ずっと備蓄をしているわけにもいかないので、新しいお米と入れ替える必要がある。だから、ある程度古くなったお米は、これまでは災害時の食料支援や福祉施設、学校給食などに活用され、一部は海外支援や、飼料用などとして売却していた。だが、今回の備蓄米放出は一般に向けたお米を販売するということだ。

お米は日本人の主食であり、供給が止まったり、価格が急激に上がったりすると、私たちの生活に大きな影響を及ぼす。そのため、政府は食料安全保障の一環として、税金でお米を買い、備蓄米を管理している。そして、必要に応じて市場に放出され、価格が高騰しすぎないように調整したり、困っている地域に供給したりする役割を果たしている。二〇二〇年以降のコロナ禍でも、学校の給食が中止になった地域で備蓄米が提供されるなど柔軟な活用例がある。

そのように、税金でお米を買い、それを備蓄する制度が、見えないところで私たちの食の安全を守り、支え続けていたのだ。

私たちの暮らしを守るために、税金を使うのは良いことだと思う。ただ、これだけの意見で世間のあらゆる税金の問題や課題が解決するわけではない。中学生の私には税金についてまだまだ知らないが、それでも税金への関心を持ち続けることが大切だと私は思う。今こうして、食卓にお米が並ぶことができるのも、税金という制度、備蓄米があるからだ。

お米を農家から買い取るにはお金が必要だ。そのための税金だ。それぞれ使い方は違えど、私たちの食にも税金が使われているのだ。

日本と海外をつなぐ架け橋

岡山県立岡山大安寺中等教育学校１年　　廣田　花梨

私は昨年まで十年以上アメリカに住んでいました。アメリカでの生活は日本と全然違うところがたくさんありました。アメリカでは平日は現地の学校に通い、毎週土曜日は小学一年生の頃から日本語補習校に通っていました。補習校では新しい学年になるたびに机の上にはピカピカの新しい教科書が置かれ、私は一つ学年が上がったことを実感し嬉しくなりました。アメリカの現地校では、クラスの先生ごとに使うプリントや本が異なるので決まった教科書はありませんでした。だから、補習校でクラスのみんなが「教科書」という決まった本を用いて一緒に音読したり、違うクラスの友達とも国語のお話の内容を共有できる土曜日がとても新鮮でした。

二つの学校を比べて、私は日本や海外の日本語補習校で「当たり前」のように配られている教科書が、海外の現地校では当たり前のものではないことを実感して、私たち日本人はとても恵まれていると感じました。

この経験を通して、私は「どうして日本は教科書を無料で配ることができるのだろう。」と疑問に思いました。そして、それは「税金」に関係があることを知りました。

税金には様々な種類があります。国民が納めた税金は医療や道路の整備などに使われ、教育のためにも使われます。日本の子どもたちは国民が払う税金があるおかげで教科書を無料で受け取ることができているし、私がそうであったように、海外にいても日本にいるのと同じように学ぶことができています。これはとてもありがたいことだと思います。さらに深く調べると、それはみんなが平等に学べるように「教科書無償給与制度」と呼ばれる制度であることが分かりました。この制度には、次の世代を担う子どもたちの健やかな成長を願う国民の思いが込められていて、生徒のみんなが経済的な負担を感じることなく学ぶことができるように国が支えているものです。もしも教科書が有料であれば、経済的な理由で教科書を買えない子どもがいるかもしれません。また、海外にいる子どもたちは母国語を用いた学習を進めることが難しくなるかもしれませんし、その結果、母国である日本への愛情がもしかしたらだんだん薄れていってしまうかもしれません。このことを考えると、教科書は海外に住む子どもたちにとって日本と海外をつなぐ架け橋のような存在になっていると思います。私はこの制度が私たち日本人にとって大切で、未来の日本にも欠かせないものだと思います。

私は海外の経験と税の仕組みを知ったことで、教科書への思いが強くなりました。日本で中学生を始めるにあたり、私は税金とそのしくみに感謝し、教科書をより大事に使っていきたいと改めて実感しています。

「税って、何色？」

学校法人安田学園安田女子中学校３年　　福島　果歩

「税って、何色だと思う？」
この問いに多くの人は「灰色」や「黒っぽい」と答えるのではないだろうか。それは税に対する「難しそう」、「堅苦しそう」、「よくわからない」などのイメージからきているのではないだろうか。しかし、学んでみると、実はもっとたくさんの「色」があることに気づく。

税のある景色には、いろんな色があった。一番分かりやすいのは「赤」。命を守るための消防車や救急のサービスも税によって動いている。「緑」も分かりやすいのではないだろうか。ゴミの収集や環境整備などのエコ活動も税によって動いている。他の色も探してみよう。例えば「オレンジ」。オレンジは防災対策や地域の支援が浮かぶ。世界初の津波防災プロジェクトにも「オレンジ」はキーカラーとして使われている。その他にも防災バッグといえば「オレンジ」が連想されるのではないだろうか。災害時のニュースでみる救護隊もオレンジの服を身に着け、税によって動いている。私たちに一番身近な、学校教育は希望の光のような「黄色」。ここにも税は使われている。このように、少し見方を変えるだけで、税は色鮮やかになる。

私たちが今、生きている、与えてもらっているのは「色のある未来」だ。しかし、これからは「知ること」で、自分も色を選び、重ねていく立場になる。歳を重ね、私たちが与える立場になるとき、この世界が、未来が色鮮やかであるために、私たちは税について学ばなければならない。税を学ぶこと、それは社会を塗っていく「筆」を持つことなのかもしれない。

あなたにとって、税は何色だろう？
私にとって税は、白色。白色は、求める人々のために、どんな色にでも変わることができる。それはつまり、筆を取る人々によって、暗くも明るくもできる、ということだ。税の恩恵は人によって受け方、大きさが異なる。そこで生まれる格差や考え方は、簡単に解決できるものではないし、助け合いの精神に基づく面から、とても難しい問題だと思う。しかし、一人一人の税に対する「色」の違いはそういった問題からくる面も大きいだろう。だからこそ、私たちが色を塗る立場になったとき、暗い色の印象を持つ人々を少しでも明るい色の印象へと塗り重ねていけるように、未来を描くために、私は税を学んでいきたいと思う。

税収減の救世主！？ 国際観光旅客税

英数学館中学校３年　　阿部　洵也

この夏、私は海外に赴任する父のもとを訪れた。何気なく航空券の予約確認書を見ると、運賃の他に様々な税金やサービス料が徴収されていることに気付いた。その一つが「国際観光旅客税」だ。金額は一人あたり千円。一体何にどの様に使われているのだろうか。この旅を機に、国際観光旅客税の目的や用途、各国の比較を通じ、この税が持つ意味について考えてみたいと思った。

国際観光旅客税とは、日本を出国する際、日本人も外国人も必ず支払う税金である。目的は主に三つ。一つ目は、空港での顔認証ゲートの導入等の手続きの迅速化や、公共交通機関での多言語対応、無料 Wi-Fi 環境の拡充など、ストレスフリーな旅行環境の整備だ。二つ目は、戦略的な訪日プロモーションや、各地の文化財や国立公園の多言語化。三つ目は、地域固有の文化や自然を活用した観光資源の整備だ。

この国際観光旅客税は、現在の日本が抱えている様々な問題への対策として期待できる。日本の少子高齢化による生産人口の減少は、将来的な税収減と直結する。しかし、消費税や法人税率の引き上げは国民に更なる負担を強い、企業の国際競争力にも影響してしまう。そこで国際観光旅客税である。事実、石破首相は、五月の予算委員会で、オーストラリア（約七千円）や米国（約三千五百円）など、各国の出国税額と比較し、この税を三～五倍に増額する可能性に言及した。昨年の税収が四百八十一億円、五倍なら二千四百億円。税収減に苦しむ地方の観光地の老朽化した橋やトンネルなども補修できるかもしれない。

税金は、しばしば「負担の不公平感」が話題になる。例えば、消費税は富裕層よりも貧困層にとって負担感が大きいと言われる。しかし、国際観光旅客税は、酒や煙草といった嗜好品の様に、旅行という個人の嗜好に対して課され、海外旅行に出かけられる安定した経済基盤を持つ層に課される税金である。ビジネスマンにとっても、Wi-Fi やラウンジなどの空港設備の充実は好ましい。また、多くの観光客が訪れることで生じる環境公害や渋滞などのインフラへの負担解消を、観光者自身が一部を賄うものである点も納得感があると私は思う。

千円という税額に対する負担感も、免税店によって実質的に還元される側面もある。例えば一万円の買い物をすれば、税と同額である千円のキャッシュバックがあるのと同じだ。航空会社のマイレージをためる事もできる。円安が進む中、外国人にとっても、そこまで大きな負担ではないと思われる。

訪日観光客が過去最高を更新し、観光が日本の重要な収入源となった今、国際観光旅客税は、その使途が明確で、負担感が少なく、外国人にも日本人にも恩恵をもたらす、非常に合理的な税金だと私は考える。

その手すりは、みんなで支えている

丸亀市立西中学校３年　　三木　晴佳

私には今年で九十歳になる一人暮らしをしている曾祖母がいます。大きな病気もせずとても元気な人ですが、最近は足腰が弱くなってきて、自分のことが少しずつ不自由になってきていました。「最近お風呂に入るのが怖いから入れていない。」と娘である祖母に相談があったようです。

夏休みに久しぶりに曾祖母の家を訪ねるとお風呂に手すりがついていました。曾祖母は「安心して毎日お風呂に入れるようになってうれしい。」と喜んでいました。リフォーム会社で働く父が工事をしたそうです。「介護保険を使って工事をしたんだよ。」と聞いて「介護保険って何だろう？」と疑問に思い、調べてみることにしました。

介護保険とは、高齢者や体の不自由な人が安心して生活を続けられるように、国や市町村が支援する制度です。今回の手すりの工事の他にも、介護士さんが自宅を訪れてお世話をしてくれたり、デイサービスに通ったりすることができます。こうしたサービスにはたくさんのお金がかかるのですが、介護保険を使うことで、かかる費用の多くを助けてもらえます。曾祖母のお風呂の手すりは、要支援の階級でかかる費用の一割負担で工事できたようです。

では、この介護保険のお金はどこから出ているのでしょうか。調べてみると、四十歳以上の人たちが払っている「保険料」とみんなが納めている「税金」によって成り立っていることが分かりました。つまり、今元気に働いている大人たちが、お金を出し合って支えが必要な高齢者を助けているのです。

日本では今、少子高齢化が進んでいて高齢者の数がどんどん増えています。私の周りにもおじいちゃんやおばあちゃんが施設にいるという友達が何人かいます。そういう人たちにとって介護保険はとても大切な制度なのだと感じました。そして、その制度を支えているのが、私たちの税金なのです。

今回、曾祖母のことで介護保険を知り、自分にも関係がある身近なものだということを知ることができました。しかし、学校で「介護保険って知ってる？」と聞いたら、ほとんどの人が「知らない」と答えました。確かにサービスを使う側の曾祖母でさえいざ使うまでは、その存在を全く知らなかったそうです。でも、これからの日本はどんどん高齢者が増えていき、介護を必要とする人も増えていきます。だからこそ、一人でも多くの人に介護保険のことを知ってもらいたいと思いました。身近に介護が必要な人がいる家庭でも知らずに困っている人がいるかも知れません。その人たちにとって介護保険の存在を知ることが大きな助けになると思います。

税金は、ただ納めるだけのお金だけではなく、こうした大切な制度を支えるために使われていると知った上で、私は将来社会の一員として支える側になりたいです。

「当たり前」の裏側にあるもの

松山市立南第二中学校３年　　来島　奏真

私のおくすり手帳には、一枚のピンク色のカードが入っている。「ひとり親家庭医療費受給者証」と書かれたもので、母は病院に行くたびに会計でそれを出していた。子どものころ、私はそのカードをただの保険証のようなものだと思っていた。母が当たり前のように出しているので、特に気にすることもなかったのだ。

しかし、中学生になり、自分一人で病院に行くことが増え、受付でカードを差し出すのが当たり前になると、ふと考えた。「どうしてこのカードを出すと、医療費がかからないのだろうか。」今まで疑問に思わなかったことだが、急に気になるようになった。

調べてみると、このカードはひとり親家庭の子どもや親の医療費を助ける制度で、その財源は税金であることがわかった。本来なら診察代や薬代に何千円とかかるところを、税金で補ってもらっているため、窓口で支払いがかからないのだ。私はそのことを知って胸がじんわり熱くなった。もし、この制度がなければ、母の負担はとても大きくなっていただろう。母は毎日家事と仕事をしてくれている。そのうえ医療費まで負担していたら、生活はもっと大変だっただろう。

あるとき、母が「税金は道路や学校だけじゃなく、病院や福祉にも使われているんだよ」と話していたことを思い出した。そのときは「へぇ」と聞き流していたけれど、今、自分が病院でカードを出すようになってみると、その言葉の意味がぐっと身近に感じられる。

税金が生活に直接関係していると実感したのは、このカードの仕組みを調べてみたときが初めてだった。税金は「自分が払った分が自分に返ってくるもの」ではなく、「みんなで出し合い、みんなを支えるもの」なのだとあらためて強く感じた。

私にとって当たり前に思っていた医療費がかからない制度も、実は当たり前ではなかった。知らない誰かが納めてくれた税金が、自分や母の生活を支えてくれている。そう思うと、ただカードを出すだけの行為にも感謝の気持ちがこもるようになった。

一方で、制度を当然のように使うだけではいけないとも感じた。必要のない受診や無駄な利用は、税金の浪費につながる。税金は限りある財源で、本当に必要な人のために正しく使われるべきだ。私は「無料だからいいや」と思わず、ありがたさを忘れずに利用したい。

あと四年で私は大人になり、働いて税金を納める立場になる。そのときは、支えてもらう側から支える側に変わる。元気に学校へ通い、病院に行けるのも、税金のおかげだ。その感謝を忘れず、社会で役立つ納税者になりたい。税金は目に見えないけれど、私たちの生活を支えてくれている。そのありがたさを教えてくれたのは、母のピンクのカードだった。これからも当たり前のことと思わず、感謝しながら生きていきたい。

「居場所」

佐賀大学教育学部附属中学校３年　　小野原　和子

先日、嫌なものを見た。図書館へ行ったとき、早く行きすぎてしまった私は、開館まで門の前で待っていた。同じ門の前には、高齢の男性がいた。心の持ちようが悪かったようで、その男性は門の向こうにいる職員の人に怒鳴りちらかしていた。

「この税金泥棒が！」

とても強い言葉だと思った。聞いているこちらまで不快になった。私は図書館が大好き。いつも優しく接してくれる職員さんも大好き。門の向こうの職員の人はやんわりと対応していたものの、困っている様子がみてとれた。といいつつも私は何とかするべくもなく、結局、図書館が開館するまで見て見ぬふり。

家に帰り、そのことを弟に言うと彼も何か思いあたることがあったようで、苦々しい顔をしてこう言った。

「その人だって税金で暮らしているのにね。」

わずかな違和感。ぬぐえないもやもや。そうだね、と曖昧に返答しながらも心の中で思っていることは違っていた。

小さい頃から図書館に通いつめており、借りた本の冊数は五千冊を超える私。一冊を千円とすると、その恩恵は五百万円を超える。しかしそれ以上に、私が図書館に見いだしている価値は大きい。夏は冷房が、冬は暖房が入っていて、快適空間この上ない。友達と遊びに来たり、テスト前に勉強をしたり、家族で本を借りたり。私の生活にはいつも図書館がある。図書館は私の「居場所」であり、そしてそれは税金によってまかなわれている。

「税金泥棒」というのはパワーワードだ。差別的で、悔蔑的で、そしてとても失礼な言葉だ。一方、「税金で暮らしている」という言葉にも首をひねりたくなる。税金は私達の暮らしをより豊かにする用途で使われている。そして、その機会は全員に公平かつ公正に巡っているものだ。にも関わらず、税金の恩恵を否定するような物言いはいかがなものか。

私達は皆が皆、国に税金をはらっている。国に税金をゆだねている。だから、私達の税金が、どのようにして、何に使われているのかを追うことはとても大切だ。しかし決して、それは税金によっての恩恵を、「居場所」を、否定するものであってはならない。

人によって大切なもの、大切にしたいものは様々だろう。私にとっては、それが図書館だ。大切なものはなくなってほしくない。

あなたにとっての大切なものは何ですか。

あなたにとっての「居場所」は、何ですか。

「税金がつくる命と未来」

長与町立長与中学校３年　　中村　有佑

私は医療と税金の関係について、日ごろから考えることがあります。なぜなら、私の父は病院で働く医師であり、毎日たくさんの患者さんと向き合っているからです。父は放射線科の治療医として、がんの治療に関わる仕事をしています。大きな病気と闘う患者さんの命を支えるその姿を見て、私は医療という仕事にとても大きな意味を感じています。

そして、同時に、医療を受けることがどれほどありがたいことなのか、少しずつ理解できるようになってきました。

日本では、病院で保険証を見せれば、治療費の多くを国や自治体が負担してくれます。

これは「国民皆保険制度」と呼ばれるもので、日本に住むすべての人が医療保険に加入し、病気やけがのときに平等に医療を受けられるようにする仕組みです。医療費の自己負担は原則三割で、残りの七割は保険と税金でまかなわれています。これにより、誰もが安心して病院にかかることができます。

さらに、私たちのような子どもには、「こども福祉医療費助成制度」という制度もあります。自治体によって違いはありますが、多くの場合、子どもが病院にかかるときの医療費が無料、またはごくわずかで済むのです。

私もよく風邪をひいたり、怪我をしたりして病院に行きましたが、いつもお金の心配をせずに診てもらうことができました。

父から聞いた話で、特に印象に残っていることがあります。それは、あるがん患者さんの治療についてです。その患者さんは長い間の治療が必要でしたが、経済的な理由で通院をためらっていたそうです。しかし、医療費の負担を軽くする制度があったおかげで、治療を最後まで受けることができたといいます。

「税金と医療制度があるからこそ、患者さんは希望を持って治療に向き合えたんだ。」

と父は話していました。

私はこの話を聞いて思いました。もし税金がなければ、医療費はすべて自分で払わなければならず、治療を受けたくても受けられない人が出てきてしまいます。命に関わる大切なことなのに、「お金があるかどうか」で左右されてしまう社会は、とても怖いと思います。

「医療はチームで成り立っている。医師や看護師だけではなく、それを支える税金や保険の制度があるからこそ、医療を受けられるんだ。」

と父は話してくれました。私はこの言葉を聞いて、税金を納めるということは、ただの義務ではなく、誰かの命や未来を支える大切な行動なのだと実感しました。

これから私は成長し、社会の一員として働くようになります。そのときには、税金をきちんと納め、今度は自分が誰かを支える立場になりたいと思います。そして、すべての人が安心して治療を受けられる社会を、未来へつなげていけるような大人になりたいです。

戦後八〇年の「ありがとう」

福岡市立高取中学校３年　　嶋本　香雪

戦後八〇年のこの夏、カラー化された戦争写真（映像）を見る機会があった。

沖縄戦、特攻機の出撃、空襲後の焼け野原、原子爆弾投下時の雲。白黒写真としては今までに何度も本で見たことのあるものだったが、カラーになると受ける印象が全く違った。八〇年前に起こった過去の戦争ではなく、つい最近に自分のすぐ身近で起こったことのような気すら、ひしひしとしてきたのだ。着ている衣服が違うだけで、写真の中の人物はみな、知っている誰かに似ているような気がした。今私が住んでいる街が瓦礫になったら、きっと同じ風景になるのだろう。私はたまたま、生まれた時期が少しずれただけだったのだ。

多くの人が命を落とし、大切な人を亡くし、日常を奪われた昭和の戦禍。そこからたった八〇年。自分の日常生活を改めて見回してみると、衣食住に事欠かず、便利で快適で安全な暮らしがある。それを至極当たり前のこととして、将来の夢がどうだの、受験勉強が進まないだの、およそ生命や衣食住が脅かされる状況では悩むことすらできないようなことにちまちまと悩み、「青春」の日々を享受している。

しかしそれはひとえに、戦中・戦後を生きた私の曾祖父母、祖父母世代が必死に日本社会を立て直し復興することに力を尽くしてくれたこそに他ならないのではないか。そう改めて感じた時、私はふと、この世代の人々皆に、心の底から深い感謝を伝えたくなった。想像を絶するような戦禍を生きぬいてくれたこと、戦後の苦しい時期でも一人一人が前に進み続けてくれたこと、安全で快適な社会の土台やしくみを再建し、そこに今の私たちを迎え入れてくれたこと。けれども、それらに対する「ありがとう」は一体どのようにして伝えたら良いのだろうか。

私なりに考えた答えの一つが、税を納めることだ。

税金は年金、医療、介護の充実にも使われ、病気になり治療が必要になった時や歳をとって今まで通りの生活ができなくなった時に、個人の経済的負担を緩和し安心して暮らせるような公共サービスに繋がっている。私たちの曾祖父母、祖父母世代は医療・福祉のサポートが重要になる年代のため、私たちは納税を通して彼らのQuality of lifeの維持に役立つことができるのではないだろうか。そうならば、納税は「ありがとう」の代弁である。

納税は日本国憲法に定められた国民の義務ではある。しかしその使い道を考えた時に、「しなければならないものだからする」というようにのみ捉えることは、どこかもったいない。数年後、私が成人し一人の納税者になった時には私なりに、今の日本を作ってくれた世代への「ありがとう」の想いをのせることができたらと思う。

二〇二五年八月十五日。八〇回目の終戦の日に、曾祖父母世代の十五の夏に心を寄せた。

支えてくれてありがとう

北九州市立沖田中学校３年　　進藤　知佳

中学一年の冬、私は学校に行けなくなった。行けるようになった今でも、理由は分からない。自分でも、どうすればいいか分からないまま時間はどんどん過ぎていき、友達とどのように笑い合っていたのかも忘れてしまっていた。私一人が取り残されているように感じた。

そんな時、担任の先生が「ちょっとずつでいいよ」と言ってくださった。一見普通の言葉でも、その時の自分にとって、すごく救われた言葉だった。他の生徒がまだ登校していない朝早い時間に学校に行っていた時に、教科の先生も声をかけてくださった。スクールカウンセラーの先生も親身になって話を聞いてくださった。

学校には行けたものの、まだ教室に入るのは難しかった時、オンライン授業を勧められた。タブレットを通してクラスの様子をのぞくと、ザワザワとした自分のよく知る空気感にほっとした。

あとで知ったことだが、スクールカウンセラーや、オンライン授業の環境整備には、税金が使われている。先生方の働く環境、タブレットや通信整備、さらには義務教育そのものも税金が使われている。当時は、なんにも感じていなかったが、どれにもこれにも税金が関わっている。そのことにびっくりした。

私は、税金は道路や建物をつくるためだけのものだと思っていた。しかし実際には人と人との繋がりや、私たちの心の安全も支えている。もし税金がなければ、私が話を聞いてもらうことも、クラスの雰囲気を知るためのオンライン授業もなかったかもしれない。そう考えると、自分は一人ぼっちではなかったのだと思う。それも全て、税金が私と周りを繋げてくれたからだと思う。

あの時の支えがなければ、今の私はきっと学校には戻れていなかったかもしれない。少しずつ登校日を増やし、また友達と笑えるようになったのは、先生方の励ましと、税金があったからだ。私は初めて税金というものを身近に感じた。

今、私は消費税を払うという形だけで納税している。十パーセントでも高いと感じていた税金だが、中学生である私の心の支えになってくれた事を思うと、目には見えないこの十パーセントの力が、とてもありがたく、大切な物だと思った。

私は十五歳。働くようになれば、所得税や住民税も払うことになる。私の心を支えてくれたこの恩は、納税という形で返さなければならないと思う。自分の払う税金がこれから先、誰かの「居場所」や「やり直しのチャンス」になることを忘れたくない。

ひいおじいちゃんを支えた手帳

別府市立青山中学校１年　　藤原　愛海

私のひいおじいちゃんは３年前に 95 歳で亡くなりました。そのひいおじいちゃんについて、最近おばあちゃんから話を聞きました。

ひいおじいちゃんは、数学の先生になりたくて広島大学に通っていたそうです。そのころ広島で原爆にあいました。ひいおじいちゃんは、原爆が落ちたすぐ近くにいて、建物のガラスが全部割れて人に突き刺さっていたそうです。そんな中でもひいおじいちゃんは大きな怪我もせず、一生懸命勉強をして数学の先生になりました。

しかし、原爆は黒い雨とも言われ、それを浴びた人は将来とても重い病気にかかることがわかってきました。ひいおじいちゃんはそれが恐くて健康にとても気をつけていました。体調が良くないと、もしかして原爆のせいではないかと心配していたそうです。

そんな中でひいおじいちゃんの支えになっていたのが「被爆者手帳」でした。この手帳を病院や薬局で見せると、無料になったそうです。これは国民から集めた税金が使われていると母から聞きました。この手帳のおかげでひいおじいちゃんは安心して病院に通えていたそうです。死ぬときは絶対に家がいい！と言っておばあちゃんが家で介護をしていました。家にお医者さんやヘルパーさんが来て、点滴をしたり、たくさんお世話をしてくれました。それもこの手帳を使わせてもらったんだよとおばあちゃんが教えてくれました。ひいおじいちゃんはいつもこの被爆者手帳に感謝していました。

原爆が落とされて約 80 年、学校の平和授業でしか原爆のことを学ぶ機会はないけれど、原爆によってその後何十年も不安を抱えながら生きた人がいて、その人を日本のみんなが税金で助けていたことを知りました。ひいおじいちゃんは大きな病気をすることもなく、老衰で天国へ旅立ちました。眠っているような顔でした。ひいおじいちゃんに被爆者手帳があってよかったなと思いました。

最近は物価高騰で生活するのも大変だとよくテレビで見ます。そんな中で、税金を納めている大人はすごいなと思います。払いたくないと思う人もいると思います。私も大人になって税金を納めるようになったとき、このお金がひいおじいちゃんのような人を助けることにつながるんだなと思い出そうと思います。人は助け合って生きていることを教えてくれたひいおじいちゃんを私は忘れません。

見えないところを支える

肝付町立岸良学園９年　　倉　美黎

学校の近くにある岸良浜には、毎年六月から七月にかけて多くの海亀が上陸する。この地域の特色を生かして、私たちの岸良学園には、学校独自の教科として「ウミガメ科」がある。その学習の一環として海亀の保護活動をしている。親亀が浜に産んだ卵を採卵して校内にある「海亀ハウス」で育て、孵化した子亀を海に放流する活動だ。

今年度は、そのような海亀保護活動に税金がどのように使われているかを知り、海亀と税の繋がりについて学ぶことができた。「私たちの活動にどう税金が関わっているのだろう。」という疑問を解決するため、興味深く税の学習について取り組んだ。

私はまず、環境を守るための税について調べてみた。炭素税、森林環境税、ガソリン税などがあり、それぞれ使う目的が異なる。炭素税は、化石燃料の消費によって排出される二酸化炭素の量に応じて課され、地球温暖化防止に役立てられる。森林環境税は、森林を守り、水や空気をきれいに保つために使われている。ガソリン税は、ガソリンに課せられる税で、道路整備や環境保護のために使われている。これらの税は、どれも自然や生き物を守るための大切な財源だと感じた。

さらに、私たちは実際に肝付町役場の税務課に足を運び、職員の方々から直接お話を伺う機会を得ることができた。税務課では、税金の金額を決めて住民に知らせたり、納められた税金を管理したりする仕事があることが分かった。また、土地の境界を調べる仕事も担当されていることを知り、税務課の仕事が想像よりもずっと広いことに驚いた。

担当の方に、私たちの行っている海亀の保護活動に税金が使われているのかを質問してみた。浜清掃で出たゴミをゴミ収集業者が回収し、運ぶ作業に税金が使われているとのことだった。その話を聞いて、私たちの活動は、皆さんが納めた税金によって成り立っているのだと知りハッとさせられた。

私たちは、毎年、岸良浜の清掃を行っている。浜にゴミがあると、海亀が安全に上陸できなかったり、産卵する場所がなくなってしまったりする。だから、浜をきれいにすることは、海亀の命を守る上で重要な活動だ。

海亀の保護活動や浜清掃は、自分たちだけが頑張っていることだと思っていた。でも、その活動の見えないところに税金が使われていた。このような活動ができるのは、税金を納めている方々や、そこに予算を配分した税務課のみなさんのおかげだ。税金は、「人」の生活を支えるだけではなかった。自然環境や「生き物」の命を守るためにも使われている大切なものなのだ。

これから、もっと税金について学び、身近にある「税」の存在を知っていきたい。私は、今はまだ中学生だけれど、大人になったらしっかり責任をもって納税できるようになりたい。この学習でそう思えるようになった。

税と私たちの未来

北中城村立北中城中学校３年　　山内　莉央

みなさんは税金についてどのくらい知っていますか。「税金」と聞くと少し難しくて、遠い話のように感じるかもしれません。私も中学三年生になるまで正直なところあまり深く考えたことはありませんでした。でも、最近のニュースを見ていると税金が私たちの暮らしや国の未来にどれほど深く関わっているか少しずつですが理解できるようになってきました。

つい先日行われた参議院選挙。テレビやＳＮＳで候補者たちの演説を聞いていると、財源や消費税といった言葉が頻繁に出てきました。少子高齢化が進む日本で、医療や年金といった社会保障をどう維持していくのか、子育て支援をどう充実させていくのか。そのためには、やはり税金が必要不可欠だと改めて感じました。例えば、消費税をめぐる議論。現金を給付すべきか、時限的もしくは食料品だけ下げるなどといった意見もあれば、消費税を根本から無くそうといったそれぞれの候補者がそれぞれの立場から意見を述べていました。私たちの生活に直結するだけに、多くの人が関心を持っているのがよくわかりました。私自身も将来大人になって働くようになったらたくさんの税金を納めることになるだろうと考えると、どの選択が本当に正しいのかとても考えさせられました。

そして、もう一つ最近よく耳にするのがトランプ関税という言葉です。遠いアメリカの話と思いがちですが、これも私たちの生活に影響を与える可能性があります。トランプ大統領が特定の国からの輸入品に関税をかけるという政策を打ち出したことで世界中で貿易摩擦が起きています。例えば、もし日本からアメリカに輸出される自動車に関税がかかればその分コストが上がり、結果的に自動車の価格が上昇したり企業の利益が減ったりするかもしれません。そうなると、企業は従業員の給料を抑えたり、リストラを行ったりする可能性も出てきます。私たちの親世代の働き方にも関わってくる話でとても他人事とは思えません。国と国との間の関税も形を変えた税金のようなもので、それが世界経済全体に波紋を広げて最終的には私たちの食卓や暮らしにも影響を及ぼすのだと知りました。

私たちは、まだ中学生で直接税金を納める立場ではありませんが、将来は社会の一員として税金を納める日が必ず来ます。その時にただ義務だからと納税するのではなく、この税金がどのように社会を支え、私たちや次の世代の未来を創っていくのかを理解し、納得して納税できる大人になりたいと強く思いました。

家族を守ってくれた税

千歳市立富丘中学校３年　　山本　姫愛

叔父は、四十歳でこの世を去った。死因はくも膜下出血だった。叔父は、先天的に血液の凝固因子が欠乏しており、血が止まりにくい病気だった。そのため、健康な人なら小さな傷や打撲で済むものも、叔父の場合は大出血につながる。自然出血も頻繁に起こり命に関わる。叔父の病気は決して治ることのないもので、一生涯にわたる治療が必要だった。しかし、その治療はとても高額な費用がかかり、家計への経済的な負担はあまりにも大きくなることが予想され、祖父母は先の見えない不安に押しつぶされそうになったと話していた。そんな中、希望となったのが日本の医療制度だった。

日本の医療制度は、「国民皆保険制度」といい、全ての国民が公的医療保険に加入し、保険料を支払うことで医療費の負担を軽減している。診療費は負担割合に応じて支払い、残りは保険と税金で賄われている。また、完治が難しく治療費が高額な疾患の場合は、自己負担額の一部または全額を国や地方自治体が負担する医療費助成制度が利用できる。こうした制度のおかげで、叔父は安心して治療を続けることができ、家族も経済的な負担を心配せずに生活を送ることができた。

母と祖父母は、買い物の際の消費税も、毎年届く自動車税や固定資産税の納付書も、文句ひとつ言わず納める。税金に対して抵抗感がなく見えるのは、家族が税金によって救われたからだ。感謝の気持ちと、納税の重要性に対する深い理解があるのだと思う。世の中には、税金に否定的な人もいる。しかし、税金がなければ、安心して暮らすことができない。特に、日本の医療制度は命を救い、人々に希望を与える重要なものだ。だが、少子高齢化、医療技術の進歩、生活習慣病などの慢性疾患の増加で、医療費は年々増え、財政を圧迫している。このままでは、医療制度の維持が難しくなる。これを守るためには、一人一人が健康を意識し、定期的な健康診断を受け、病気の予防を心がけることが大切だと思う。また、後発医薬品を活用し、不要なはしご受診をしない、軽症なら市販薬を使うなど少しの工夫で医療費を抑えられる。改めてこの制度の重要性を考え、社会全体で守っていく必要がある。

私たち国民は、税金の仕組みや使い道を学び、重要性を理解することが大切だと思う。また、家庭や学校で税金について話し合うことも、納税意識の向上につながると思う。私も数年後には納税者になる。納税義務の意味を理解し、税金が有効に使われるよう、健康管理や環境保護にも気を配れる、責任ある納税者になりたいと思う。

納税者として

湯沢市立湯沢北中学校２年　　山内　蒼

今年の夏はとても暑かった。テレビのニュースは、暑さが厳しくなること、熱中症に気を付ける呼びかけが毎日放送されていた。

僕の通っている学校でも暑さ対策が色々行われたが、なんと言っても一番参ったのが部活動停止だった。体育館の温度が異常な暑さになり、中止せざる得なかったのだ。それも一度だけではない。何日も続いた。部活動をできないストレスと異常な暑さに僕のイライラは止まることがなかった。学校の花壇を見ると、暑さで花もぐったりしている。今年の夏は雨も降らなかったため、カラカラ状態だった。

しかし、夏の後半、秋田県は豪雨により、県内に甚大な被害が生じる事態となった。

被災地の状況をネットで見ると、水害で道路が壊れたり、家屋が水浸しになったり、停電や断水になったり、生活基盤の被害がひどかった。また、収穫を目前にした農作物の被害も大きく、被害に遭った人はどんなに気落ちしただろう。本当に気の毒に思う。テレビのニュースでボランティアの人が片付けをしている映像が流れたが、僕は被災者のこの後の生活はどうなるのか心配になった。寄付金を募るにしても時間がかかりすぎる。また、必要な金額が集まる保証は何一つない。同じ秋田県民として何か出来ないだろうか―僕は「災害寄付」とパソコンに打ち込んでみた。すると、税金が災害に対して力を発揮していることが分かった。それは「ふるさと納税」だ。この税金は被災自治体に直接届けられ、復興支援活動のために役立てられるそうだ。僕はこの画面をしばらく見つめた。

今まで僕は税金について「取られるもの」というネガティブなイメージをもっていた。しかし、よくよく考えれば、税金は僕たちの生活をしっかりと支えてくれている。しかも、自分が支払っている以上の分を与えられている。道路や橋、消防や警察、医療や福祉、そして今僕が学校に通うことができるのも全て税金のおかげだ。みんなが力を合わせて自分達の生活を支えている。実際、僕より小さな子どもさえお菓子を買う際、「消費税」という形で小さな手からお金を出し、納税者として貢献している。だからこそ税金はみんなが納得できる形で使われなければいけない、と言える。また、税金がきちんと使われているのか関心をもつべきだと僕は思う。さらに必要に応じて意見をＳＮＳなどに発信することも税金をより有効に活用する土台作りになると思う。今回の寄付型の納税は、そうしたアイディアから生まれたのかもしれない。

一人一人の生活に密着している税金。どのような社会を築きたいのか、そしてどのような支え合いが必要なのかをしっかりと捉えていくことが納税者としての責任と言えるかもしれない。将来、僕も社会の一員として納税する日がくる。納税者としての責任を自覚し、社会に貢献できるようになりたいと思う。

暮らしは税で守られている

宇都宮市立宮の原中学校３年　　齊藤　和奏

テレビから埼玉のごみ処理施設が火事になり、ごみの収集が停止してしまったというニュースが流れてきた。捨てられないごみが家庭内やお店にたまっており、街の人たちは困っていた。また、勝手に街中に放棄されたごみからは悪臭が漂っており問題も起きていた。

私が住む地域でも、三年前、ごみ処理場で火災が発生したことを思い出した。市のごみ焼却能力の約七割が失われた。火災の原因はスプレー缶やリチウム電池などの危険ごみの混入だとされている。もし、皆で決まりを守ってごみを分別していれば、火災は起きなかったかもしれない。復興には約五十四億五千万円の莫大な費用と、半年の期間がかかった。再建や処理のためのお金の多くは、私たち市民が納めている税金から出ている。せっかく集められた大事な税金が、こんな形で消えていくのは、もったいないと思った。

当時ごみの回収が停止することはなかったが、ごみ処理が完全に機能しなくなっていたら、家や街がごみであふれ、大変なことになっていたと思う。毎週決まった曜日にゴミが回収され清潔な暮らしを保つことができるのは当たり前のことではないのだと思った。周りを見渡してみると普段何気なく生活している中には、税によって成り立っていることがたくさんある。川沿いの私の家の前は毎年夏になると、人の背丈以上もある雑草に埋め尽くされるが、必ず除草され、きれいで清々しい景観がよみがえる。これも税がもたらした恩恵だと改めて気づいた。私たちは常に、税の恩恵を受けていると再確認させられる。

三年前の当時、市のごみを減らそうという働きかけで、私は母とごみを土に返すコンポストという取り組みを行った。毎日生ごみを集めていると、思った以上にたくさんの量があったことを覚えている。少し手間はかかったが、堆肥を使い、花を育てて楽しんだ。小学生だった私は、あまり深く考えていなかったが、今思うと、環境にやさしいだけでなく無駄な税金の支出を減らすことにもつながる大切な活動だったと実感した。小さな努力の積み重ねでも、一人ひとりの行動のあり方で、大きな実りを成すことができるのではないか。

今この瞬間も税がだれかの支えとなっている。私たちが支払った税が巡り巡って自分や大切な人の力となる。税は、決して自分と関係のない「遠いお金」ではなく、私たちの暮らしを守るために、皆で出し合っている大切な資源だ。この資源を無駄に使われることなく、有意義なものにしていかなければならないと思う。そのためには、税についてしっかり学び、正しい知識をもつことが、学生である私たちにとって大切なことではないか。そして税による恩恵に、感謝の気持ちをもち、自分にできることを意識して生活することがよりよい社会へとつづく、一歩となるのではないか。将来大人になる私たちが、安心して暮らせる未来への架け橋になれるように。

その可能性を最大限に

笛吹市立石和中学校１年　　鹿野　穂高

朝六時半。ぼくは、大阪万博にいた。八月の暑い日、家族でそろってみられる日はこの日だけと、山梨から車で向かった。

二〇二五年四月十三日から十月十三日まで大阪市の人工島・夢洲で開催されている大阪・関西万博は、「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマにした国際博覧会だ。世界から約一五〇の国や地域が参加し、最先端技術や多様な文化を通じて未来社会のあり方を提案する場となっている。ぼくは、日本館で火星からの石に触れた。なぜ火星からの石だとわかったのか聞いて興味深かった。大阪パビリオンでは心筋シートの動くところを見てきた。心臓病で苦しむことがなくなる未来がもうすぐだと感じた。世界中の問題に対していろいろな研究が進んでいるということを感じた。一日中、ぼくは夢の中にいるようだった。様々な国をいっきに旅行できたような感覚になった。未来の農業や都市を感じることができた。

万博には賛否両論ある。ひとつには、会場建設費や運営費の一部を賄うため、国と大阪府・市から約三〇〇〇億円もの税金が投入されている、ということに批判が集まった。「万博よりも住民生活に直結する施策に税金を使うべき」という意見があった。金額が大きすぎて、ぼくは判断しづらいけれど、見る価値のあるものが多かったと思う。予約が取れないから並ぶこともできないのが残念だったので、いい評価があるものは残し方を考えてほしいなと思っている。

次の日は、兵庫県神戸市にある「人と防災未来センター」に行った。阪神・淡路大震災から得た貴重な教訓を世界共有の財産として後世に継承し、国内外の地震災害による被害軽減に貢献すること、および生命の尊さ共生の大切さを世界に発信することを目的に設立された。映像で震災と復興を追体験して、被災された方々の話の記録が映像と共にたくさんあって、その場で話を聞いているようだった。学校の日誌の内容を読むと普通の暮らしができないときの工夫や復興までの道のり、各地域での取り組みなど様々なことが学べた。そして、最新の防災知識を身につけるために職員の人に教えてももらったり、考えたりして災害を学び、防災・減災について考えることができた。

日本には、およそ五〇種類の税金があり、「どこに納めるか」、「何に税金をかけるのか」、「誰が税金を負担するのか」、「税金の使いみちは決まっているのか」により「税金」を分けることができる。二つの施設を訪れて、税金の使いみちについて考えることにもつながった。大切なことを考え、体験させてくれる施設も今後の未来のためにも大切だと改めて感じた。一人一人が望む生き方を考えて、その可能性を最大限に発揮できる社会を作っていくことが必要だと思う。そのために使われている税金に感謝し何にどう使われているか関心を持ち続けたい。

未来に納める

永平寺町松岡中学校３年　　林　愛子

私は毎年のように祖父が山で掘ったタケノコをいろいろな料理で食べさせてもらっている。今年の春は、その山で私も家族と一緒にタケノコを探してみたが、なかなかうまく見つけられない。その山は祖父が定期的に山に入って草を刈ったり、枝を切ってあるので、なんとか歩けるのだが、少し先に見える森は太くて立派な木がたくさん生えており、とても歩けそうな場所ではない。かわいい鳥の声は聞こえるが、虫がたくさんいて正直早く帰りたいと思った。人が入らないところは誰が管理しているのだろうか。

税金について調べようと思った時に、最近新しい税金が始まった事を知った。「森林環境税」というものらしい。森林が持つ役割はいくつかあるそうだ。温室効果ガスの吸収による地球温暖化の抑制、洪水や土砂災害の防止、生物多様性の保全など、様々な役割がある。最近はニュースで集中豪雨や台風による水害が全国各地で起きているのをよく見かける。日本中どこでも起きるので本当に怖いと思う。防災という点でも森林は大事な役割を持っているそうだ。

私が住んでいる永平寺町の森林環境税がどのように使われているのかをホームページで調べてみた。自治会にある林道の維持管理として、側溝の土砂上げ、草刈り等の整備、人力ではできない作業に使用する高性能の林業機械の支援をしていることを知った。また、災害を未然に防止するために、住宅などに近い山ぎわの危険木を切ったりする森林整備をする費用も支援しているそうだ。森林環境税はその地域にあった森林の維持管理に活用されていることが分かった。税金とは私たちの知らないところで、私たちが当たり前に安全に生活できるように活用されているのだと感じることができた。

私はまだ中学生で税金を納めているわけではないし、「森林環境税」を納めている、と聞いてもピンとこない。ただ、私の生活の中のいろいろなところで税金が使われていて、当たり前に私の生活を安全に守ってくれているのが税金である。また、新しく始まった「森林環境税」は税金を納める事によって森林を守ることになり、環境保全や防災につながっていくと思うと何十年、何百年先の未来のためにとても大事なものだと思った。一人一人から集まる税金の額はわずかでも、それがたくさん集まれば大きな力となって、私たちの生活をよりよいものにしてくれるのが税金であると思う。

未来の命を守るための貯金箱

河津町立河津中学校２年　　酒井　聖夜

「税金」と聞くと、なんとなく大人が払うお金というイメージがあって、自分には関係ないことだと思っていました。でも、お正月、家族と団らんしながらニュースを見ていた時、石川県で大きな地震が起きたことを知りました。倒れてしまった家や寒い中で避難する人達の様子をテレビで見て、
（自分だったら、どうするだろう）と考えずにはいられませんでした。

その中で、避難所に送られた食料や物し、仮設住宅の建設などに税金が使われていると知りました。税金って、誰かの命や暮らしを支えているんだ、と初めて実感しました。その時私が思ったのは、税金はまるで「未来の命を守るための貯金箱」みたいだということです。普段は目に見えないけど、いざという時のために、みんなで少しずつお金を出し合って困っている人を助ける、その仕組みは、まさに貯金と同じです。違うのは、自分だけのためじゃなくて、みんなのために使われるという点です。学校も、病院も、消防も、道路も、いつも当たり前のように使っているけど、それを支えているのは税金です。例えば私達は授業料を払わずに学校に通えています。教科書も無料で配られ、校舎の修理などにも税金が使われています。このことを知って、今まで気づかずに受け取っていたものが、たくさんの人の支えの上に成り立っていたことに驚きました。

私はまだ中学生で、消費税以外に本格的に税金を納めるようになるのは、大人になって働き始めてからです。でも、こうして安心して暮らせているのは、税金という「貯金箱」があるおかげだと思います。そして、将来自分が働くようになったら、今度は自分がその貯金箱にお金を入れて、次の誰かを支える番が来ます。

税金はただ「取られる」ものではなく、「支え合うための貯金」です。使い道をよく考え、むだがないようにすることも大切ですが、それ以上に、命や暮らしを守るために使われていることを忘れないようにしたいです。

私はこれからも、税についてもっと学び、正しく知りたいです。そして、大人になって税金を納めるようになったとき、自分のお金が誰かの未来や命を守るために役立つと信じて、誇りをもって納めたいです。税金は、未来の命を守るための貯金箱。その思いを、これからも忘れずに心にしまっておこうと思います。

未来を支える一人として

大阪市立大宮中学校３年　　橋本　沙那

「未来ってどんなものだと思う？」そう聞かれたら、私は今年の春まで答えられなかったと思う。でも、四月に訪れた大阪・関西万博の会場で、その答えのヒントを見つけた。万博と聞いても最初はあまり関心がなかった私が、実際に会場を歩いてみて、社会のしくみや税金の役割まで考えるようになるとは思ってもみなかった。

まだ開催前で準備中の場所も多かったが、すでに未来の空気は感じられた。巨大なリング状の建物「リング」は、空を囲むように作られていて、まるで未来の都市に入り込んだようだった。なかでも特に驚いたのは、医療や環境に関する最新技術の展示だ。高齢者や障がいのある人を支えるロボットや、空気から電気をつくる装置など、教科書では見たことがない現実の未来がそこにあった。未来は遠い夢ではなく、いま目の前にあるのだと強く感じた。

しかし、そのわくわくと同時に、ある疑問が生まれた。

「このすごい施設や技術って誰が支えているんだろう」帰ってから調べてみると、国や自治体、企業、そして私たちが納める税金が使われていることを知った。私はこれまで、税金に興味を持ったことはなかった。けれど、あの未来的な光景の裏に、自分たちの社会が力を合わせてつくっている現実があると気づき、税金のイメージが大きく変わった。

税金は、「今の便利さ」だけでなく、「未来のため」にも使われている。道路や交通機関、公共施設など、万博に向けた準備の一つひとつが、地域の展開にもつながっている。万博が終わっても、それらは地域に残り、人々の暮らしを支え続ける。つまり、税金は、“未来を育てる投資”なのだ。使い方によっては、何十年先の人たちの役に立つものになる。そのことを私は、あの会場で肌で感じることができた。

私はまだ働いて税金を納める立場ではないと思っていた。けれど、普段買い物で払っている消費税も、立派な税金だと気づいた。つまり、私もすでに社会を支える一人なのだ。大阪・関西万博で見た未来の技術や施設の裏には、多くの人の努力と、私たちが納めた税金がある。そのことを知った私は、税金を「取られるもの」ではなく、「未来を育てる力」として考えるようになった。税金の使い道に関心を持つことは、自分の未来を大切にすることにつながっているのだと思う。そして、これからの社会をより良くするために、自分には何ができるかを考えるきっかけになった。大人になって本格的に税金を納めるようになった時、私はただ義務として払うのではなく、その先にある未来を想像しながら前向きに税と向き合っていきたい。

税金で行う快適なまちづくり

尾道市立向東中学校２年　　津森　絢芽

税金にはいろいろな種類がある。例えば、消費税、所得税、住民税、法人税、たばこ税、酒税などだ。私たち中学生が一番身近な関係にある税金は消費税だ。だが、最近は物価高が続いていて、ニュースでよく減税という言葉を目にする。正直、税金と聞いても消費税くらいしか払ったことがないし、よく分かっていないところだ。

私は去年宮島に行く機会があった。その時もフェリーの切符に税金がかかっていて、二百円だったのが三百円になり、以前より高くなっていた。その税金は「訪問税」という訪問者を対象に課税される税金だ。私は、今まではかかっていなかった訪問税は何のために必要なのか気になって調べてみた。

宮島は、世界遺産の厳島神社があり、コロナ禍からの回復と同時に多くの観光客が訪れ、島の対岸の市街地では交通渋滞などの日常生活にも支障が生じ始めている。こうしたオーバーツーリズムに備えたり、自治体の税収や行政サービスを行う財源の不足による運営の赤字などを防いだりするために「宮島訪問税」を導入した。オーバーツーリズムとは、特定観光地に観光客が過度に集中することで、地域住民の生活や環境に悪影響を及ぼす現象のことだ。この「宮島訪問税」は、負担されるのが百円ということもあり、観光客数の移行にも悪影響は出ていない。逆に、訪問者の受入環境の整備や、文化財や歴史的建造物の保存、自然環境に負荷のかからない観光などにも役立っている。安定的な財源を確保した上で、持続可能なまちづくりを進めることができていて、良い影響の方が大きいようだ。また和歌山県でも高野山で「入山税」を導入するため検討を進めている例もある。年間百五十万人の観光客に対応するためトイレや駐車場などの維持管理費をまかなうためだ。このように観光地運営の課題を解決するための「宮島訪問税」の取り組みが、他県の持続可能な観光運営のお手本になることも期待されている。

私たちの住んでいる尾道も例外ではなく、しまなみ海道を含めた観光地である。そのため、外国人観光客や自転車でサイクリングをする人たちも多くいる。そういったところで、自転車も車も通りやすいような道路の整備やトイレの設置、外国人でも読める看板の設置、景観を守るための取り組みなど、住む人や観光に来る人が心地良く快適に過ごせるために尾道にも観光税を導入するのも良いのではないかと考える。

この税金の作文を通して、知らなかったことをたくさん学ぶことができたし、税金のことを知っていく中で、税金に対する印象も大きく変わった。自分たちの暮らしにも身近であることが分かり、私たちが生活しやすいまちづくりのためにも必要不可欠であるといえる。

税がつなぐ、僕たちの生活

宇和島市立三間中学校３年　　二宮　悠輔

当たり前にあるようで、僕たちの生活に無くてはならない「税」。僕たち学生が払っている税といえば消費税ぐらいだが、様々な場面で僕たちの生活を支えている。例えば教育費。義務教育である、小・中学生の授業料や教科書の代金が税金によってまかなわれている。このため僕たちは学校で、不自由なく学習に取り組めるのだ。当たり前にあるようだが、その中には本当に多くの方の苦労が詰まっていると思う。だから僕たちは、感謝して教科書を使わなければいけない。

だが最近、テレビやインターネットなどでよく、「消費税を引き下げろ」や「消費税を廃止しろ」という声を聞く。僕も初めは、消費税が無くなれば楽だしいいのではないかと考えていた。しかし、税の大切さを知った今、本当に消費税を廃止してもいいのかと疑問が湧いた。その疑問を解消するため、インターネットで調べていると、面白いサイトを見つけた。それは、「世界一幸せな国フィンランドの仕組み」というサイトだった。最初にその記事を見たとき、僕はどういう意味なのか、全く理解できなかった。なぜならそこには、「フィンランドは税負担率が日本の倍以上だが五年連続で世界一幸福度が高い国」と書かれていたからだ。僕はどうしてだろうと不思議に思った。消費税が引き下げられることで、景気が良くなるのではないかと考えていたからだ。詳しく見てみると、フィンランドでは小学校から大学までの教育費が無料で、ペットボトルやビンをスーパーに返すとお金がもらえるという制度まであると分かった。この事実を知って僕は、日本とフィンランドでは、税に対する根本的な考え方が異なっているのではないかと考えた。フィンランドの人々は、税を払うことでよりよい社会、よりよい暮らしにしたいと考えている。一方日本人は、言われるがまま嫌々支払っている人もいる。この違いなのではないか。僕の好きな言葉の中に、「情けは人のためならず」というものがある。これは、人のために何かをすると、巡り巡って自分のもとへ返ってくるという意味の言葉だ。税はまさしくこれなのではないかと僕は思う。自分が税を納めることで、病気の人や子供、高齢者の方などを助けることができる。そして自分が困った時、誰かの支払った税によって助けてもらうことができる。そうやって見えないところで、人々はつながっている。税は僕たちをつなぐ架け橋なのだ。

このように税は無くてはならないものだと思うが、正直消費税の引き下げがいいことか悪いことか、僕には分からない。ただ、税によって僕たちの生活が成り立っていることは確かだ。だから、少しでも多くの人が幸せに暮らせることを、そして、それがいつか自分に返ってきてくれることを願って、これからも税を納めていきたい。

未来を守る税金

福岡市立高取中学校３年　　平林　芽依

私は、心臓に穴が開いていました。それが分かったのは、中学二年生の春のことです。今まで病気一つなく過ごしていたのに、学校の心電図検査で「異常あり」と診断され、すぐに病院へ検査に行きました。結果は「心房中隔欠損症」。お医者さんは「今後のために治療をしたほうが良い。」と真剣な眼差しで告げました。自分の体に異常があると知った瞬間、頭が真っ白になりました。怖くて仕方がなかったです。でももっと怖くて、不安でたまらなかったのが「お金」のことでした。手術や検査には大金がかかると知っていたからです。私のせいで家族に大きな負担をかけてしまうのではないか。四人姉弟の中で私だけ、治療費などで多くの負担を掛けてしまうことが、本当に申し訳なかったです。数ヵ月がたち、まだ不安な思いを抱えていた入院前日。最後の診察で、入院中お世話をしてくれるという看護師さんが、挨拶に来てくれました。「日本のみんなが、芽依さんを守ってくれるよ。」看護師さんは微笑んで、こんな言葉を掛けてくれました。どういう意味なのかは、その時は良く分かりませんでしたが、なんだか少し安心できたのを覚えています。そして、帰りに渡された入院の資料には、「患者が負担するのは食事代だけ」と書かれていました。私達が払う費用は、たったの数百円。本当に驚きました。本当に嬉しい、嬉しいけれど、なぜこんなことが可能なのかと不思議でした。帰宅してすぐに調べてみると、本来ならば、私が思っていた通り、治療費は数十万から数百万円かかるそうです。しかし日本では「公的医療保険」があるため、患者が払う額は基本三割に抑えられていました。「公的医療保険」とは国民全員が必ず何らかの医療保険に加入し、病気やけがをした時に医療費の一部を保険で負担する制度のことです。さらに、子どもは病気やけがをしやすいため、「子ども医療費助成」という制度があります。これは市区町村が子どもの医療費の自己負担を補助してくれる仕組みです。つまり、私が払うのは食事代だけで、検査や手術などの高額な医療費は、公的保護保険と子ども医療費助成、そしてそこに使われる「税金」によって賄われていたのです。全ての仕組みが理解できた瞬間、胸がじん、と温かくなり、涙が出そうになりました。看護師さんが言った通り、私はこんなにも守られているんだと。私は税金に、税金を納めている人々に、心からの感謝の気持ちを持って、手術を受けました。

私が住んでいる福岡市は、子ども医療費助成を受けることができる対象者が、令和五年度までは中学三年生以下の人だったのですが、令和六年度から十八歳以下の人までになったそうです。これも税金のおかげであり、また誰かの未来を守ることができます。税金は、私の未来を守ってくれたもの、安心を常に届けるための、温かい思いやりのお金なのだと、忘れないように生きていきたいです。

正しい税金の使い方

八代市立第一中学校３年　　中山　佳穂

最近私は、生徒会役員として市が行っている中学生議会に参加する機会がありました。参加する前は、議会ときくと難しくて大人の世界だと思っていたけれど、実際に自分が発言したり議員の方からの答弁を聞いたりして私たちの暮らしには税金が深く関わっていることを改めて感じました。中でも印象に残っているのは、議員の方々が慎重に、真剣に議会に参加されている姿です。

今、日本では物価の上昇が続いています。私自身も買い物に行ったとき物の値段が前に比べて高くなっていることや、内容量が減ったと感じたことがあります。ニュースなどでも物価高についての話題をたくさん目にしますが物価高が学校生活にも影響を与えているというニュースを見たとき驚きました。最近の給食では、前までは当たり前に出ていたメニューがなくなったり、品数が減るなどの問題があると知りました。物価高は様々なことに影響を与える大きな問題であるとその時感じました。

私が参加した市議会では、　給食に関する議論は出ませんでしたが、「新しい事業にかかる費用について」「新たに街灯を設置すること」など町の安全や暮らしに関わる議論が多くありました。私は、これらの事業を実行に移すのが難しい理由のなかに物価の上昇が関係しているのではないかと考えました。市民からの要望があったから実行に移そうと簡単に決まるのではなく、他の分野とのバランスや市の全体の財政を考えながら慎重に話し合いを重ねた結果やっと実行に移されるのだと議会に参加して気づくことができました。

私はこの経験を通して、税金に関する考え方が変わりました。学校で当たり前に使っている教科書やプリント、実験器具などの多くが税金で賄われています。税金がなければ今のように学ぶことも、安全な校舎で過ごすこともできないのかもしれません。しかし、物価が上昇する今、限られた税金の中で子供の教育や生活を守っていくことは難しい問題だと感じました。また、私たちも税金について自分には関係ないと思うのではなく、関心を持つことが大切です。今回市議会に参加したことで、私は初めて税金の使い道は何度も話し合いを重ねたうえで決まることを知りました。将来大人になって税金を納める立場になった時、その使い道にも目を向け無関心にならないようにしたいと思います。

税金は私たちの生活に深く関わっているものです。物価が上昇する今だからこそ、その大切なお金が本当に必要な場所に届くよう大人だけでなく子供も一緒に考えていくことが大切だと私は思います。

小さな気付き、大きな学び

宮古島市立北中学校３年　　下地　凛子

プルルルル。母の携帯がなった。家の中が急に静まり返り、いつもと違う空気が流れ込んできた。勉強に集中していた私は、ふと母の凍った表情に気づき、緊張が走った。

去年の夏、畑仕事をしていた私の祖母は、突然転倒し、膝を骨折してしまった。祖母は母に電話をかけ、助けを求めたのだ。母は不安そうな表情で祖母のところに駆けつけ、私は心配で落ち着かない時間を過ごした。空が暗くなった頃、母は帰ってきた。祖母が心配だった私は、真っ先に祖母にビデオ通話をすると、祖母は安心したようなやわらかい表情で「病院へ行って手当てをしてもらったよ。」と話してくれた。私は安心し、肩の力が抜けるのを感じた。祖母はその後、二ヶ月間のリハビリを続け、少しずつ回復していった。久しぶりに祖母に会った時、祖母は「税金のおかげで医療費も安くなって、二ヶ月間のリハビリも毎回の費用が千円以下だったよ。とても助かったな。」と笑って話してくれた。当時税金について深く考えたことがなかった私は、祖母の笑顔を見て、ただ安心していた。それから数日後、私はアメリカに住むいとこと電話をしていた。会話の中で、いとこの母が盲腸になったと聞き、その医療費は八百万円もかかり、全額自己負担だったという。私は言葉を失った。同時に、祖母は税金のおかげで医療費の負担が軽くなったのに対し、いとこの母は多額の医療費を全額自己負担しなければならなかったという違いに、大きな疑問を抱いた。

私は気になって調べることにした。すると、日本の医療費の四割が税金で補われていることを知った。一方で、アメリカでは医療費にあまり税金が使われていないという記事を見た。日本の医療に税金が使われているのは、健康や生活を守るためにある。しかし、アメリカは日本のように税金が全国民を守る制度はない。そのことを知った時、頭に祖母の顔が思い浮かんだ。あの安心した笑顔の裏側には、税金の助けがあったからこそ生まれたものだと思った。そして私は、日本の税金制度は偉大で素晴らしいということに気付き、誇りに思った。

税金について考えている時、ふと国語科の先生が話してくれた「日本三大義務」のことを思い出した。私たちが今、教育を受けることができているのは、税金のおかげだ。その税金は働く人が納めた大切なお金。人は税を納めるために働き、納められた税金は、将来働く子どもたちの教育のために使われる。先生は、それを「バトンリレーのような仕組みだ」と教えてくれた。この話を聞いた時、私は今教育を受けられていることに心から感謝し、一生懸命勉強に励み続けようと思った。そして将来は働いて税金を納め、今度は私が誰かを支える側になりたい。だから私は、今日も勉強する。それは税金で支えられた未来を、今度は私が支えるために。

税金で守られている私たち

旭川市立神居東中学校２年　　佐久間　安里

目が覚めたら病院にいた。泣きながら注射を打たれ、右手には点滴がつながれている。これが私の人生の中で一番古い記憶。四歳のときに幼稚園で倒れて救急車で運ばれたときのことだ。これが三度目だった。二歳のときは入浴中、三歳のときは家で姉と遊んでいるときに突然倒れ、救急車で運ばれたらしい。最初はなぜ倒れたのか原因不明だったが、病院で検査を重ねていくうちに、熱性けいれんだということがわかった。多くの場合は高熱がでてからけいれんをおこすが、私の場合は前ぶれなくけいれんをおこし、その後徐々に熱が上がってくるタイプだったらしい。退院してからも通院したり、いざというときの薬を処方してもらっていたが、それ以来救急車のお世話になることなく、今も元気に過ごしている。

中学一年生のある日、体調不良で病院へ行き、会計時にお金がかからないことを不思議に思い調べると、子ども医療費助成という制度があり、その財源は税金だということがわかった。そして、私を三度も救ってくれた救急車や、倒れた原因究明のために沢山の検査をしてくれた病院の治療費も税金によってまかなわれていた。税金という言葉はよく耳にするが、あまり身近に感じていなかった。しかし、この受診をきっかけに税金について深く知りたいと思うようになった。

私たちは医療、教育、公共施設、警察、年金、災害対策や復旧など税金によって安心や安全、学びを得ている。だが、もしも日本から税金がなくなるとどうなるのだろうか。私がお世話になった救急車を呼ぶことにお金がかかったり、病院は全額自己負担になってしまったり、私たちに無償で配布されている教科書もお金がかかり、貧富の差が大きな壁になり、医療や教育を受けることができる人が偏ってしまう。さらに道路が整備されなかったり、公共施設が修繕されなくなったり、警察を呼ぶのにもお金がかかり、犯罪が増え、治安が悪くなり、安全がおびやかされてしまうかもしれない。その結果、多くの人が過ごしにくい社会になってしまうと思う。政治に関するニュースで「税金をなくせ」という声を聞いたことがあるが、本当にそれでいいのだろうか。私は、税金によって守られているこの社会でこれからも暮らしていきたい。

最後に救急車のお世話になってから十年の月日が流れたが、今でも救急車や当時お世話になった病院を見るたびに、助けてくれてありがとうと感謝の気持ちで胸がいっぱいになる。今はまだ中学生なのでできることは多くはないかもしれないが、将来納税の義務をしっかりと果たし、税金によって私たちが受けている恩恵を未来の子どもたちにつなげていきたい。

学ぼう税、払おう税

会津若松市立第二中学校３年　　川俣　幹裕

前年度の会津の冬は例年にも増した大雪になりました。私も両親とともに毎日のように朝も夜も雪かきをしていました。市内はどこもそうで、除雪車がなかなか来ないのです。やっと除雪車が来た時、母は手を上げて、

「やった、やっときた。待ちくたびれた。」

と声をもらしていました。僕も今年ほど除雪車に感謝したことはありません。

ではこの除雪車の費用はどこから出ているのでしょう。もちろん税金からです。そこで僕はインターネットで除雪にかかる費用について調べてみました。会津若松市のホームページによると、二〇二四年度の除雪費用は約十二億円でした。しかし、当初の予算額は四億五千万円だったようです。つまり、雪が多すぎて当初の見積額の約三倍の税金が除雪に使われたということです。今年度もまた大雪が降ってしまったら、僕たちの冬の暮らしはどうなってしまうのでしょう。ただ我慢と忍耐で過ごすとはいきません。しかし、除雪だけで十二億円というのは莫大な予算です。会津若松市全体の予算が圧迫されてしまいます。これは、他の自治体にも同じことが言えます。

そこで僕は、これからの冬もよりよい暮らしをするために、税金の使い方について市民が関心を持つこと、そして税収を得る方法を考えること、この二つが重要と考えました。

一年生の時、僕は税の作文を書くために、税について様々なことを調べました。消費税や所得税などの一般的な税の他にも、酒税やたばこ税、ゴルフ場利用税、入湯税、宿泊税など楽しみなどに課税されるものもありました。そこから僕は、税収を上げるためには、現代の楽しみ方に合った税を課すことがいいのではないかと考えました。例えば、徳川綱吉の頃に出された犬税を改良してペット税としたり、僕たちが毎日のように使用しているスマートフォン、タブレット税などがあったりしてもいいと思います。私の父はカラオケに行くので、少額であればカラオケ税があってもいいかもと言っていました。また、以前市のごみ収集所の方が「資源ごみの中で、ペットボトルだけは売れて市の税収になる。」と言っていたのを思い出しました。ですから、様々なリサイクル業者に負けないように市も回収率を上げられるといいとも思いました。

しかし現状は物価高が進み、税金を払うことに対して後ろ向きになりがちです。だからこそより一層僕たちは、一市民として国や自治体などの議論を注視せねばなりません。

僕は、数年後には社会人です。成人として、納税の義務を果たさなければいけません。その自覚ある成人となるために、学業など、できることをしっかり行うこと。国会や市議会の議論に興味を持つこと。家族や友人と税に関する話題を共有することなど、今できることをやりたいと思います。そして、

「みんな、税をちゃんと学ぼうぜい、そして税をちゃんと払おうぜい。」

平和を引き継ぐために

学校法人清真学園　清真学園中学校３年　　和田　ひなの

私は戦後八十年になった今年の夏休みに、予科練平和記念館という場所に初めて行ってみて、実際に見たり聞いたりして強く心に残ったことがある。そこには、特攻隊員が家族にあてて書いた手紙、戦時中に使われていた食器や生活道具、当時の映画や写真など、教科書で学んできたものが実際に展示物として数多く並んでいた。特に、若い兵士が両親に感謝の気持ちを書き残した手紙を読んだときは、胸が熱くなった。彼らは私とそう年の変わらない年齢でありながら自分の未来をあきらめ、家族を思いながら戦地に向かわなければならなかったのだ。さらに、最後の部屋で流されていた「実際に戦闘機を操縦していた人の気持ちを表す映像」は忘れられない。戦争に行かなければならなかった若者たちの思いや、残された家族の悲しみを考えると、胸が締めつけられるような気持ちになった。

今まで私は、「戦争は恐ろしいもの」と頭では理解していたが、実際に資料を見たり、その場の空気を感じたりすることで、想像以上に戦争の恐ろしさを実感することができた。そして、そのような学びの場があるのは、税金によって記念館が建てられ、運営されているからだと知り、改めて税金の大切さを感じた。もし税金がなければ、私たちはこのように過去を学び、未来へ平和を語り継ぐことも難しいと思う。

税金は、平和記念館のように歴史を伝えるために使われているだけではない。私たちが毎日通っている学校の建物も、みんな税金で支えられている。道路や橋が安全に整備されていること、病気や怪我したときに病院で治療を受けられること、そして地震や台風などの災害が起きたときにすぐに復旧が進められることも、税金があるからこそ可能なのだ。さらに、子どもやお年寄りが安心して生活できるようにする福祉、自然環境を守るための取り組み、スポーツや文化を楽しめる施設づくり、電車やバスといった公共交通の整備など、幅広い分野で税金は私たちの生活を支えている。最近では科学研究や新しい技術の開発、未来のエネルギーを考える取り組みにも税金が使われていると知り、驚いた。税金は過去を学ぶためだけでなく、これからの社会をよりよくするための投資でもあるのだ。

私は今回の体験を通して、税金は「みんなで出し合って、みんなで安心して暮らせる社会を作るためのお金」だと実感した。だからこそ、集められた税金を必要なところにきちんと使っていくことが大切だと思う。私も大人になったら、しっかりと税金を納めるだけでなく、その使い道にも関心をもちたい。そして、未来の人たちが平和で安全に暮らせるように、税金を通して社会に貢献できる大人になりたいと思う。戦争を知らない私たちだからこそ、税金を通して平和を守り、次の世代に安心できる社会を引き継いでいきたいと強く感じた。

「私」＋「税」＝「未来」

横浜市立あざみ野中学校３年　　岡﨑　智子

小学生の時に、「はるか昔から現在まで、ずっと残り続けているものを調べよう」という課題が出た。案外見つからず、長い間考えてみてもなかなか思いつかない。黒板に書かれた皆の解答もわずかだ。そんな中、ひときわ目立っていた解答が『税』だった。税とは形を変えつつ、千年以上の時を経てつながっているものなのだと知り、とても驚いたことを、先日の歴史の授業で久々に思い出した。

今の世の中には税にまつわる様々な意見がある。その中には批判的なものも、もちろんある。批判的なものの方が多いと言った方が正確かもしれない。しかも一口に税といっても、非常に多くの種類がある。最も身近な税は、やはり消費税だろう。調べてみて実はその他にも、国税の「森林環境税」、神奈川県の「水源環境保全税」、そして私が住む横浜市の「横浜みどり税」等があると知った。そのため、横浜市は特に税金が多い都市と思われているらしい。あまり税を意識したことがなかったからこそ、衝撃を受け、なぜこんなに税を納めなくてはならないのか、疑問に思った。

さらに調べていくと、神奈川県の歳出総額のうち、約二十％も教育費が占めていると知った。その他にも、約十七％が福祉や子育てのために、約十％が健康を守るために、さらに約十％が安全な生活を守るために、約六％が道路の整備やまちづくりのために使われていると知った。税は私たちの生活を支えている、とよく言われる。頭では理解していたつもりだったが、私たちが納めた税が巡り巡って私たちのために使われる、という循環（サイクル）の重要性を改めて見せつけられた気がした。

私たちには、納税の「義務」がある。しかし、その裏には、私たちが安心で安全な生活を送るという「権利」があるのだ。大人になったら、もっともっと税を意識する時があるだろう。そうした時に、「私のお金から税を納めるのは嫌だ」と考えるのではなく、「この税で、私たちはどういうメリットを得られるだろう」と「権利」にも目を向けることで、自然と自分が社会に生きる意義や働くことの大切さが理解できるようになり、税に夢や希望を託せるようになるのだと思う。

そして、もう一つ大切なことは、私たち自身の社会において困っているところ、改善したいところを積極的に国等に発信していくことだろう。今は選挙のみならず、議論への参加や議会の傍聴等、政治にふれる多くの機会が私たちに門戸を開いて待っている。今こそ、世論に興味をもち、そうした機会をつかみ、政治参加への一歩をふみ出し、税についてもっと考えていくべきなのだ。

私たちが税を納めることで社会を支え、税が様々な公共サービスを提供することで私たちを支える。大人になったらそう考えて積極的に政治に参加して、税を納めたい。そして税のあり方、私のあり方を考え続けたい。

支え合いの社会

坂井市立丸岡南中学校３年　　鈴木　啓友

僕には、先天性の心臓病を持つ妹がいます。妹は、生まれたときから心臓に問題があり、これまで何度も大きな手術を受けました。小さいころ、妹はよく入院していました。そのたびに、両親は病院に付き添い、僕たち家族の生活は大きな影響を受けました。僕はその度に妹を心配し、何もできない自分に対してもどかしさを感じていました。しかし、時間が経って、妹が元気の過ごせるようになった理由の一つに、税金が関わっていたことに気付きました。

妹の治療にかかる医療費や入院費は、家族にとって大きな負担となりましたが、日本の医療制度には、税金で支えられた「国民皆保険制度」があり、このおかげで妹は安心して治療を受けることができました。特に、妹が小さいころに何度も手術を受ける必要があったとき、その手術費のほとんどは税金によって軽減され、家族は非常に助かったそうです。もし、この制度がなければ、高額な医療費を支払うことができず、妹は十分な治療を受けることができなかったかもしれません。

さらに、僕が中学校でバドミントン部に所属していることも、税金のおかげで成り立っている部分があることが分かりました。部活の練習場所には、学校の体育館を使っています。その体育館や設備、さらに指導してくださる先生方の給与も税金でまかなわれています。税金があるからこそ、僕たちは練習をする場所を確保し、部活動を続けることができるのです。バドミントンを始めてから、仲間と一緒に練習し、試合で勝つことを目指して努力することが楽しくなりました。学校の体育館で心置きなく練習できることが、当たり前だと思っていましたが、それは実は税金が支えてくれているおかげだと気付きました。

公共の施設があるおかげで、安心して学校生活を送ることができ、毎日自分の学びやスポーツに集中できる環境が整っていることが分かりました。

僕はこれまで税金について深く考えることはほとんどありませんでしたが、妹の治療のことや、バドミントン部での活動を通じて、「税金は僕たちを支えているものなんだ」と実感するようになりました。税金というと、何となく「お金を取られる」といったネガティブな印象を持ってしまいますが、実際には僕たちの生活を支えるために必要不可欠な存在だということが分かりました。

将来、僕も大人になったときに税金を納める立場になります。そのときには、納めた税金がどのように社会を支え、未来を作るために使われているのかを理解し、責任をもって納税していきたいと思います。

税金の恩恵

西尾市立幡豆中学校３年　　鈴木　莉子

私たち中学生が「税金」という言葉を聞いて思い浮かべるのは消費税だと思う。一番身近であり、物や経験を購入する全ての人が公平に支払わなければならない税金だ。店頭での価格表示が税込み価格となったことで、分かりやすくなった反面、金額が高く感じられて購入を躊躇することが多くなった。現代社会において何も購入せずに生活することは困難であり、生活に直結するため消費税の増・減税はしばしばニュースにも取り上げられている。消費者としては品物を安く購入できることがメリットとなりそうだが、国民の生活を守るための「増税」、国民の生活を守るための「減税」と真逆のことがメディアを通じて訴えかけられている。どちらの意見ももっともらしく言われているが、税金がどのように使われ、私たちがどれだけ「税金の恩恵」を受けているかを考えなければならないと思う。

私は三歳から中学一年生まで定期的に通院していたため、「税金の恩恵」を受けたと実感している。幸いにも手術など大きな処置は経験しなかったが、受診を終えて支払いをせずに帰宅できることに対し、幼いながらも安心や感謝を感じていた。子どもの医療費助成制度について調べてみると、財源の多くが税金であり、自治体によって対象年齢は異なるものの、子どもの健康を守り、経済的な理由による未受診を防ぐことを目的とされているとあった。この制度によって私たちは安心して医療を受けることができ、たくさんの命が救われている。病院では酸素投与や点滴治療をしている多くの子に出会ったが、税金により誰もが平等に医療を受けられる制度があり、全国で運用されていることに改めて感謝の気持ちがわいた。

税金について調べていくと、義務教育課程の私は様々な「税金の恩恵」を受けていることを知った。整備された道路を通って学校へ行き、配布された教科書やタブレットを使い、夏にはエアコンの効いた教室で授業を受けて水の張ったプールで泳いでいる。私の学校生活は、多くの税金によって支えられているのだ。税金の使い道は多岐に渡り、支援を必要としている分野は多い。その中でも子どもや教育に税金が使われている意味や重要性を正しく理解することが、私たち中学生ができる社会参加の一歩ではないかと考えた。子どもや教育に税金が使われるのは、今後の日本を担っていく世代が安心・安全に生活できるよう環境を整え、未来の日本を正しく維持・発展していくための投資だと思えた。日本には納税の義務があり、数年後には私も納税者となる。今後も税金の仕組みや国の政策に関心を持ち、自分は社会に参加していると感じられる大人を目指していきたい。そして、納税による人々の支え合いによって社会が安定していることをを理解し、次の社会を担う世代に向けて「税金の恩恵」の連鎖を繋げていきたいと思った。

消費税は下がる？

神戸市立垂水中学校３年　梶村　日菜子

「消費税を下げる。」

今回の参議院選挙でよく聞いたフレーズだ。参議院選挙の各政党の公約をきいて、ほとんどの政党が消費税の引き下げや廃止を主張していた。消費税は数ある税の中でも国民の生活に直結する税金だからだ。消費税の使用用途は何なのか。消費税を下げるメリットやデメリットは何なのか。そもそも消費税を下げても財政に問題はないのだろうか。

消費税はもともとオイル・ショックの影響で、日本の経済状況が悪くなり、厳しい財政事情を改善するため、所得・消費・資産等にバランスのとれた税体系を構築するために導入された。

私は消費税を払うことに抵抗がなく、それが普通で当たり前のことだ。ずっと昔からあるものだと思っていた。だが、私の母が子どもの時代には消費税がなかったと聞き驚いた。百円の物が百円で買えていた昔を羨ましく感じた。平成元年に導入された消費税はその後三度改定されているが、日本は他国と比べると消費税率が低いほうだ。平均以下である。だが、消費税が高い国はその高い消費税の代わりに医療費や介護費、教育費の無料などと日本と比べ社会保障が充実しているようだ。私は消費税が高くても、安心して暮らせるよう社会保障が充実していれば良いのではないかと思った。

財務省の発表によると消費税の軽減税率含め一律五％にすると十五兆円規模の減収になるそうだ。十五兆円という金額は私には想像すらつかないものであるが、今、日本は高齢化社会だ。消費税を減らすと家計の負担が軽減されたり、景気の回復効果などのメリットもあるだろう。だが、一時的に消費税を廃止しても、また日本の経済が悪化したときに、一度引き下げたものを上げるとなると、さらに景気や生活に負担がかかるのではないか。現在、最も安定した財源の一つである消費税を引き下げることよりも今後の社会生活を考えたい。これから日本はどんどん高齢化社会が加速していくだろう。私が大人になってからも医療や介護などの社会保障が持続することが重要だ。そのため、私は消費税の維持が必要だと考える。

今回、この税の作文を通して考えたことは二つだ。

一つは税について調べたことを生かして、十八歳で有権者になったとき、どの政党が税についてどんな対応をするのかに注目して政党を選ぶのか決めるようにしたいということだ。

もう一つは、消費税は国民が平等に払う税金だ。税の中でも公平性が高い。そのため、税金の使い方にも、私たち国民が納得するような公平性を求めていきたいということだ。

これからも税について考え続け、私も国民の一人として、よりよい社会が持続するようにしていきたい。

税金は次世代への架け橋

下関市立川中中学校１年　小原 悠人

僕は六年生のときに学校で租税教室を受けた。授業を受ける前までは、税金は働く大人たちが支払うもので、子供には関わりがないと思っていた。しかし、税金は私たちの暮らしと深く関わっており公民館や役所、図書館などの公共施設が、税金で整備・管理されていることを学んだ。

その後、僕は税について興味を持ち考えるようになった。租税教室後「税に関する絵はがきコンクール」に参加した。僕は、税金が使われている学校や道路、地域安全のための警察や消防、街灯、ダム……。すると、当たり前に目に映るまちの風景ができていた。あらためて、普段何気なく利用している道路や公園などは、私たち一人ひとりが支払う税金によって、いつまでも安心して利用できるのだと僕は思った。

最近はニュースでも「物価が上がって生活が苦しい」という言葉を聞く。食べ物や光熱費が前よりも高くなっていると感じる人も多いのではと思う。そうしたことからだろうか「税金なんていらない。」「消費税を無くしてほしい。」という大人の声も聞く。確かに毎日の生活が大変だろうなかで、さらにお金を払うことは、つらいことだと思う。しかし、私たちの周りをよく見ると税金があるからこそ成り立っている社会、今がある。

例えば、僕たちが通っている学校や道路、緊急のケガや病気を起こしたときに乗る救急車。この例三つでも、とうてい個人では、まかないきれない金額になる。税金という素晴らしい仕組みがあるからこそ、まかないきれているのだ。

もし、「税金なんていらない。」という声を、子供たちが「税金はただ取られるもの」と思い込んでいくとどうだろうか。その子供たちは、税金の大切さを知らずに育っていってしまう。そして、納税意識が社会全体で低くなり、税収が減り行政支援が受けられなくなってしまうような社会の悪循環が起きてしまう。

税金への理解不足は、社会そのものを弱らせてしまう。だからこそ「税金はみんなで支えあうためのもの」ということを、まず自分たちが、しっかりと理解し、伝えていくことが大切だと思う。

税金は、私たちの暮らしを支え、未来を築く大切な役割を果たしており、行政支援は、税金によって維持され、一人ひとりの安心と安全をつくっている。

これからは、税金の大切さを僕たちが次の世代に伝えていく責任がある。僕は、小学校高学年からではなく、低年齢から税金と親しみを持てる機会を増やしていくことで納税への意識が高くなると思う。子供だけではなく様々な年代の人にも税金の大切さを伝え、どのようなものに税金を使えば良いか、国民全体で考えあうことが、持続可能な社会をつくる第一歩にもなり得るのではないだろうか。

歯医者で思ったこと

大洲市立長浜中学校２年　　徳山　慶介

僕は、最近歯医者に通っている。そして、あることに気付いた。「お金、払っていないな。」と。そこでふと疑問に思った。僕の歯医者代は、どうなっているのだろうと。そこで、歯医者代について、母に聞いてみた。すると、「全部税金だよ。つまり大洲市の皆さんが払ってくれているんだよ」とのことだった。僕は、医療費について調べずにはいられなくなった。

僕たち中学生の医療費は、七割は保険で賄われ、三割は、自己負担ということを知った。僕は、自己負担の三割分を払っていないことに、つい最近、気付いたのだ。では、税金で払われているとはどういうことなのか。また分からなくなってしまった。すると、母が、「病院に行った時に見せる青いカードの裏を見てごらん」と言った。そこには、「この証は、保険医療機関等で医療費の自己負担額に対する助成を受けるための資格証です」と書いてあり、発行者は、「大洲市」となっていた。つまり、僕の三割負担は、大洲市が負担、つまり税金が使われていることが分かった。このことは、僕が税金に目を向ける大きなきっかけとなった。僕は、他にも、どのような税があるか調べてみることにした。調べてみたところ、大洲市は地方税で成り立っているようだ。地方税には、住民税、固定資産税、自動車税などがある。これらは、大洲市に住む人や企業が払っていて、大洲市民の税金で医療費や教育費なども負担していただいている。いろいろ調べてみたら親だけでなく、大洲市のみんなに育てられているのだな、ありがたいなと思った。

もう一つ気になっている税がある。それは、消費税だ。消費税は、何かを買うと必ず払っている税金だ。母が子供の頃は、消費税は、なかったそうだ。調べてみると消費税は、年金、医療費、介護、少子化対策に使われていることが分かった。確かに今、子供は少なく、高齢者が多い。これらに関係する問題を以前から耳にしたことがあった。選挙などでは、消費税を廃止するという考えを持った人もいたようだが、僕は必要だと思う。消費税がなくなってしまうと、これからの医療費などの負担を誰がするのかと不安になる。確かに、お菓子を買うたびに消費税分、お小遣いが減る。少し暗い気持ちになりはするが、みんなのために、自分のために、使われると考えると、これからも払わなければと思う。

日常生活の中には、たくさんの税があることに気付けた。自分が納めた税が、正しく、みんながよりよい生活を送れるようにするために使ってほしい。僕が今できることは、税について正しい知識を身に付けたり、毎日元気に学校生活を送ったりすることだ。みんなの力を借りながら生活していることに感謝して、過ごしていきたいと思う。

いとことの出会いと税金

福岡市立筑紫丘中学校３年　日髙　章吾

昨年の夏休み、私に初めてのいとこができた。叔父夫婦のところにやってきた女の子、Mちゃんだ。もうすぐ二歳になるMちゃんは、歩くのが速く、ダンスが上手で、活発な子だ。私にとって付き合うのは本当に疲れるが、とてもかわいい、大切な存在だ。

Mちゃんは生まれてから十か月間、乳児院というところで育てられた。Mちゃんを産んでくれたお母さんは、事情があってMちゃんを自分の手で育てることができず、Mちゃんの幸せを思って、他の人に育ててもらう道を選んだ。乳児院では、担当の保育士さんが、Mちゃんのために愛情をかけて、おむつやミルク、お風呂などの世話をしてくれた。そのおかげでMちゃんはすくすくと成長していった。一方、叔父夫婦は、誕生と同時に赤ちゃんを亡くすという辛い経験を二回しながらも、また自分たちのもとに赤ちゃんが来てくれることを願い続けていた。そんな三人は、昨夏、児童相談所というところを通して奇跡的に出会い、親子となった。「仏様のおかげ。」「亡くなった赤ちゃんたちが導いてくれたご縁。」祖父母は幸せそうな三人の姿を見て、口をそろえて言う。私も、この出会いは運命だと思う。だから「もし税金がなかったら、私たちはMちゃんに出会えなかったかも。」と母が言い出したときは「え、どういうこと？」と思ってしまった。

こども家庭庁のホームページによると、日本には「社会的養護」という仕組みがあり、そこには多くの税金が使われている。社会的養護とは、保護者のいない子どもや保護者に育ててもらうことが難しい子どもを社会の責任で保護して育てることだ。乳児院や児童養護施設などの施設の整備、そこで働く職員さんへのお給料、家庭的な環境で養育をする里親さんたち、の支援も税金でまかなわれている。他にも、児童相談所という所では、困っている親の悩みを聴いたり、その後、親子にどうしてあげたらよいかを考えたりしている。これも税金で運営されている公的機関だ。

もし、この社会に乳児院や児童相談所がなかったら、Mちゃんはどうなっていたんだろう。十分にミルクをもらえなかったかもしれない。オムツもかえてもらえなかったかもしれない。一人ぼっちで寂しい思いをしていたかもしれない。何より、私は、Mちゃんに出会えていないだろう。そう思うと、社会的養護という仕組みを支えてくれている税金に対して、感謝の気持ちでいっぱいになる。

学校や公園、図書館、道路など目に見えるものだけではなく、困っている人に寄り添い、笑顔や安心をもたらすという、目に見えにくい仕事にも税金は使われているのだ。税金は、これからも人々を助け、幸せにするためのものであってほしい。そして、私もそんな社会の一員として、税を納める大人になっていきたいと思う。

彼の生き方から見えること

指宿市立北指宿中学校３年　櫻井　俐緒

ウルグアイのホセ・ムヒカ元大統領が今年五月に亡くなった。彼は世界一貧しい大統領として有名だ。私はそのニュースで彼の存在と大統領としての生き方を初めて知った。

私が特に心に残ったのは、「貧しい人とは、限りなく多くを欲しがる人だ。」という彼の言葉。ムヒカ元大統領の警備は最小限。給料の九十パーセント以上を貧困層支援や中小企業支援の団体へ寄付し田舎の農場で暮らす。大統領なのに、世間からすれば質素で貧しく見えてしまう。それが世界一貧しい大統領と呼ばれてしまう理由だろうが、彼は先ほどの言葉から聞くように、自分のことを貧しいとは思っておらず、何を欲しがることもなく、ただ政治とは国民のために働くこと、それが自分の幸せだと考える人だから語れる言葉のように聞こえる。もし私が総理大臣だったら同じことができるのだろうか。

これらのことを知って、私は日本の税金の使い道について考えるようになった。私たちが払う税金は、ちゃんと国民のために使われているのだろうか、もっと良くする方法はないのだろうかと。私達の使う教科書や給食費、医療費、ごみの収集など、とても大切に使われているものもある。実際、私も陸上練習中に転倒し骨折した時、何度も治療や通院したが医療費が税金から支払われ完治まで不安なく過ごせた。一方で、ニュースでは税金の無駄遣いという言葉を聞く。調べてみると、使われない公共施設、政務活動費の不正利用、豪華な観光旅行のような視察や研修などあるようだ。なぜこんなことが起こるのだろう。必要なものに使うのではなく、あるから使ってしまうようだ。きっと誰のための税金かを考えられていない部分がある。

ムヒカ元大統領は、税金を国民の汗と努力の結晶と言った。最も困っている人たちのためにあると。私たちの住む日本には同じように考え行動してくれる政治のリーダーがどれほどいるのだろう。どうせ何も変わらないと諦めかけている国民がどれだけいるのだろう。そして、私たちには何ができるだろう。

中学生の私には直接税金の使い道を決めることはできない。選挙に行くこともできない。しかし、子供だから何もできないわけではないと思っている。まず税金のことに関心を持つことだ。それが一番大切なこと。私たちが大人になった時、無関心が大人ばかりが増えていたら日本はどうなっている。

ムヒカ元大統領は、世界中多くの関心を集めることができた。彼は心に響く言葉をたくさん残して亡くなったが、その言葉を行動で示したことが多くの人の心に響いた。私もその一人であり、世界中の人に自分にできることを考えるきっかけを与えたはずだ。税金は、良いも悪いも私たちの未来に直結する問題。大切なのは皆が一歩前へ踏み出すことだ。

僕と海と、税金がした冒険

宮古島市立久松中学校３年　森本　和光

税金という言葉を聞くと、どうしても面倒で自分には関係ないものだと思ってしまう。ＳＮＳやニュース等で増税の話が出るたび、いやだなと感じるだけで、深く考えようとはしなかった。

しかし、今年の夏、地域の海岸でボランティアで参加した時、考えが少し変わった。砂浜に打ち上げられた異国の字が書かれたペットボトルやプラスチックの破片を拾いながら、沖縄の美しいサンゴ礁がこうしたゴミでどんどん傷ついている現状を知った。自治体の人に話を聞くと、海の環境を守るための費用は税金でまかなわれていることがわかった。道路や学校の整備だけでなく、自然や生き物を守るお金にも税が使われているのだと初めて理解した。

税金というのは、ただお金を取られるだけのものではなく、見えないところが僕たちの生活や未来の環境を支えてくれていることに驚いた。僕たちが普段何気なく使っている水道水や道路も、災害時の復旧も、環境保護の活動も、すべて税金が支えてくれていたのだ。

その日から、僕の税金に対するマイナスなイメージが少し変わった。もちろん、無駄遣いのニュースを見ると疑問に思うこともあるけれど、沖縄の宝である美しい海や、そこで働く人々のことを思い出すと、税金の意味が少し身近に感じられる。自分が将来働いて納める税金も、ただ消えていくお金ではなく、誰かや何かの役に立つものだと思えるようになった。

自分が払った税金が、この美しい沖縄の海や、道端の花や、公園の遊具を守るために使われていると思うと、不思議な安心感が胸に広がった。目に見えないものに価値を感じる経験は、これまであまりなかった。税金という言葉だけでは実感できなかったけれど、実際に自分の生活や自然を支えていると考えると、少し大人になれた気がした。

これからは、税金のことをただの義務や負担と考えるのではなく、自分や周りの人々、そして自然や社会を守るための大切な仕組みとして意識したい。将来自分が納める税金がどんなふうに使われているかを知り、少しでも関わる気持ちを持ちながら生活していきたいと思う。税金を通して、自分も社会の一部であることを感じ、これからの環境や生活を支える責任の一端を担っているのだと実感したい。

最後に、宮古島の青い海、砂浜に揺れる小さな貝殻を思い浮かべるたび、税金がこうした景色を守る力になっていることを忘れないようにしたい。目に見えなくても確かに存在する仕組みを知ることで、僕の世界は大きく広がった気がする。

いつもと変わらない毎日

苫小牧市立和光中学校３年　　水野　心優

私の家族は三人家族。私の妹は言葉を話すことはできないが、いつもニコニコしていてまわりを笑顔にすることが得意だ。そんないつも明るい妹は手術や検査のため入退院を繰り返している。その入院には母が付き添い、その間お仕事も休んでいる。なのになぜ私はいつもと変わりない生活を送っていけるのか入院の費用はどう払っているのか、疑問に思った私は母に聞いた。すると母は「税金」に助けられていると私に話した。

特に検査の費用に視点を向けて考えてみると、脳波の検査に約六万円と書いてあった。また、迷走神経埋め込み術をした時にかかる費用は百万円以上と書かれており、高額な費用がかかっているということを初めて知った。その中で全て調べたサイトに共通して書いていた言葉は「保険適用」という言葉だった。国のお金の動きについてあまり知らない私はその言葉が頭に残り調べ、考えてみた。

すると、「非課税」という言葉にたどりついた。調べてみると非課税世帯というものにあてはまる。本来納めるはずの所得税や住民税が免除される家庭のことである。この制度に助けられている家庭は日本の二十四パーセントを占めており、その内訳を細かく見ると七十五パーセントが六十五歳以上のお年寄りだということもわかった。その結果を見て、ポスターにもあるように非課税世帯を支える若年層の人数が年々減っていると改めて知った。年金、医療、子育て、色々な場面でたくさんの種類の税が生活に関わりがあると分かると、妹が健康に生活するため私自身の生活が変わらず送れること、全てに感謝の気持ちが生まれた。もし、高額費用の手術・検査が私の生活に関わるからできないとなっていたらと思うと不安や心配の気持ちが多くあったのではないかと思った。

私は、今の生活の中で物を買うのにかかる「消費税」、自分で商売し稼いだお金などにかかる「所得税」、法人の企業活動などによる「法人税」など税金はお金を払っているからとマイナスにとらえず、今家族が不自由なく生きているということを頭に入れ、自分が社会人になった時は、目の前の出費だけにとらわれず、広い視野で税金について考えようと思った。

今、私の妹は迷走神経刺激装置埋め込み術をしてから発作も減り、心配が大きく減った。妹は毎日家族だけではなく周りにいる人に笑顔の花を咲かせている。そんな楽しくて明るい生活を送れるのは多くの人によって支えられているものだと忘れてはいけないと思った。

私が大人になって税を納める時は自分だけではなく全ての人が笑顔の花を咲かせた生活ができるよう、しっかり税を納めようと思った。

「税で、生きる。」

会津若松市立大戸中学校３年　　鈴木　渚紗

「今日から家族と離れて生活することが決まりました。」と突然言われ、私は小学校三年生の時に児童養護施設に入ることになりました。児童養護施設とは、保護者のいない児童や、虐待されている児童など、家庭での養育が困難な子どもたちが、安定した生活環境で生活できるよう支援する施設です。私の生活している児童養護施設では、朝昼晩栄養の整った食事ができたり、衣類を購入することができたりします。毎月おこづかいをもらい、買い物に行くこともできます。学校に通うこともでき、安定した生活が保障されています。

ある日私は、このような生活がどこからのお金でできているのか気になり、調べてみました。すると、私たちの暮らしは「税金」によって支えられていることを知りました。私が当たり前だと思って過ごしていた日々は、誰かが一生懸命に働いて稼いだお金によって成り立っていたのです。このことを知って私は税金のありがたみに初めて気付きました。

私たち子どもが払う税といえば「消費税」くらいです。消費税が 10 パーセントに上がったとき私は「最悪だ」「なんで払わないといけないの」と思いました。しかし、税金について調べたことがきっかけで、私の考えは変わりました。大人は子どもの想像を超えるほど多くの税金を払う義務があります。自分よりも多くの税金を払っている人がいるのに、私は消費税が上がったくらいで文句を言ってはいけない、むしろ感謝していく必要があると感じました。私もいつかは消費税以外の多くの税金を払って生きていくことになります。そのとき、マイナスな気持ちで払うのではなく、自分の払った税金が誰かの毎日につながっていると思って、前向きに払っていきたいと思います。

「税金とは何か」この問いが、私に税の考え方を支えるきっかけを与えてくれました。税金を払うことは義務であり、当たり前であるがその税金は当たり前ではない日々を作っていると思います。税金は単なるお金の循環ではなく、人と人をつなぐ輪であると感じました。自分が誰かの払った税金で救われたように、大人になったとき自分が税金を払って誰かを救う立場になれることをほこりに思います。税金を払うことに前向きな世界になることを願いたいです。

私たちの未来を支える「税」

学校法人長聖 佐久長聖中学校３年　　細野　環

「今日から、僕も正式に障がい者だね。」そう言って、叔父が見せてくれたケースには、紺地に金色の文字で「身体障害者手帳」と書かれていた。私の手の中に収まるほどの大きさで、中に透明なポケットが幾つかついている。写真の中の真顔の叔父は、少し若い頃の父にそっくりだ。父が言葉を継いだ。

「これを提示すれば、電車やバスに半額で乗れるし、携帯電話の料金も割引になる。税金が免除され、叔父さんは生きていくための福祉サービスを、安心して受けることができるんだ。」

昨夏、叔父は一人暮らしの自宅で転倒して動けなくなっていたところを発見され、かろうじて一命を取りとめた。その後、地元の新潟での長期入院生活を経て、年明け早々、私の住む長野県の介護施設に転居して来た。入院中、骨髄に腫瘍が見つかり、認知機能の低下や歩行障害、内部障害なども重なって、叔父は「正式」に「障がい者」と認定された。

身体障害者手帳は、各都道府県知事が発行し、これを所持する人の日常生活や社会生活の経済的負担を軽減し、生活の質を向上させる支援サービスを提供してくれる。所得税や住民税の控除、医療費の助成、自立のための雇用支援や住宅支援、公共交通機関や映画館の割引サービスに至るまで、その内容は様々だ。しかし、これらの多様なサービスに「税金」が使われていることを、私は叔父の入院と施設入居を通じて、初めて知った。

私たち国民が納める税金には、所得税や消費税などの国税と、住民税や固定資産税などの地方税の二種類があり、叔父の医療介護費は国税から、障害者福祉は地方税からと、財源が異なる。戦後、日本国憲法が国民の義務と定めた納税の制度が、私たちが安心して暮らせる今の社会の基盤を作り、叔父の不自由で不安な毎日に生きる希望を届けている。

障がいは全ての人が経験するとは限らないけれど、年を取って思うように体が動かなくなることなら、誰にでも起こり得る。行政からの経済的支援は、そんな人への「あなたは、あなたのままで生きていていいんだよ」という応援メッセージだ。私たちの「税金」が、私たちが幸せに生きるために使われていて、だからこそ適正に大切に使わなければならない。このことは、大人はもちろん、私たち中学生にももっと周知されるべきだと思う。まずは、納めた税金の使い道に普段から関心を持ち、理解することから始めていきたい。

病気のせいで、叔父は時々、私が誰だか分からなくなる。でも大好きな映画の話なら、細かな場面までしっかり覚えていて、いつまでも話が尽きない。夏の暑さが落ち着いたら、叔父の車椅子を押して、一緒に映画を観に行く、それが私たちの約束だ。　私は学生割引、叔父は障害者割引を利用して。私たちのささやかな未来を支える土台にはいつも「税金」があることに感謝し、忘れずにいたい。

「図書館が教えてくれた税のかたち」

大田区立大森第四中学校３年　久木野　杏樹

私は本が大好きです。今は漫画が中心ですが、受験勉強の合間、息抜きに読んでリフレッシュしています。私が買う本の値段は、七百円から千円強。夏休みには十冊ほど新しい本を購入し、お小遣いはあっという間になくなってしまいました。そんな時は、私の強い味方「図書館」で、面白そうな本を借りては、楽しく読んでいます。

よく利用する池上図書館は、四年前に移転・リニューアルした施設で、池上駅直結の商業施設の中にあるため、アクセスも良く、頻繁に訪れています。真新しい椅子や机、居心地のよい読書スペースや自習室、予約本の自動受け取り機なども設置され、ますます使い勝手がよくなり、便利になりました。

私は、こんなにきれいで快適な場所を無料で使用できるのは、漠然と「公共の施設であるから」と思っていました。しかし、公共の施設でも、区民プールや体育館は利用料がかかったり、博物館や美術館、動物園では入場料をとられたりすることがあります。図書館だけ完全に無料なのはどうしてか、詳しく知りたいと思い、調べてみました。

図書館には、法律に基づく「無料の原則」があります。日本の公立図書館は、図書館法第十七条により、「入館料その他図書館資料の利用に対するいかなる対価をも徴収してはならない」と定められています。この法律は、国民が「知る権利」を保障し、教育の機会均等を促進するために設けられています。また、図書館は「知る自由」を保障する役割も担っており、これは基本的人権の一部とされています。「知る自由」とは、情報へのアクセス権を意味し、図書館はこの権利を守るために、資料を収集し提供することが求められているのです。

多くの図書館は公共施設であり、自治体が運営しています。本の購入はもちろん、施設の建設や維持、図書館で働く人の給料など、運営費用は主に税金からまかなわれており、利用者からの料金を徴収しないことで、すべての区民が平等に利用できる環境を提供しています。図書館が完全に無料で利用できるのは、この法律に基づく、「図書館無料の原則」によるものであり、国民の知る権利を保障し、情報の提供を通じて、人々の教育や文化の向上に寄与しているのです。

誰もが知識や情報を得ることのできる図書館は、「知的インフラ」と呼ばれるそうです。子供からお年寄りまで、多くの人が無料で利用できる図書館は、公共の施設の中でも、特別な存在に感じました。

これから大人になって働くようになったら、私も税金を納める立場になります。そのとき、誰かの学びや安心につながるような使われ方をしてほしいと願いながら、納税の意味や理由をしっかりと考えていきながら生活を送っていきたいです。

「私たちで作る防波堤」

千葉市立川戸中学校３年　　地頭園　志織

私たちの住んでいる日本は、地震や台風、豪雨などの自然災害がとても多い国だ。毎年のようにどこかで大きな被害が起こり、多くの人が避難生活を強いられている。ニュースでその様子を見るたびに、「もし自分の住む地域で同じことが起きたらどうなるだろう」と考える。災害は、いつ、どこで、誰の身にふりかかるか分からない。だからこそ、私たち一人一人に直接関係のある問題だと思う。

被害を受けた地域には、すぐに仮設住宅が建てられ、道路や電気、水道も復旧が進む。その背景にあるのは私たちが納める税金だ。例えば、二〇一一年の東日本大震災では復興費用が約十兆円に上ったといわれる。また、それに加えて東北三県に復興のために使われる「復興特別所得税」は、年間約四千億円が集められ、被災地の復興に充てられている。この税は二〇三七年まで続く予定で、長い時間をかけて被災地を支える仕組みとなっている。もし税金がなければ、これほど大規模な復興を実現することは難しかっただろう。

私は、税金を「私たちで作る防波堤」だと考える。防波堤は、一人の力で作ることができない。多くの人が少しずつ石や土を積み上げることで、初めて大きな壁になる。税金もそれと同じで、一人一人が少しずつ納めることで、社会全体を守る大きな力になる。普段は意識しないけれど、災害や困難が起きたときにこそ、その力を発揮して私たちを守ってくれる防波堤となるのだ。

さらに、税金の支えは自分の町だけにとどまらない。遠く離れた地域で起きた災害に対しても全国から集められた税金が使われる。例えば、二〇二〇年に九州で起きた豪雨では被害額が約六千億円にのぼり、二〇一八年の西日本豪雨では被害総額が一兆九百億に達した。こうした大きな被害に対しても、税金が投入されて人々の生活が支えられてきた。私はそのニュースを見て、会ったことのない人たち同士が税金という「防波堤」を作る仲間になっているのだと実感した。

税金というと、「ただお金を取られている」というようなマイナスのイメージを持つ人もいるかもしれない。私自身も、以前はそう思っていた。しかし、災害のニュースを見て、沢山の人の生活が税金によって守られていることを知り、考えが変わった。税金は決して無駄に取られているお金ではない。社会を支えるのに必要な「私たちで作る防波堤」なのだ。

私も、将来税金を納めることになる。自分が困ったときに、誰かが納めた税金で守られるとしたらそのありがたみを強く感じるだろう。だからこそ、自分も誰かのために防波堤を作る側になりたいと思う。税金を納めることは、社会の一員として大切な責任であり、誇りでもあるのだ。税金はこれからも必要とされ続けるだろう。税金とどう向き合い、社会を守っていくか考えていきたいと思う。

子どもの幸せのために

高岡市立芳野中学校２年　　九鬼　舞

「まいちゃん、血液検査の結果があまり良くないから、もう一回検査しよっか」
これは、私が小学三年生のときに主治医に言われた言葉だ。そのときの私は心配よりも「また血を採るのいやだな」という気持ちの方が大きかった。たくさんの検査をしたが、原因は分からず、「また半年後ね」と約束をして診察を終え、病院の受付へ向かった。

受付で貰ったものは明細書だけで、母はお金を払っていなかった。疑問に思った私は母に、「お金払わなくていいの？」と聞いた。母は高岡市が子どもの医療費を払ってくれているからお金を払わなくて良いということを教えてくれた。

私の住む高岡市では、十八歳の成人を迎えるまで医療費を助成してくれる制度がある。同じ富山県内でも、十五歳未満までという市町村があるそうだ。また他県では、就学前までを助成の対象しているところが多いらしい。私は当たり前に受けていた治療や通院にかかる費用が、全て税金でまかなわれていたことに驚いた。高岡市には、約二万人の子どもが生活している。その医療費は年間を通すと相当な額になるのではないだろうか。

大人たちが必死に働いて得たお金から集められた税金。それによって元気な私が無料で検査をしてもらっていると考えると、少し申し訳ない気持ちになる。しかし、そのおかげで親は安心して子どもを病院へ連れていくことができる。私自身、早期発見による治療を受けており、安心して普通の生活を送ることができている。もしあのとき、病院で検査をしていなかったら、適切な治療を受けられなかったかもしれない。もし医療費の補助がなかったら、親に金銭面の大きな負担をかけていたかもしれない。きっと、同じように感じている人はたくさんいるのだと思う。税金が、私たち子どもの健やかな成長を助けてくれており、子育てをする親の負担を軽くしてくれている。そして、未来への希望を持たせてくれている。

現在も私の通院は続いている。誰かが納めてくれた税で、発見することのできた一つの病気。治療を続けていけるのも、税金のおかげだ。

私には今、一つの夢がある。それは医療従事者になることだ。私のように病気のことで不安に思っている人を助けたい。もっともっと安心して医療を受けられる環境をつくりたい。このように夢を持つことができたのも税金のおかげだ。

いつかその夢が実現したとき、私は未来ある子どもたちのために税金を納めたい。支えられる側から支える側となり、胸を張ってこれからの人生を歩んでいきたい。

知らないうちに助け合っている

あま市立甚目寺中学校３年　　横井　李江

「税金」という言葉を、よくニュースや新聞で見聞きするだけで、実際どこでどのように使われているのか、知らない人が多いのではないでしょうか。私も数年前まで、「税金ってなんのために払っているのだろう」と疑問に思っていましたが、今ではすごくありがたいものだと思っています。そう思うようになったきっかけは、自転車で怪我をしたことでした。

ある日、自転車に乗っていたら、バランスを崩して、頭や膝など数ヵ所を打って大怪我をしました。頭を打ったせいか意識が朦朧とし、気づけば救急車に運ばれていました。無事病院に着き、意識も回復していたため、看護師さんに「少し待っていてください」と言われて、お医者が来るのを待っていました。待っている間、意識が完全に戻っていたといえ、私の身体は大丈夫なんだろうかと不安でとても怖かったです。レントゲンや診察をして、身体が正常なことを確認し、待合室の受付で怪我の保護をするために使うガーゼなどをもらっていたとき、隣で受付をしていた大人に比べて、お母さんがほとんどお金を払っていないことに気がつきました。不思議に思って、お母さんに「どうして私は大怪我をして、お医者さんに診てもらったのに、払うお金が少ないの？」と聞きました。そしたらお母さんは、「子供も医療費とかは、国や自治体が負担してくれているんだよ。でも子供だけじゃなくて、大人も保険で税金が使われている場合があるよ。」と教えてくれました。それを聞いて、私はハッとしました。もしかしたら、待合室で隣に座っていた人が納めた税金のおかげで、私はガーゼをもらえたのかもしれない。もしかしたら、病室にいた小さい子の手術費用の中に、私が過去に払った消費税が入っているかもしれない。こうして知らないうちに、私たちはお互い助け合っているのかもしれない。そう思ったら、さっきまで不安で、とても怖かったはずの心が、温かくなったような気がしました。

調べてみると、医療費だけでなく、私たちが普段何気なく使っている教科書、お年寄りの年金や介護サービス。子供を保育園に預けるとき、毎月かかる費用の多くが子育て支援。警察や消防、救急車、災害対策など、まちの安心・安全を守ってくれている仕組み。老者男女が使う、道路や信号機などのインフラ整備。あらゆるところで、日常的に税金が深く関わり、役立っていることを知りました。聞いたことあるだけで、なんとなく払っていた税金を、「未来を繋ぐ、人と人との大切な関わり」と思うようになりました。

これからは、税金を「なんとなく払う」ではなく、「誰かと助け合っている」と思いながら、私と同じように不安をかかえている誰かの助けになり、少しでもその人の心を温かくできたらいいなと思います。

税金がつなぐ命と未来

岩国市立周東中学校２年　　相本　陽喜

僕はこれまで、税金について深く考えたことがなかった。ニュースで税金が上がる、減税されると聞くことはあっても、それが自分の生活にどう関係しているのか実感がなく、ただお金が取られるものだという印象くらいしかなかった。

ただその考えが、曾祖母の老人ホーム入所で少し変わってきた。そして税金を身近に感じるようになったのは、母がその老人ホームで管理栄養士として働いているという事実があるからだ。

曾祖母は数年前老人ホームで生活していた。毎日落ち着いた環境の中で過ごし、楽しみだったのは食事の時間だったと思う。ただ曾祖母は少食だった。そんな曾祖母の食事について、母から「今日は全部食べた」「甘いものを食べて嬉しそうだった」などと話を聞いて僕はほっとした気持ちになった。食べることは生きることの基本だと思う。そして、安心して美味しく食べられるということは、人生の質を左右する大事な要素だとも思う。

その曾祖母の食事を支えているのが僕の母だ。母は老人ホームの管理栄養士として、高齢者一人ひとりの健康状態や噛む力に合わせて提供内容を考えたり、調理スタッフに指示を出したりしている。母はよく「おばあちゃんが完食してくれると嬉しい」と言っていた。その言葉には、ただの仕事以上の思いが込められていたように感じる。

このような老人ホームの運営は、介護保険制度によって支えられている。その介護保険制度は、国民が納める税金によって成り立っている。つまり、曾祖母が安心して暮らせていたのも、親が専門的な仕事をする環境が整っているのも、税金の支えがあってこそなのである。僕はこの事実を知り、税金が誰かの「いただきます」や「おいしかった」を支えているのだと実感した。

税金は学校、病院、消防、警察など僕たちの生活のあらゆる場所で使われている。しかし、それだけではなく、未来をつくる投資でもあると思う。曾祖母が支えられていたように、いつか僕や、これから生まれてくる子どもたちも、税金によって支えられる日が来るかもしれない。税金は今を守ると同時に、次の世代へつながっていく橋のようなものだと思う。

これから数年後には、僕も社会人として働き、税金を納める立場になってくる。そのときはただの義務としてではなく、誰かの暮らしや笑顔を支える一部になれると思いながら、誇りを持って税金を納めたいと思う。そして、税金が正しく、公平に使われるように、僕も関心を持ち続けたいと思う。

税金が繋ぐ国と国

三好市立三野中学校３年　　寺野　優輔

今年の十月、僕は地元の三好市との姉妹都市であるアメリカ・オレゴン州のダルズ市に親善団員として五日間、ホームステイすることになった。初めての海外、初めてのホームステイで楽しみと不安が入り混じっている。

そして先日、第一回目となる今回のホームステイについての説明会が行われた。僕の他にも親善団員としてホームステイをする中高生は合計で十五人程いた。最初に簡単な自己紹介をした後、アメリカまでの交通手段や時間、予定などの説明をしてもらったが、僕が一番驚いた説明があった。費用だ。普通は、交通費や食事代などにかかる金額を合わせると、一人あたり約四十万円から五十万円程の想像もできない金額となってしまう。しかし、このホームステイでは三好市とアメリカ・オレゴン州のダルズ市との姉妹都市交流の推進を図るものであるので、本来なら約四十万円から五十万円程もかかる費用が約十五万円程の自己負担となるのだ。あまりの金額の差に唖然とした。僕が払う金額は半額以下となってしまった。こんな財源が一体どこから出ているのかと不思議に思ったが、答えはすぐに分かった。税金だ。

僕にとって税金は払うものだった。お店に行くと消費税を取られるし、親は働けば働くほど所得税を払っていた。つまり、いつも税金を納めているだけだと思っていた。しかし、今回は違った。僕が直接的に三好市の税金によって支えられるのだと実感することができた。そして、僕以外の十五人程の分の費用も半額以上が三好市の税金によってまかなわれることとなった。

しかし、改めて考えてみればそうだ。僕は今回の金額補助以外にもたくさんの税金によって支えられている。教科書の無償配布や学校のタブレット、毎日通る通学路の道路整備など、僕の身辺なところでは多くの税金が使われ、日々の豊かな生活が実現しているということを知ることができた。

毎年のように人口が減少している三好市。その中で集めたとても大切な税金を姉妹都市とのさらなる良い関係を築くために、補助金として使ってくださる三好市には本当に感謝しかない。

税金が実現してくれた今回の国際交流。僕は、三好市の人々の思いに答えるため、現地で多くの異文化に触れて体験し、学んだことをしっかりと三好市の人々と共有し、これからの三好市の地域活性化に生かしていきたい。そして、三好市とダルズ市とのこれまで以上に良好な関係を築けられる国と国とを結ぶかけ橋となりたい。

僕は、大人になったら三好市で働き、日常の様々なところで税金をこれまで以上に納めることとなるだろう。しかし、次は僕のように国際交流をすることとなる中高生たちを税金で支えてあげることができる。税金は一つの恩返しなのかもしれない。

「税金は、空気に似ていると思う。」

南島原市立南有馬中学校３年　中村　うた

税金について考えた時、ふと思った事があります。それは「税金って空気みたいだな。」です。空気は、普段あまり意識しないけれどなくなったら一瞬で困るものだ。私たちは生きていく中で、当たり前のように空気を吸っている。でもその空気がなくなったら、息ができなくなってパニックになるだろう。税金も、日常ではあまり意識されなくなったけどなくなったら社会が成り立たない。そんな存在だと思った。例えば、道路が整っていて、信号がちゃんと動いている。学校に通って授業が受けられる。病院に行ける。ごみが毎週ちゃんと回収される。当たり前に見えるけれど、全部税金が使われている。つまり、税金は社会を動かす。見えない空気みたいなもので、みんなと暮らしを支えている存在です。

だけど、空気が汚れていたらどうだろう。息がしにくくなったり、体に悪影響が出たりする。同じように税金の使い方が汚れていたら、社会もおかしくなる。政治家の不正や、税金の無駄遣い。そういうニュースを聞くとまるで空気が汚染されたような気持ちになる。ちゃんと税金を払っている人が損する社会は、息苦しい。

だから私は、「払いたくなる税金」になってほしいと思う。ただ集めるだけじゃなくて「このお金がこう使われています」と分かりやすく見せてくれたら、もっと信頼できるし払う側も納得できるんじゃないか。見えないものだからこそ、透明でいてほしい。空気も税金も、きれいであることが大事だ。

まだ私は税金を払っていません。でもこれから大人になったとき、「税金を払う＝損する」ではなく、「社会に空気を送るようなもの」と思えるようになれたらいいなと思っている。

もう一つ、私が税金について考えるときに感じるのは、「誰のための税金か」ということだ。多くの人は、自分の生活のため、身近なサービスのためと思っているかもしれない。もちろんそれも大切だ。でも、自分以外の誰かのために使われる税金にも、意味があるんじゃないか。」たとえば、自分が使わないかもしれない障がいのある人の支援、子育て支援、高齢者の福祉。こういったものにもたくさん税金が使われている。自分が困ったとき、見ず知らずの人の税金が自分を支えてくれる。それって直接は顔を合わせないけど、つながりあっている社会だと思う。それが税金という形でできるなら、すごく意味のあることだと思った。

だからこそ、私は「税金＝ただのお金」とは、思わず、見えない誰かとつながるための信号のようなもの。今はまだ学生だけど、こうやって税金のことを知って、自分なりに考えることが、未来の社会づくりの第一歩になると思っている。

国民の納税義務と支援

玉名市立玉名中学校３年　　植埜　美優

私はここ最近、テレビニュースやネットニュースなどで「住民税非課税世帯へ給付金を給付する」などといった記事が取り上げられているのをよく目にします。私の家族のなかでも、「住民税非課税世帯ってなんだろう。」と話題になりました。

住民税非課税世帯とは、具体的にどんな人が該当し、なぜ給付金を受け取ることができるのでしょうか。

そもそも住民税とは、毎年一月一日時点で住所がある人に納税が義務とされている税金のことで、この税金は私たちの生活に関わる公共施設などで多く活用されています。しかし、住所はあっても収入が少ない人や、生活保護を受けている人、ひとり親世帯など地域によって異なりますが、これらに該当する人は住民税が免除されることになります。

直近では、住民税非課税世帯に一世帯あたり三万円、対象となる世帯のなかでも、子育て世帯においては子ども一人あたり二万円が上乗せされ給付されています。

住民税非課税世帯に給付金が給付されるのには大きな理由があります。

それは、物価高の影響を受けやすいということです。近年、日本では物価高が大きな問題となっており、特に食料品の値上げ、令和の米騒動といわれる米の価格高騰など、住民税非課税世帯だけでなく多くの家庭に影響を及ぼしています。住民税非課税世帯は、一般的な家庭よりも物価高の影響をより受けやすい環境にあるために、政府が給付金を給付してはどうかということになったのではないかと私は考えました。

この給付金が給付されたことで、制度の対象となった国民は大きな助けになったと思います。この制度は、多くの国民が税金を納めているからできる制度であって、納税の義務がなければ支援が必要な人への十分な支援が行き届かなくなり、今私たちの生活で当たり前に使うことができている公共施設なども運営できなくなります。そのために、一人一人が税金を納めることには大きな意味があり、とても重要です。

税金とは、人によって収入や所得が異なるため、納税する金額も異なります。ですが、多くの国民に納税の義務があることによって政府の給付金制度や各自治体における支援制度が作られ、支援が必要な人を助けることができるのだと私は思います。さまざまな税があることに対し、私は知識が少ない上に、未成年なので現時点でできることは限られています。ですが、学生の時から税に関して興味を持ち、知っておくことで大人になってからできることが多くあるのではないかと思います。私はさまざまな社会問題に目を向け、少しでも社会に貢献できる大人を目指します。

幸せをつなぐ輪

沖縄市立山内中学校３年　　金城　みのり

私が税を身近に感じたのは、最近体に赤い発疹ができていたときだ。かゆみがなかったので「病院に行くほどでもないかな」と思っていたけど、お母さんにすすめられて受診した。診察も薬もすべて無料だったので驚いた。これは税金で医療費が支えられているからだと知り、ありがたいと感じた。もし、お金がかかっていたら行かなかったかもしれない。でも、税金のおかげで気軽に安心して病院に行けることを実感した。

調べてみると、税金は学校の校舎、机や椅子、教科書、一人一台のパソコン、実験器具などに使われていて、私達は学ぶことができている。ほかにも医療や福祉、水道、道路の整備、警察や防衛など生活全体を支える大切なところにも税金が使われている。私は日常生活の中でいつも税に支えられていることを知り、税はなくてはならないものだと感じた。

では、その税は誰によって支えられているのか。私は「どんな人たちが税に関わっているのか」を調べてみることにした。

一つ目は税を扱う人。税が正しく収められているかチェックを行う税務署の職員。計算して市民に通知、徴収をする市役所や町役場の税務課職員。税制を企画、運営をする国税庁や地方自治体の職員。企業や個人が正しく税金を申告できるようにお手伝いをする税理士。二つ目は税金を活用する人。どこにどう税金を使うか予算を配分する市や県の行政職員。給料が税金で支払われている警察官や消防士、自衛隊員、教師などの公務員。三つ目は納める人。給料から税金を納めている働く人たち。消費税を通して税金を負担している買い物をする私たち。利益に応じて法人税を納める企業の方々。

つまり、税には「集める人」「使う人」「納める人」と多くの人たちが関わっている。つくり、つなげ、広がり、めぐって、みんなの幸せの「輪」となっている。この「輪」があるからこそ今の生活が続いているのだと思う。作文を書きながら、私は「いつもありがとう」という感謝の気持ちが湧いてきた。

私はまだ中学生なので税を払うなど直接関わってはいない。けれど、この「輪」を崩さないために、これからも税や社会に関心を持ち、税を無駄にせず、大切に正しく使っていくことが今の私にできることだと思う。そして何よりも、病院で安心して診察を受けられたり、学校で机や教科書を使って学べたりするのは、税のおかげであり、たくさんの人が関わってくれているからだ。私が将来税を納める時が来たら、今の安心した暮らしを守ってくれた恩返しとして、困った人を助けるような、みんなの幸せをつなぐ税を納めたい。さらに、私らしく社会の力になれる仕事に就き、税を納めていきたい。そして、この感謝の気持ちを繋げていきたい。この日常を、未来に受け継いでいきたい。